

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

当研究所は、特別史跡多賀城跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施している。発掘調査事業では、多賀城の歴史的意義を解明し、環境整備事業では、発掘調査成果に基づく史跡公園の整備、活用を目指している。

発掘調査事業は、多賀城跡の外郭線の解明を目的として外郭南西部の五万崎地区で調査を実施した。調査では、外郭南辺の区画施設である築地塀跡を発見し、外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に約 870m 延びており、一貫して築地塀であった可能性が高まった。また、五万崎地区の丘陵部を対象として実施した第 28 次調査で検出していた建物群がさらに南側へ展開することや、多賀城創建以前の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などがこの地区に存在することが判明した。これらの調査成果は、多賀城跡を解明するうえで重要な成果である。

環境整備事業は、政庁跡について、これまで未表示であった脇殿・楼・後殿・北殿等の整備を順次進めており、今年度は東脇殿と東楼の基壇を復元した。平成 26 年度には政庁跡の再整備が完了する予定である。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に感謝申し上げる次第である。

また、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災に際しては多くの方々にご支援を賜り、たくさんのお見舞や激励の言葉を頂いた。所員一同心から御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所

所 長 佐藤 則之

目 次

I. 東日本大震災の被害状況とその対応	1
II. 調査研究事業の計画変更	1
III. 第 83 次調査	3
1. 調査の目的と経過	3
2. 調査の成果	7
3. 総括	56
IV. 付章	63
1. 震災被害の発生状況	63
2. 関連研究・普及活動	64
3. 組織と職員	66
4. 沿革と実績	67

調査要項

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 小林 伸一）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 佐藤 則之）
調査員	佐藤則之・古川一明・三好壯明・吉野 武・三好秀樹・廣谷和也
調査期間	平成 23 年 6 月 14 日～平成 23 年 11 月 8 日
調査面積	約 640㎡
調査参加者	佐藤一郎・鈴木 昇・蛭澤 勲・相沢秀太郎 伊藤とし子・佐藤寿子・菅原みつ枝・蜂谷みよの（多賀城跡調査研究所臨時職員） 秋山綾子・川口 亮・工藤麻衣子（東北大学大学院） 熊谷亮介（東北大学）
整理参加者	佐久間順子・木村歩・高橋里枝（多賀城跡調査研究所臨時職員）

例 言

1. 本書は、平成 23 年度に実施した多賀城跡第 83 次調査成果と、多賀城跡環境整備、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ 1° 04′ 東に偏している。
政庁正殿と政庁南門の測量原点の平面直角座標値は、昭和 61 年の改測・改算結果により以下のとおりである。

政庁正殿	日本測地系（第 10 系）	X 座標：-188276.1240 m、Y 座標：13857.2850 m、標高：33.268 m
	世界測地系	X 座標：-187967.2834 m、Y 座標：13557.1698 m
政庁南門	日本測地系（第 10 系）	X 座標：-188654.5100 m、Y 座標：13850.8870 m
	世界測地系	X 座標：-188345.6730 m、Y 座標：13550.7795 m

日本測地系は旧日本測地系（T.D.）を、世界測地系は日本測地系 2000（J.G.D.2000）を意味する。
※ 東日本大震災による基準点の変動量の確認およびその補正については来年度に再測量を実施する予定である。
4. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 図録編』、『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社（1996 年）にもとづいた。
6. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
7. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』、『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』で紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
8. 本書は、所員で討議と検討を行い、古川一明・三好秀樹・廣谷和也が分担して執筆し、三好が編集した。

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：調査地区を南西より撮影】

I. 東日本大震災の被災状況とその対応

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とその後の一連の余震は、特別史跡多賀城跡附寺跡の所在する宮城県沿岸部の多賀城市域にも多くの被害をもたらした。とりわけ、市域南側のおよそ 3 分の 1 が津波の浸水による極めて甚大な被害を受けた。

海岸線から離れた多賀城市北部に位置する特別史跡多賀城跡附寺跡周辺は、津波による被害は免れたものの、史跡内各地で施設の破損・亀裂などの地震被害が発生し、地割れ・陥没・噴砂などが生じた場所もあった。史跡内で発生した地震被害のうち、復旧を要すると判断された箇所は 11 箇所にとぼる（第 1 表）。これら被害状況の把握とその復旧にあたっては、史跡の管理団体である多賀城市と当研究所が協議しながら分担して作業を進めており、当研究所としては、平成 23～24 年度の調査・整備計画の内容を変更し、復旧事業に優先的に取り組んでいる。

番号	地区	施設名	破損部位・数量	状況	復旧分担
1	全体	基準点	35 点	地震による変動	研究所
2	政庁地区	正殿・南門基壇	上面アスファルト舗装	歪み・亀裂	研究所
3	南門地区	トイレ	合併浄化槽・屋根瓦・石垣	破損・使用不能	研究所
4	東門地区	トイレ	合併浄化槽	破損・使用不能	研究所
5	作貫地区	露出展示覆屋・東屋	廂支柱・石敷	基部破損・亀裂・崩れ	研究所
6	大久保地区	園路・東屋	舗装・石段・柱基礎	継ぎ目の剥離・割れ	多賀城市
7	六月坂地区	遊歩道	歩道	岩盤崩落・亀裂	多賀城市
8	多賀城廃寺	園路・トイレ	石段・排水溝	ズレ・漏水	多賀城市
9	館前遺跡	遺跡	斜面	亀裂	多賀城市
10	柏木遺跡	園路・擁壁・U字溝	園路・擁壁の継ぎ目	亀裂	研究所
11	収蔵庫	博物館収蔵庫	遺物収納棚	倒壊・整理箱転倒	博物館

第 1 表 特別史跡多賀城跡附寺跡関係施設等の主な被害状況

II. 調査研究事業の計画変更

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの各事業を計画的・継続的に実施している。しかし、平成 23～24 年度は、前述した東日本大震災の被害に対応するため、各事業の計画を変更して実施した。ここでは、主要事業である多賀城跡の発掘調査事業の内容について記し、その他事業の概要については付章に収録する。

多賀城跡の発掘調査は、昭和 44 年の研究所設立以後は多賀城跡調査研究指導委員会、平成 17 年度からは多賀城跡調査研究委員会の指導の下で、5 ヵ年計画を立案し実施している。今年度は第 9 次 5 ヵ年計画（第 2 表 A）の 3 年度目に当たり、五万崎地区を対象に第 83 次調査を実施した。来年度は災害復旧作業に伴う正殿跡の再調査を緊急に実施するため、計画を第 2 表 B のように変更した。

氏 名		職	専門分野
委員長	須藤 隆	東北大学名誉教授	考古学
副委員	今泉 隆雄	東北大学名誉教授	古代史学
委員	飯淵 康一	宮城学院女子大学教授	建築史学
委員	鈴木 三男	東北大学大学院教授	植物学
委員	佐藤 信	東京大学大学院教授	古代史学
委員	近江 隆	東北大学名誉教授	都市工学
委員	平川 南	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 館長	古代史学
委員	進士五十八	東京農業大学名誉教授	造園学
委員	松村 恵司	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所長	考古学

多賀城跡調査研究委員会（任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日）

年 度	次 数	発掘調査対象地区	調査面積	調査の目的
平成 21 年	81 次	外郭南辺（鴻ノ池・政庁南西地区）	900㎡	外郭南辺の検討・政庁地区補足調査
平成 22 年	82 次	外郭東辺（伊保石地区）	580㎡	外郭東辺の検討
平成 23 年	83 次	外郭南辺（五万崎地区）	640㎡	外郭南辺の検討（本年度）
平成 24 年	84 次	外郭北辺（丸山地区）	1,000㎡	外郭北辺の検討
平成 25 年	85 次	外郭北辺（六月坂地区）	1,000㎡	外郭北辺の検討

第2表A 第9次5ヵ年計画（変更前）

年 度	次 数	発掘調査対象地区	調査面積	調査の目的
平成 21 年	81 次	外郭南辺（鴻ノ池・政庁南西地区）	900㎡	外郭南辺の検討・政庁地区補足調査
平成 22 年	82 次	外郭東辺（伊保石地区）	580㎡	外郭東辺の検討
平成 23 年	83 次	外郭南辺（五万崎地区）	640㎡	外郭南辺の検討（本年度）
平成 24 年	84 次	外郭南辺（五万崎地区）	1,000㎡	創建期外郭南辺の検討
	85 次	政庁正殿（政庁地区）		正殿跡の再検討
平成 25 年	86 次	外郭北辺（六月坂地区）	1,000㎡	外郭北辺の検討

第2表B 第9次5ヵ年計画（変更後）

Ⅲ. 第 83 次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

平成23年度は多賀城跡発掘調査第9次5ヵ年計画の3年目にあたる。本計画は外郭施設の調査データを更に集積し、その様相を明らかにした上で本報告書を作成することを目的としており、今年度は外郭南辺西端部を対象に五万崎地区の調査を実施した（図版1・2）。

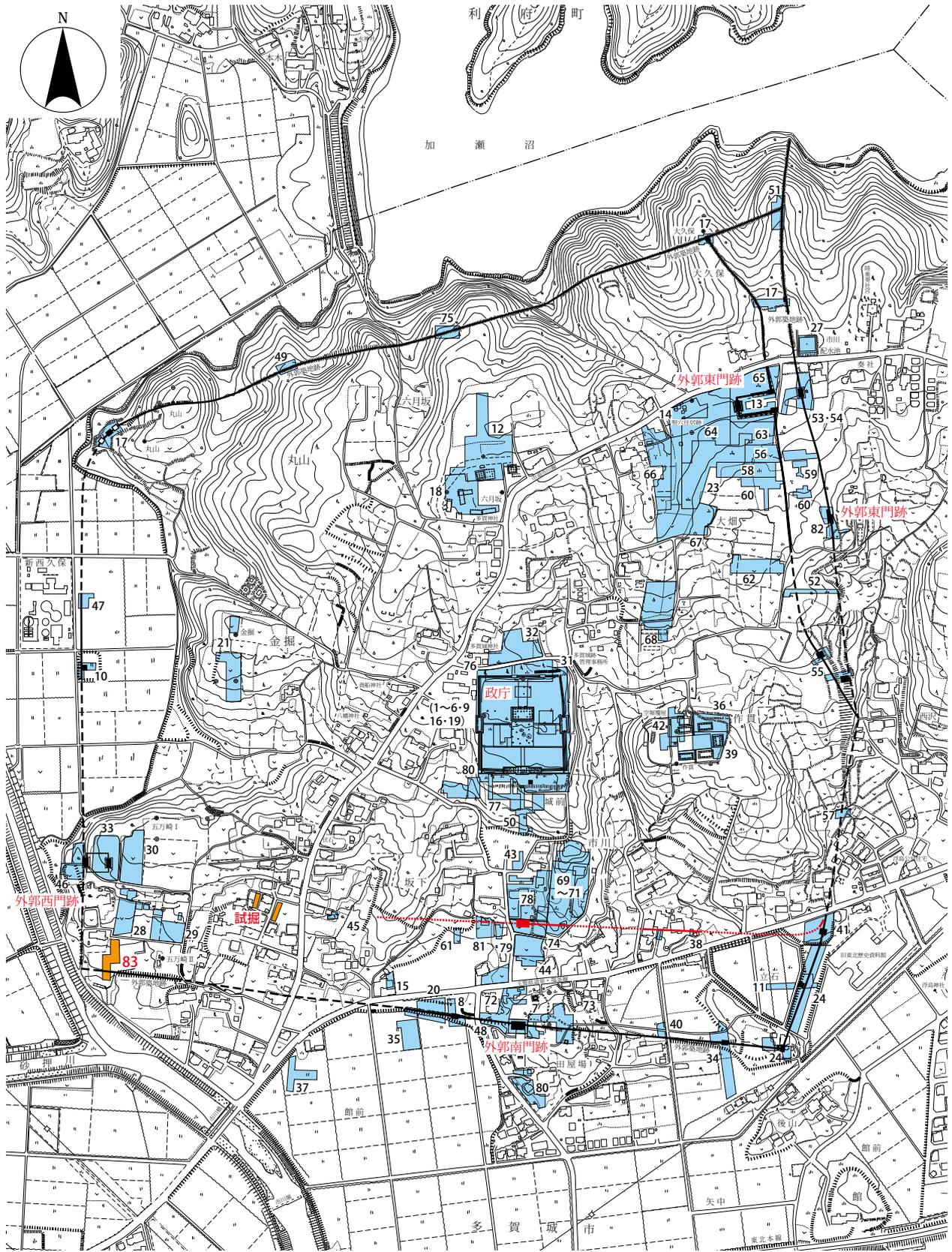
調査地点は政庁跡の南西方約500mに所在し、外郭西門跡の南約130mで、推定される外郭南西隅からはやや東に位置している。この場所は、城内の地形を二分するように北東から南西の沖積地へ下る丘陵尾根の末端から西側へ張り出した小丘陵の南斜面にあたり、調査区東側の林の中には外郭南辺築地塀跡とみられる土手状の高まりが残る（図版1）。

本調査の目的は、この土手状の高まりの延長線上に想定している外郭南辺西端部で区画施設の位置を確認し、その構造や変遷、櫓の有無など、外郭南西隅の状況を把握することである。また、第28次調査（年報：1977）で検出している掘立柱建物群の南側への拡がりを捉え、区画内部に配された施設の様相を把握することも調査目的の一つである。

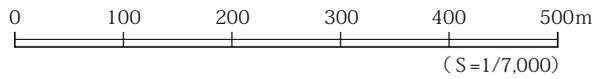
なお、今年度は本調査区から北東方約200mの地点（図版2の「試掘」地点）を対象とした試掘調査も行っている。この場所は、近年の調査で発見した掘立式八脚門（SB2776）とこれに接続して東西に延びる塀の西側延長線上にあたる。この区画線の延びを確認し、その時期や塀の構造を明らかにするための予備調査である。



図版1 第83次調査区_遠景



- 過去の調査区 (数字は調査回数)
- 第83次調査区・試掘調査区



図版2 第83次調査区の位置

(2) 調査の経過 (図版2・3)

調査期間は6月14日から11月8日までである。

まず、五万崎地区の南部に埋設されている「五万崎Ⅱ」、「五万崎Ⅱ X」、「五万崎Ⅱ Y」の基準点を使用して調査対象地区の発掘座標を算出し、調査の基準杭を設置した。

対象地(五万崎38-1・9番地)は丘陵裾部の緩やかな南斜面で、その南端部は高さ1.2m程の段が付いて低くなっている。段より南の低い部分は昭和20年代に実施された砂押川の一次河川改修の際に土取りされた結果生じたもので、段の法面の東側には外郭南辺築地塀跡とみられる土手状の高まりが残っている。公有地化される以前は、対象地の大半が畑地として利用されていた。

外郭南辺の推定線を横切り、その北側(内側)へ延びる南北に長い調査区を基準杭に基づいて設定し、6月14日から手作業で表土除去を開始した。表土除去は調査区の南北中央線上をトレンチ状に掘り下げ、遺構面までの深さや遺構の残存状況を把握することから始めた。この段階で、北半部に礫群や柱穴群、南半部に整地層や堆積層が分布することを確認していたが、区画施設の有無は確認できていなかった。

その後、6月21・22日に重機で残りの表土除去を行い、6月28日から全体の遺構精査に着手した。調査区北半部は表土下が地山面、南半部は表土下に暗褐色～黒褐色の堆積層が残存しており、精査は北端から南へ向かって進めたが、外郭南辺の推定線上にあたる南半部では区画施設の有無を確認するために先行して調査区東・西の壁際を約1.0m幅で断ち割り(東・西壁トレンチ)、地山面まで掘り下げた。

その結果、調査区南端近くの法面で確認していた整地層が築地塀跡(SF3050 a)の基底部積土であることが判明した。築地塀は東西方向に延び、ほぼ外郭南辺の推定線上に位置することから外郭南辺の区画施設と判断されるが、本体の大半が削平によって失われており、地表面ではその存在を認識できない状況であった。この築地塀の南北両側では、整地層や溝など区画施設に関係する遺構を検出し、さらに北側(城内側)の堆積層下では土壌群が複雑に重複していることも判明した。また、築地塀よりも古い竪穴住居跡や柱穴、溝などの存在も確認している。そこで、築地塀と整地層や内溝の関係、土壌の重複関係などをより詳細に把握する目的で調査区南半の中央を南北に縦断する中央トレンチを設け、遺構の掘り下げや断ち割りを実施した。

遺構の分布状況を見ると、調査区南端部に外郭南辺築地塀とこれに伴う整地層や溝などが存在する。築地塀の内側から調査区中央にかけては竪穴住居や竪穴遺構、土壌が集中し、中央から北部は大型の掘立柱建物跡を中心とした建物群と多数の溝が展開している。中央付近で検出した掘立柱建物(SB3093～3095)は竪穴住居や土壌群などと重複し、基本的にこれらより新しいが、双方の埋土の土質・色調が近似していたために柱穴を認識するのに時間を要した。なお、当初は礫群と捉えていた北部の遺構は不整形に掘り込まれた窪みの中に礫が集中するものであったため、集石遺構(SX3105)として扱った。

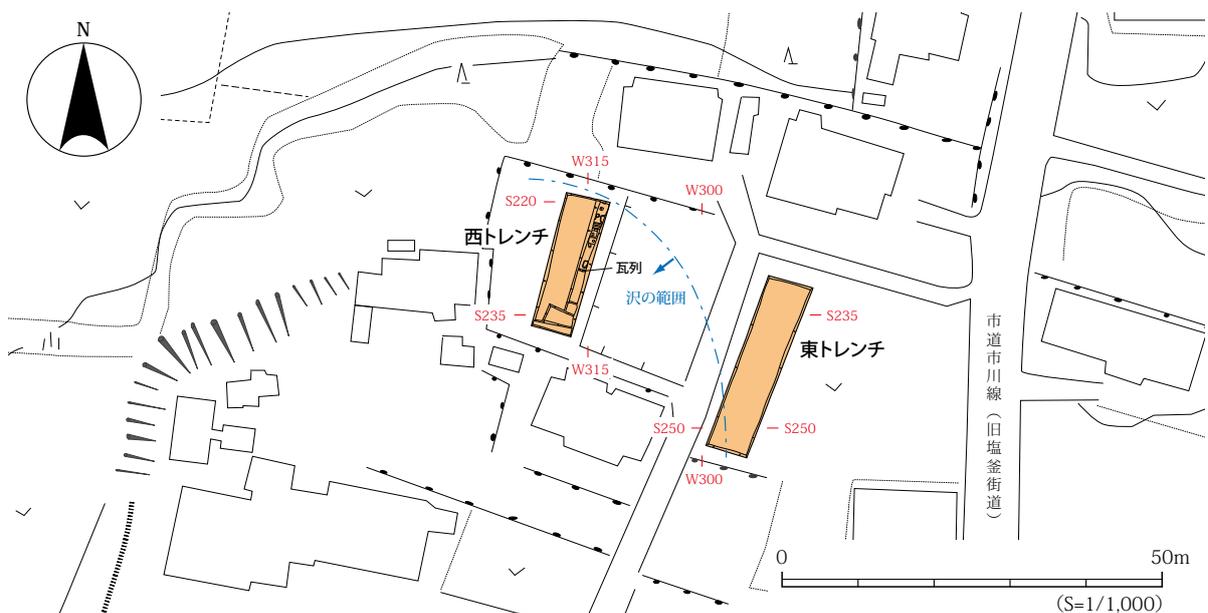
これらの遺構については必要に応じて詳細な調査を行い、その記録は1/20図面の作成とデジタルカメラによる写真撮影で行った。11月8日には精査および記録作業のすべてが終了した。調査区

の埋め戻しは、重機を用いて遺構面を山砂で保護した上に調査時の残土を戻すかたちで行い、11月25日に終了している。調査面積は約640㎡で、検出した遺構には整理作業の段階で仮番号を改め、3040番から遺構番号を付した。

その間、10月12日にラジコンヘリによる航空写真の撮影、10月13日に報道機関への発掘調査成果の公表を行い、10月15日には一般を対象とした現地説明会を開催している。現地説明会では約100名の参加者が得られた。さらに、10月20日には多賀城跡調査研究委員会を開催し、調査成果に関する指導を受けた。その他、調査終了後の12月10日には平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成24年2月25日には第38回古代城柵官衙遺跡検討会において成果の概要を報告した。

また、調査期間中に五万崎地区北東部（五万崎28-1～4番地、図版3）の試掘調査を実施している。この場所は、第83次調査区が立地する小丘陵と城内の地形を二分して北東から南西の沖積地へ下る丘陵尾根との接続部にあたる南斜面で、現在の階段状に切り盛りされた地形は宅地造成によって生じたものと考えられる。この南斜面を対象として8月2・3日に重機で南北方向に長いトレンチ2本を東西20m程の間隔で設け、旧地形や遺構の残存状況を確認する予備調査を行った。その結果、各地点の旧地形は西トレンチが南から入り込む沢の内部、東トレンチはその沢に向かって南西方向に傾斜する丘陵斜面であることが判明した。

沢の内部に位置する西トレンチの東壁際を約2.0m幅で深掘りすると、深さ1.6m程掘り下げた中央部で瓦を東西方向に隙間なく並べた瓦列を検出した。この瓦列を境に北側は旧表土が削り取られて盛土整地されており、整地によって造り出された平坦面（平場）が2面残る。各面では一辺1.0m前後の柱穴や溝などを確認しているが、これより下層および瓦列の南側では遺構は検出されず、目的としていた区画施設の存在を確認することはできなかった。なお、検出した平場の上部には灰白色火山灰（10世紀前葉頃降灰）の堆積が認められる。東トレンチでは、厚さ0.3m程の表土直下で柱穴や土溝、整地層、堆積層などを検出した。確認作業をこの面で止めたために下層の状況が未確認で、区画



図版3 試掘調査区の位置

施設の存在については判然としない。

試掘の結果、いずれのトレンチでも区画施設の存在を確認することはできなかったが、東トレンチ周辺は旧地形が緩やかな南西斜面で、表土下に古代の堆積層を残すなど後世の削平が下層まで及んでいない箇所もみられることから区画施設を探す上で条件が良い。そこで、来年度は東トレンチ周辺を対象に範囲を拡張して本調査（第84次調査）を実施する予定である。

2. 調査の成果

(1) 基本層序（図版4）

五万崎地区は外郭南西隅に位置し、城内を北東から南西へ下る尾根筋から西側へ張り出した小丘陵が台地状の地形を形成している。この台地の南西裾部に調査区を設けており、遺構検出面の標高は11.1～16.0 mである。調査区内の地形をみると、全体に緩やかに南側へ傾斜しており、南部北半でやや傾きが強くなる。また、南部南半は後世に大きく削り取られ、高さ1.2 m程の段が付いて低くなっている。調査区から南へ下りきった約100 m先では、外郭西辺の西側を南流する砂押川と名古屋川の二つの河川が合流している。

調査区内の基本層序は8層に大別される。北半部は削平を受けて表土（第Ⅰ層）直下がほぼ地山面（第Ⅷ層）となっており、第Ⅱ・Ⅲ層は主に南半部に分布している。第Ⅳ～Ⅶ層は南半部に設けた3本のトレンチ内で確認した堆積層、旧表土で各層の拡がりや前後関係を十分には捉えられていない。以下に層序の特徴を記す。

【第Ⅰ層】暗褐～黒褐色（10YR3/4～7.5YR2/2）シルトの表土層で、調査区全体を覆う。厚さは0.2～0.5 mで、暗褐色の盛土（第Ⅰa層）とそれ以前の表土・耕作土（第Ⅰb層）に細分される。

【第Ⅱ層】暗褐～黒褐色（10YR3/3～10YR3/2）のシルト～砂質シルト層で、調査区中央からSF3050築地堀跡北側にかけてとSF3050南側の西部に分布する。厚さは0.05～0.35 mで、層上端部が部分的に第Ⅰb層と攪拌されている。本層の上面で検出したSK3116土壌は、素掘りの井戸もしくは井戸枳材の抜取穴の可能性があり、その堆積土上位から近世磁器片が出土している。また、東壁トレンチの断面観察では本層下に位置するSK3072土壌の堆積土上位で灰白色火山灰層を確認した。このことから、第Ⅱ層が形成されたのは、古代末以降、近世以前と考えられる。

【第Ⅲ層】黒褐色（10YR3/1）シルト層で、調査区南部のSF3050北側に分布する。層中に焼土・炭化物粒を含み、厚さは0.1～0.5 mで、南西側へ向かって徐々に厚みを増す。西壁トレンチの断面観察では、第Ⅱ層下に位置し、広範囲に拡がるSK3072の上部を覆って堆積しており、古代末頃の形成年代が想定される。

【第Ⅳ層】黒褐色（7.5YR2/2～10YR2/2）シルト層で、調査区南東部のSF3050北側から中央南寄りにかけてと中央部の北西端に分布するとみられる。中央・西壁トレンチでは検出していないが、東壁トレンチの断面観察で確認しており、SK3072・3085土壌より古く、地山面

で検出したSK3069・3086土壌とSX3051 b 整地層の上部を覆って堆積している。また、SK3068は本層の形成途中で掘り込まれており、この掘り込み面を境にして上位の第IV a層と下位の第IV b層に細分される。厚さは0.1～0.3 mで、層中に炭化物の薄層と炭化物粒を含む。旧表土などの間層が認められず、直接地山面に堆積していることから、本層が形成される前に当時の地表面は地山面まで削平を受けていると考えられる。

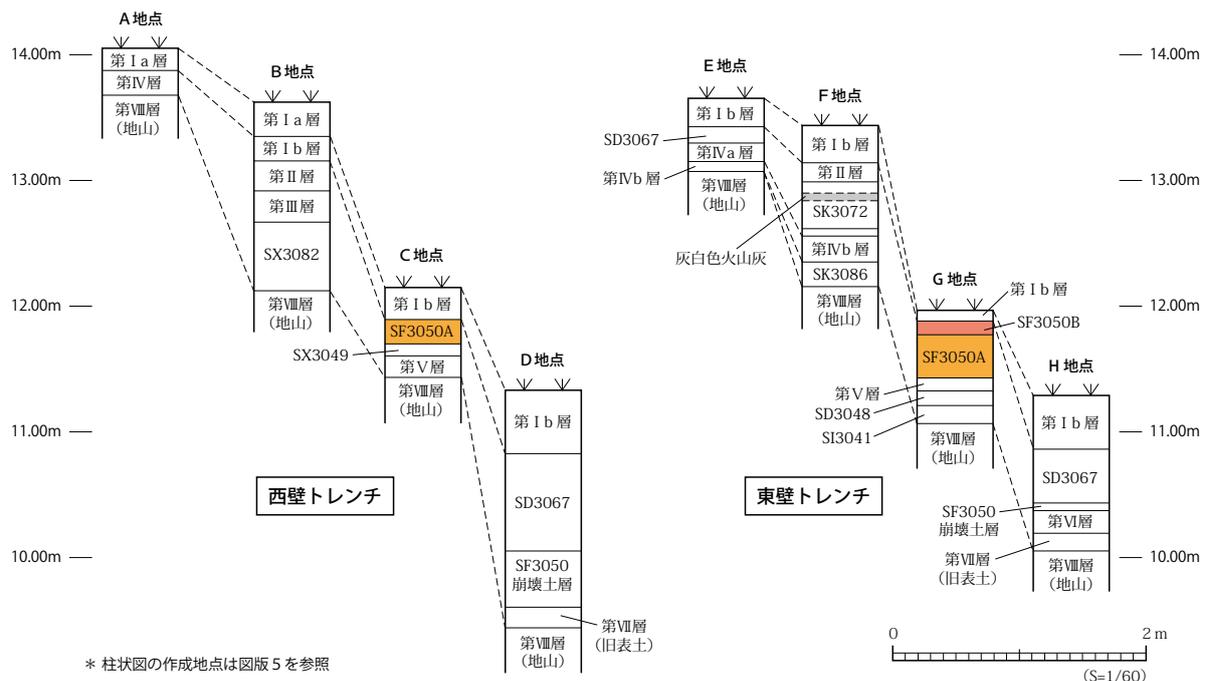
【第V層】暗褐～黒褐色（10YR3/3～10YR3/2）シルト層で、調査区南部のSF3050下に残存している。東壁・中央・西壁トレンチの断面観察で確認しており、SF3050、SX3049 整地層より古く、地山面で検出した柱穴や土壌、溝などの上部を覆って堆積している。厚さは0.1～0.3 mで、層中に砂の小ブロックと炭化物粒を含む。本層も地山面に直接堆積しており、形成以前の地表面が地山面まで削平を受けている可能性がある。

【第VI層】黒褐色（10YR3/2）シルト層で、東壁トレンチ内のSD3060溝とSD3067溝の間でのみ確認している。旧表土（第VII層）直上に堆積しているが、第V層との前後関係や分布範囲については捉えられていない。厚さは0.2 m程で、層中に地山ブロックを含む。

【第VII層】黒褐色（7.5YR2/2）シルトの旧表土で、東壁トレンチ内のSD3060溝北側の僅かな範囲とSD3060・3067両溝の間、西壁トレンチの南端部で確認している。厚さは0.1～0.25 mで、地形に添って南側へ傾斜し、厚みを増す。調査区内にはほとんど残存しないとみられる。

【第VIII層】主に黄褐色（10YR5/8）の粘土質シルト層で、地山土である。これより下層はにぶい黄褐色（10YR6/3）の砂層、明黄褐色（10YR6/6～10YR7/6）の粘土層となっている。

本調査区とすぐ北側に位置する第28次調査区（年報：1977）との基本層序の対応関係をみると、双方の第I層は表土で共通している。第II層も土質・色調が近似し、同様に古代末（中世）以降、近



図版4 第83次調査区_基本層序柱状図

世以前に形成された堆積層と考えられることから、ほぼ対応するとみられる。第 28 次調査区の南半部に分布する地山直上に積まれた盛土整地層（第Ⅲ層）の続きは、本調査区では確認できなかった。本区北半の表土（第Ⅰ層）下が著しく削平されているためとみられる。但し、層として分布範囲を捉えることはできなかったが、北部の第Ⅰ層下には褐灰色シルトとにぶい黄褐色粘土のブロック混じり土（焼土の混入なし）が局部的に残っており、第 28 次調査の第Ⅲ層は本区北部まで広がっていた可能性がある。

（２）発見遺構と出土遺物（図版 5）

発見した遺構には、築地塀跡 1、掘立柱建物跡 12、柱穴列跡 1、竪穴住居跡 6、竪穴遺構 1、杭列跡 1、集石遺構 1、土壇 31、溝 14、溝状掘り込み 2、整地層 7、ピット多数などがある。調査区の北部から中央にかけては大型の掘立柱建物跡を中心とした建物群が展開し、集石遺構や溝などがみられる。中央から南部にかけては竪穴住居跡や竪穴遺構、土壇が集中し、南端部で確認した築地塀跡や整地層、溝などは外郭南辺の区画施設に関係するものである。

各遺構や堆積層、表土からは、弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器、緑釉・灰釉陶器、中世陶器、瓦質土器、近世陶磁器、硯、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、鉄製品、鉄滓、木製品、土製品、石製品、石器などが出土している。

以下では、主な遺構とその出土遺物についてまとまりごとに概要を記載し、堆積層や表土から出土した主な遺物についても説明を加える。

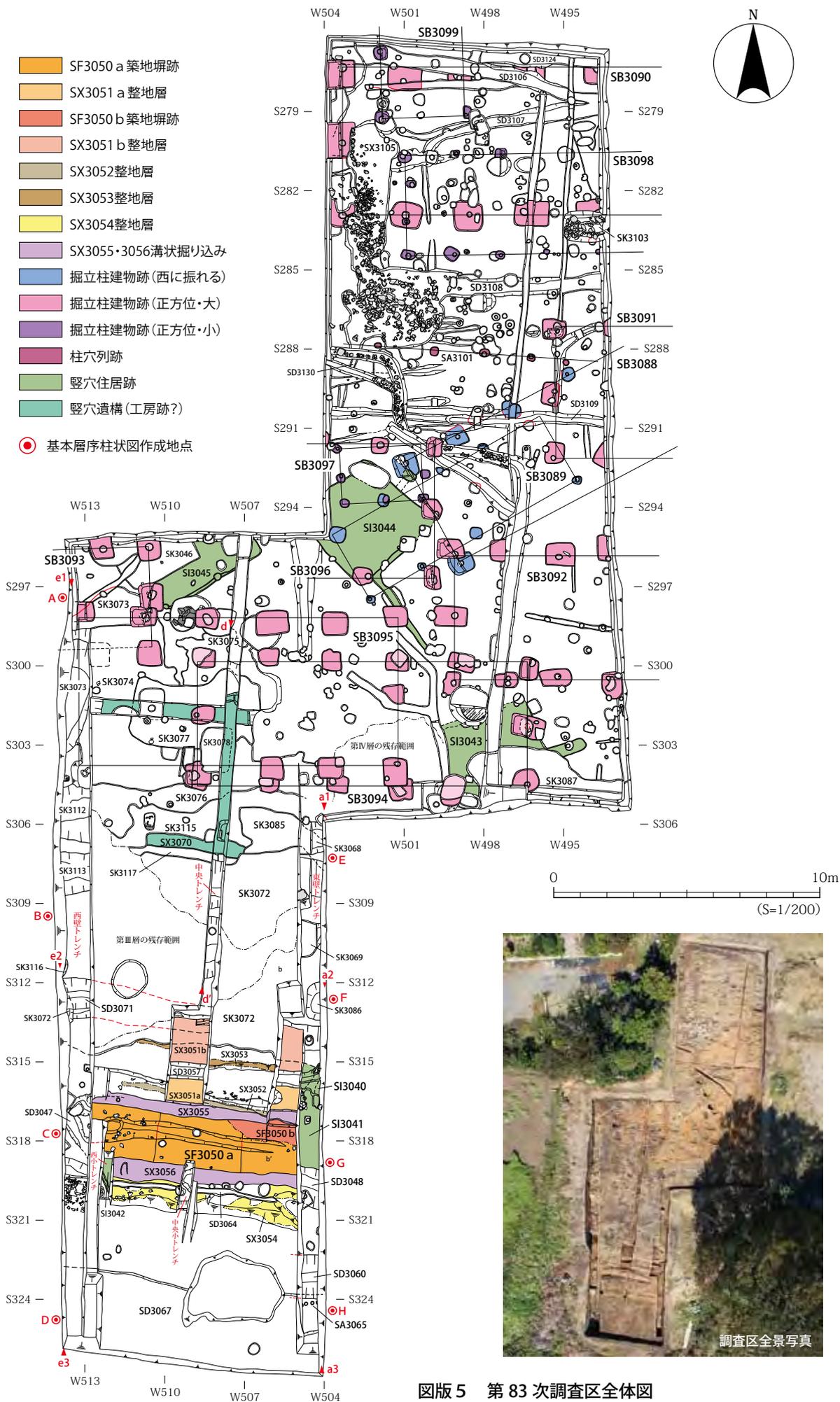
i. 外郭南辺の区画施設

調査地点は、東から延びてきた土手状の高まりが途切れ、地表面で区画施設の存在を確認できない場所である。しかし、調査の結果、これまでに判明している外郭南辺築地塀の西側延長線上で東西に延びる築地塀跡を発見し、整地層や溝、溝状掘り込みなど区画施設に関係する遺構を検出している。

【SF3050 築地塀跡】（図版 6～12）

調査区南部を精査した結果、東西方向に延びる SF3050 a 築地塀跡とその基礎整地である SX3049 整地層、北側（城内側）の犬走りとみられる SX3051 a 整地層を検出した。また、SF3050 a の上部を削り取って新たに SF3050 b 築地塀跡を積み直したとみられる版築土、築地塀の北側を嵩上げした SX3051 b・3052・3053 整地層とその上面から掘り込まれた SD3057・3058・3071 溝、南側を嵩上げた SX3054 整地層を検出し、築地本体の南北両肩を壊すかたちで東西に延びる SX3055・3056 溝状掘り込みを確認している。これらの遺構の存在から築地塀が修築や改築を繰り返しながら長期間に渡って維持されていたことが窺われるが、後世の削平が著しく、明確に確認できた築地本体は 1 時期（SF3050 a）のみである。

築地塀部分の掘り下げ、断ち割りは東壁・中央・西壁トレンチおよび中央小・西小トレンチで実施している。各トレンチの断面観察を踏まえると、SF3050 b は SX3051 a・SX3051 b・SD3057 と組み合わせる可能性が高い。また、SX3052・SD3058 と組み合わせる SF3050 c 築地塀跡、SX3053・



図版5 第83次調査区全体図

SD3071 と組み合う SF3050 d 築地塀跡の存在が予想される。

SF3050 築地塀は SD3062・3063・3064 溝より古く、SI3040・3041・3042 住居跡、SK3110 土壙、SD3047・3048 溝より新しい。

《SF3050 a 築地塀跡、SX3049・3051 a 整地層》(図版 6～10)

築地塀造営以前の地形をみると、調査区南部では竪穴住居や土壙、溝などの古い遺構が埋没し、南部南半にはこれらの上部を覆う第 V 層の分布も認められ、全体に北から南へ向かって緩やかに傾斜している。この傾斜地の斜面上方にあたる北側を段状に削り出して南北幅 5.3～7.5 m の比較的平坦な面を造成し、そのほぼ中央に SF3050 a 築地塀跡が築成されている。築地下までの断ち割りを実施した各トレンチで断面を観察すると、東壁トレンチでは削り出した面に SF3050 a 本体が直接積まれており、他のトレンチでは削り出した面を均すかたちで盛られた SX3049 整地層上に SF3050 a 本体が認められる。SX3049 は地山ブロックと炭化物粒を含む灰黄褐～暗褐色シルト層で、厚さは 0.05～0.2 m あり、南側の斜面下方に向かって厚さを増している。

SF3050 a の大半は削平により失われているものの、調査区を東西に横断して延びる築地基底部の積土が幅 2.2～2.4 m、高さ 0.3 m 程で残存していた。しかし、この基底部についても南北両壁は SX3055・3056 溝状掘り込みによって壊されており、正確な基底幅や方向を捉えることは難しい。但し、東壁トレンチの断面観察(図版 8 の断面①)では基底幅は最大でも 2.8m 以下となり、2.7m 前後の可能性が高い。築地塀の方向は、残存する基底部の中軸線でみると発掘基準線に対し、西で約 5°北に偏している。積土の版築は細かい単位で行われており、5～15cm の厚さに大別できる。大別層は明褐～黄褐色シルトと暗褐～黒褐色シルトを主体とする層が互層をなす。積手の違いは W 507・W 510 付近の 2 箇所を確認し、双方の間隔は概ね 3.2 m である。

また、SF3050 a の北側には同様に SX3049 直上もしくは削り出した面に直接盛土整地した厚さ 0.15～0.3 m の SX3051 a 整地層が認められる。SX3051a は地山土を主体とした黄褐～暗褐色の粘土質シルト層(中央トレンチ内ではやや砂質)で、SF3050 a に沿って幅約 1.0 m で東西方向に延びており、上面の標高が 11.9 m でほぼ一定している。両者の関係は、接合部を SX3055 に壊されているため判然としないが、同一面上に積まれており、底面の高さが一致していること、双方の間に間層が認められないことなどから、SX3051a は SF3050 a を版築した後にその北側に寄せ付けて設けられた犬走り状の整地層と考えられる。その結果、SX3051a 北端と最初に削り出された北端の法面との間が溝状に低くなっている。なお、SF3050 a は底面から連続して細かい単位で丁寧に版築されており、SX3051a とは積土の状況が大きく異なることから、その積土全体を築地本体と捉えた。

SF3050 a の北側では、SX3051a 上で黄褐～褐色土ブロックを多量に含む褐灰～灰黄色シルトの築地崩壊土層(a 層)を確認している。また、東壁トレンチ内の削り出し面北端部には黒褐色シルト層の堆積が認められた。

南側では、削り出し面もしくは SX3049 上に直接載り、そこから斜面下方にかけて分布する明褐～黄褐色土ブロック主体の層と暗褐～黒褐色土ブロック主体の層が互層状に堆積した築地崩壊土層を

確認している。また、西壁トレンチ内ではこの崩壊土中に瓦片が集中する層（図版9の断面①と写真、瓦片は未採取）も認められた。しかし、この崩壊土層とSF3050 aとの間がSX3056によって壊されて断絶しており、SX3051 aに対応する整地層も存在しないため、その詳細な帰属を捉えることができない。

遺物は、築地積土から土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。また、削り出し面北端部の堆積層から平瓦Ⅱ B類が1点出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

なお、帰属期を特定できないが、西壁トレンチ内のSF3050 南側斜面に位置する瓦集中層を検出した際に取り上げた遺物として、丸瓦Ⅱ類が4点、平瓦Ⅱ B類が8点、平瓦Ⅱ C類が1点ある。

《SF3050 b築地塀跡、SX3051 a・b整地層》（図版6～10）

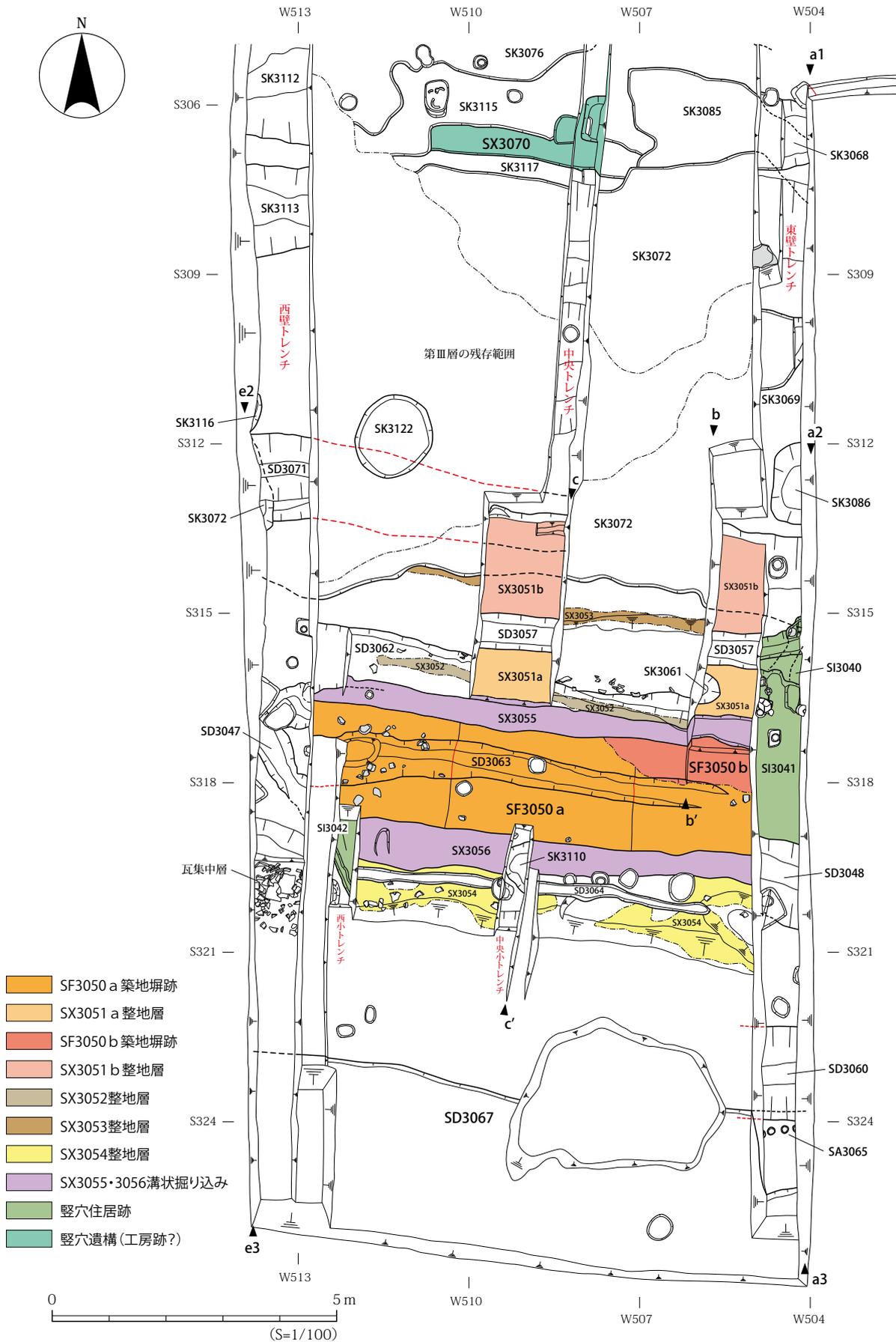
SF3050 a築地本体の上部をほぼSX3051 a整地層上面の高さまで削り取り、新たにSF3050 b築地本体を積み直したとみられる版築層を検出した。この版築層はSF3050 a直上の南東部に位置し、SF3050 aの積手の違い（W 507付近）を覆って東西3.5 m以上、南北0.7 mの範囲に残存している。東壁トレンチの断面観察（図版8の断面①）では、この版築層がSF3050 aの上部全体に東西幅1.7 mで認められ、厚さは0.05～0.1 mで、積土の版築は細かい単位で行われている。積土は5 cm前後の厚さに大別され、褐色シルト層と黒褐色シルト層の互層である。築地本体とみた場合、南北両壁はSX3055・3056溝状掘り込みによって壊されている。

SF3050 bの版築以前にSF3050 aとその北側崩壊土層（a層）がほぼSX3051 a上面の高さまで削り取られている状況（図版8の断面①・②）を踏まえれば、SX3051 aもしくはその上部に残る崩壊土層上面がSF3050 b期にも犬走り面として利用されていたと考えられる。また、この時期にはSF3050 a構築の際に削り出した北側の段を埋め戻すかたちで行われたSX3051 b整地層が東壁・中央トレンチ内で確認されており、このSX3051 bとSX3051 aの間には築地北側の排水を目的としたSD3057溝が設けられていた。SX3051 bは地山ブロックを多量に含む黄褐～暗褐色の粘土質シルト層（中央トレンチ内ではやや砂質）で、東西5.6 m以上、南北1.4～1.9 mの範囲に分布しており、厚さは東壁トレンチでみると0.15 m前後ある。

SF3050 bの築成が広範囲に及ぶ築地塀の修築であったか、もしくは部分的な補修であったかを判断することは難しいが、西壁トレンチ内ではSF3050 a築地本体がSX3051 a上面から0.2 m程の高さで残存し、SX3051 bも認められないことから、この場所まではSF3050 bの築成が及んでいなかった可能性が高い。

SF3050 bの北側では、SX3051 b上に築地崩壊土と周辺から流入した砂や暗褐～黒褐色シルトが混じり合った状態で堆積している。また、東壁トレンチ東壁断面で確認したSX3051a上に堆積する黄褐～褐色土ブロックを多量に含む褐灰色シルト層（図版8の断面①のb層）はSF3050 b期の築地崩壊土とみられる。南側については、前述の通り崩壊土層の詳細な帰属を捉えることができない。

遺物は、SX3051 b中から土師器甕、平瓦Ⅱ B類aタイプ、土錘が出土している。また、SX3051 b上の堆積層から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅱ B類aタイプが出土し



図版6 第83次調査区_分割図(南部)

ている。いずれも小破片で、図示できるものはない。

《SF3050 c 築地塀跡、SX3052 整地層》(図版6～12)

SF3050 a・b築地本体の北側にあたるSX3051 a・b整地層上を0.3 m前後嵩上げしたSX3052 整地層を東壁・中央トレンチ内で検出した。この嵩上げに伴って新たに築成されたSF3050 c築地塀跡の存在が想定されるが、削平されて現存しない。また、SX3052を南北に二分するかたちでその上面から掘り込まれたSD3058溝を検出しており、築地北側の排水を目的とする溝と考えられる。このSD3058がSD3057溝とほぼ重なる位置で東西方向に延びている状況から、SF3050 cの築成位置はSF3050 a・bとほぼ同位置であった可能性が高いと思われる。

SX3052はSX3051 a・b上に残る築地崩壊土や堆積土層の上に地山ブロック主体のにぶい黄褐色シルトを用いて盛土整地したもので、東西5.7 m以上、南北2.6 mの範囲に、厚さ0.1～0.25 mで残存している。SX3052溝状掘り込みとの前後関係は判然としないが、東壁トレンチの断面(図版8の断面①)をみる限り、SX3052の方が古いと考えられる。

SX3052の直上(SD3058上部を含む)には、SF3050 c築地本体の崩壊土とみられる黄褐～褐色土ブロックと砂の小ブロックが混じり合った状態で堆積しており、中央トレンチではこの層中から多量の瓦片が出土した(図版10の断面①のc層、写真下)。これより上には、主に褐灰～黒褐色シルト層が堆積しており、砂や炭化物の薄層も認められる。築地崩壊土とみられる黄褐～褐色土ブロックの含有量は減少する。

遺物は、SX3052中から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類aタイプの破片が出土している。

また、SX3052直上の崩壊土層(c層)からは、土師器坏・甕、須恵器坏・大型碗(図版11-8)・蓋・甕と多量の瓦類が出土している。瓦には、型番不明の重圏文軒丸瓦(図版11-2)、単弧文軒平瓦640aタイプ(図版11-3・4)、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA類aタイプ(図版11-5)・ⅡB類aタイプ(図版11-6)・ⅡC類がある。平瓦はⅡB類aタイプが主体で、「物」(図版11-7)の刻印がみられるものが1点出土している。

これより上の堆積層からは、土師器坏(図版12-7～9)・甕、須恵器坏(図版12-3)・高台坏(図版12-4)・高台皿(図版12-5)・蓋・瓶(図版12-6)・甕、丸瓦ⅡA類・ⅡB類、平瓦ⅠA類・ⅠC類aタイプ(図版12-2)・ⅡB類aタイプ・ⅡC類が出土しており、瓦類を中心に遺物量が多い。平瓦はⅡB類aタイプが主体で、丸瓦には「田」(図版12-1)の刻印がみられるものがある。

《SF3050 d 築地塀跡、SX3053 整地層》(図版6～10)

SX3052 整地層上を0.4 m前後嵩上げしたSX3053 整地層を表土(第Ⅰb層)直下で検出した。この整地層は北側をSK3072土壌に壊され、南側を後世の削平で失った結果、南北幅0.6～1.5 mで東西方向に延びている。また、このSX3053北側のSK3072下では東西方向に延びるSD3071溝が検出されており、中央トレンチの断面観察(図版10の断面①)によると、SD3071はSX3053上か



外郭南辺の区画施設（東から）



SF3050 a・b（東から）



SF3050 aの積手の違い（W510 付近、東から）

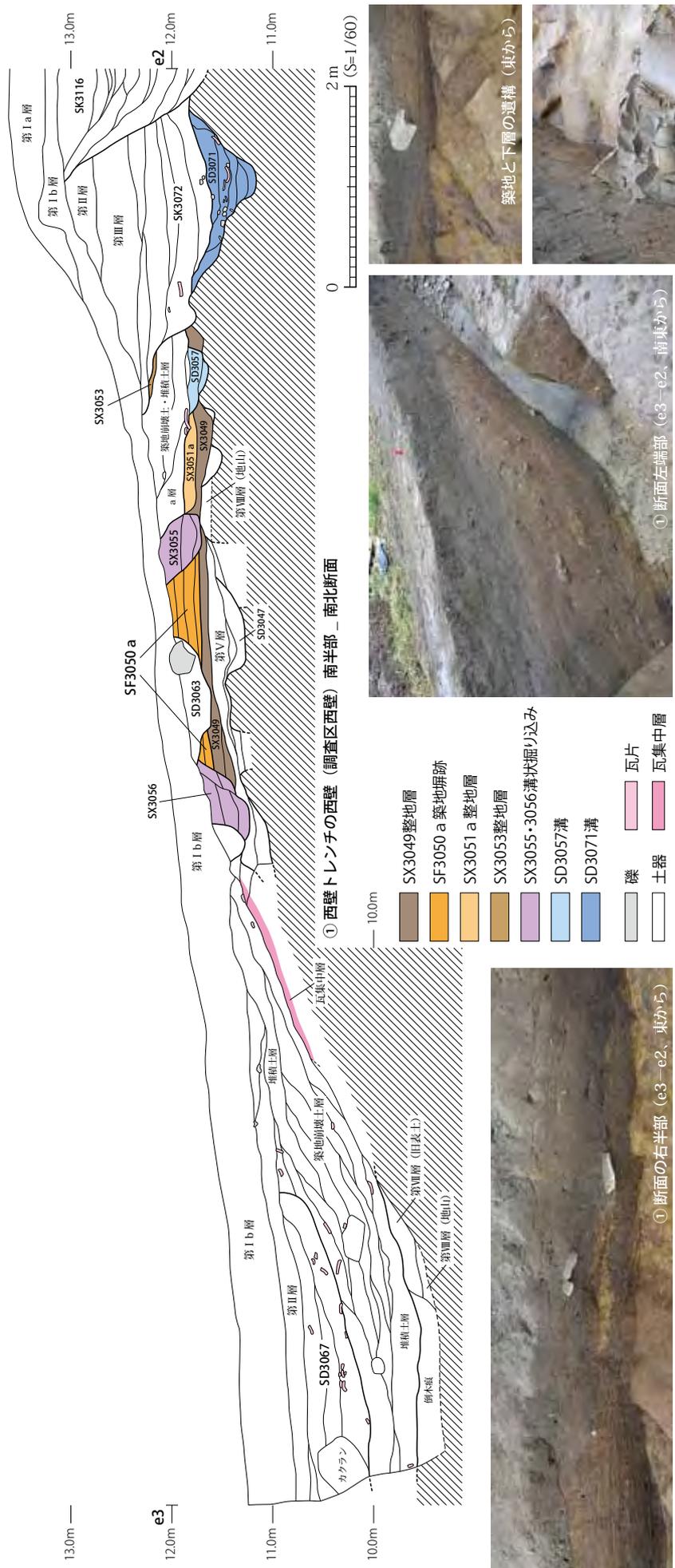


SF3050 a・bと SX3055（東から）



SX3054 西半部の状況（南から）

図版7 外郭南辺の区画施設（SF3050 築地塀跡ほか）_写真

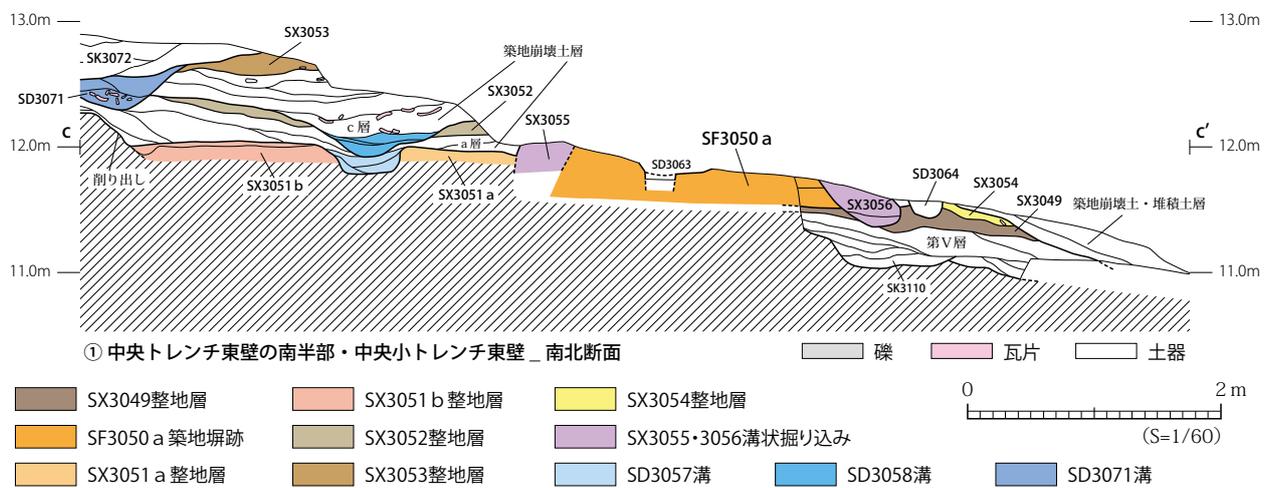


図版9 西壁トレンチ断面_SF3050 築地堀跡周辺

ら掘り込まれている。このような状況は下層にみられる整地層と溝の関係と共通しており、同様に嵩上げに伴って新たに築成されたSF3050 d 築地堀跡の存在が想定される。SF3050 dが存在する場合、SD3071の位置がSD3057・3058よりも北へ2.0 m程移動していることから、築地本体もやや北側へずれた位置に構築されていた可能性がある。

SX3053はSX3052上に残る築地崩壊土や堆積土層の上に明赤褐色土ブロック（近辺にはない地山土か？）と凝灰岩の小片を多量に含むにぶい赤褐色粘土質シルトを用いて盛土整地したもので、厚さ0.1～0.2 mで残存する。

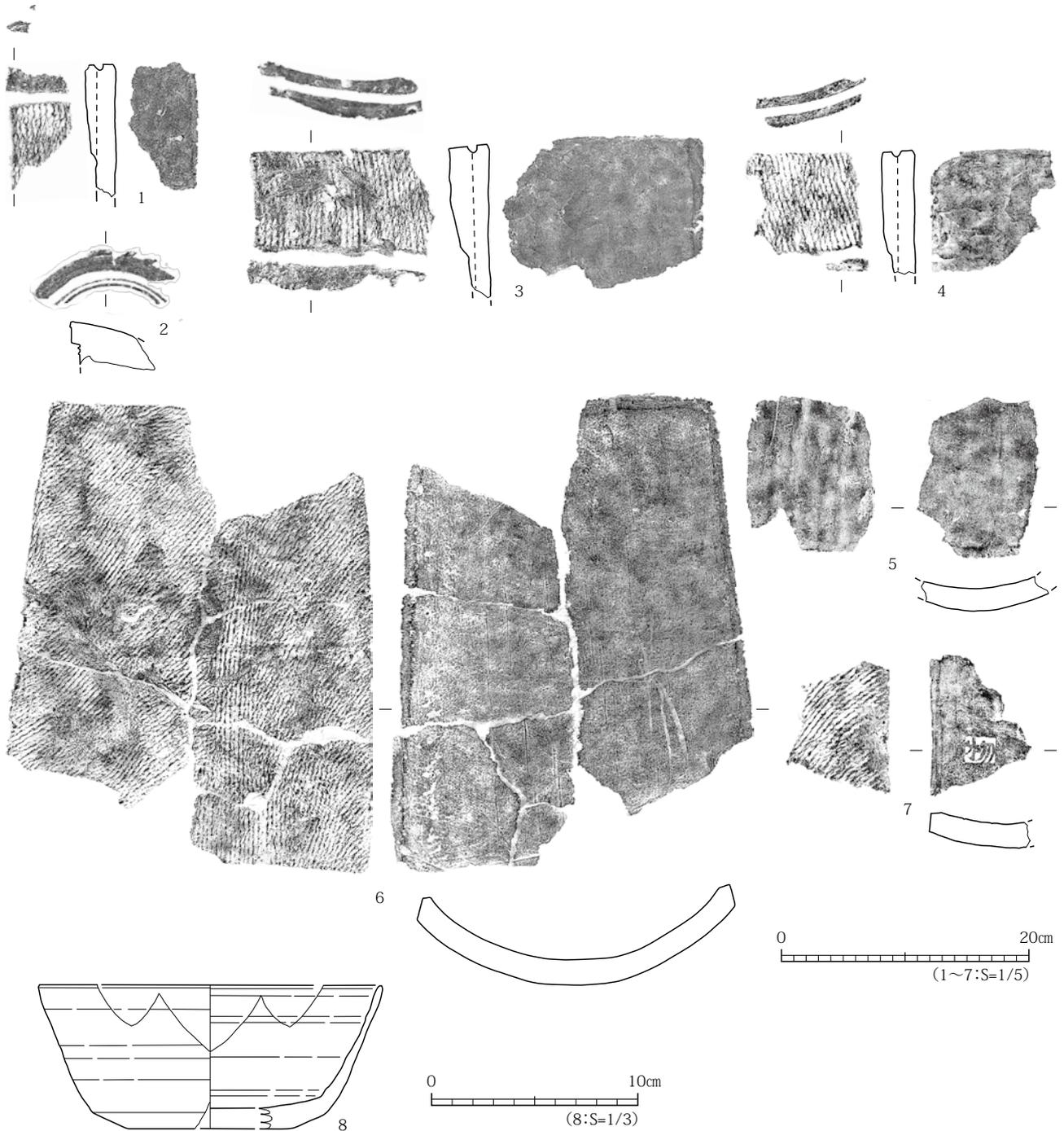
遺物は、SX3053中から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類・ⅡC類が出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。



図版 10 中央・中央小トレンチ断面_SF3050 築地堀跡周辺

【SX3054 整地層】（図版6～8・10・11）

調査区南部でSF3050 築地塀跡の南側を嵩上げしたとみられる SX3054 整地層を検出した。SF3050 a を構築する際に削り出した面に残る築地崩壊土層の上を盛土整地したもので、SF3050 の南側で確認

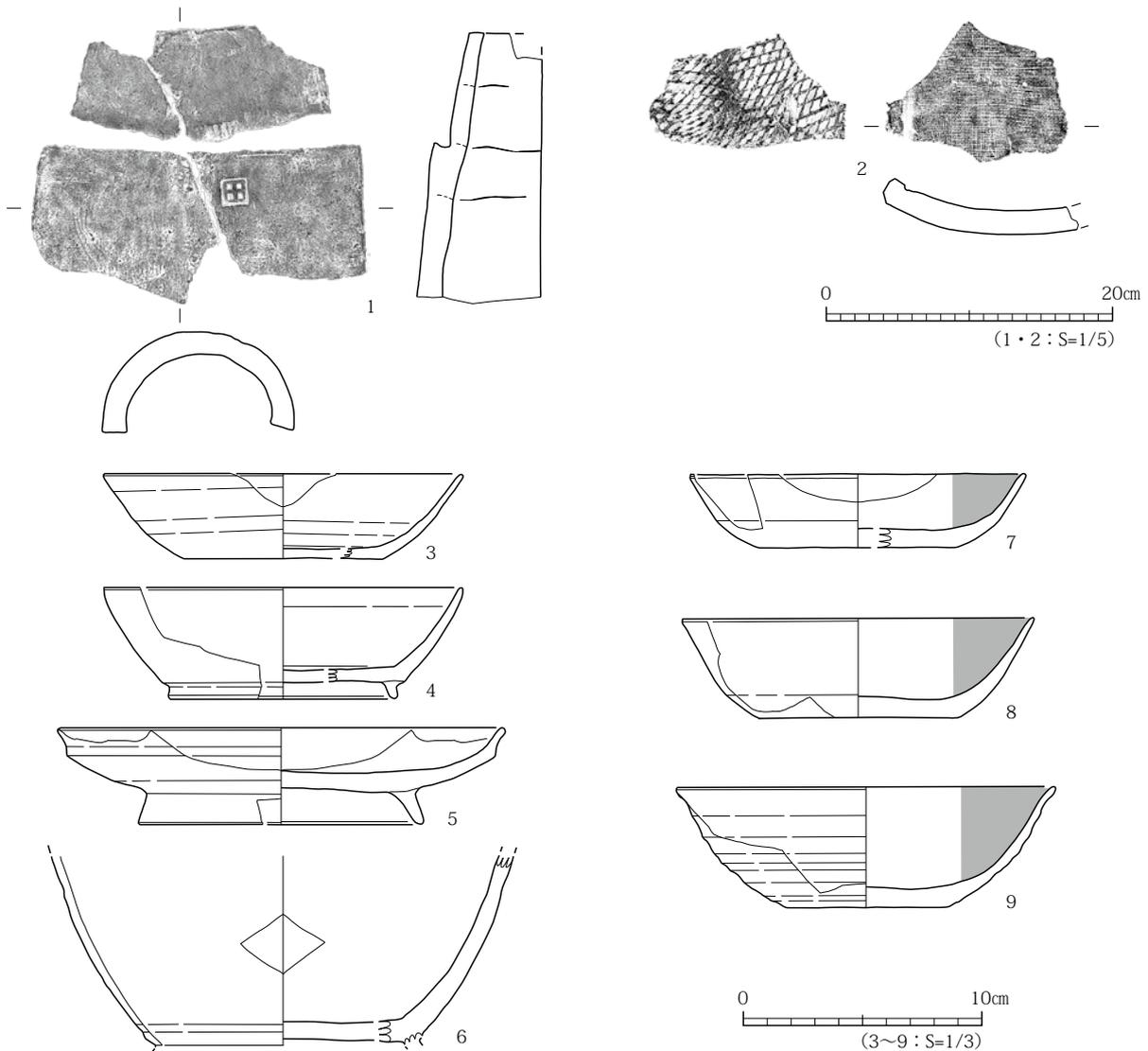


No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅		高さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
					狭端	広端					
1	SX3054 上・崩壊土層	軒平瓦	瓦当破片	—	—	—	2.4	単弧文 640-a タイプ		R-17	B15159
2	SX3052 上・c層	軒丸瓦	瓦当破片	—	—	—	—	重圏文型番不明		R-8	B15159
3	SX3052 上・c層	軒平瓦	瓦当破片	—	—	—	3.0	単弧文 640-a タイプ		R-9	B15159
4	SX3052 上・c層	軒平瓦	瓦当破片	—	—	—	2.6	単弧文 640-a タイプ		R-10	B15159
5	SX3052 上・c層	平瓦	破片	—	—	—	1.7	IA 類-a タイプ		R-11	B15159
6	SX3052 上・c層	平瓦	ほぼ完形	38.5	24.8	—	1.9	II B 類-a タイプ 1		R-13	B15159
7	SX3052 上・c層	平瓦	破片	—	—	—	1.9	II B 類-a タイプ 1 凹面広端左隅に刻印「物」A		R-12	B15159
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴		写真図版	登録	箱番号
8	SX3052 上・c層	須恵器 大型埴	1/3	(16.6)	(8.0)	7.1	底：?→回転ヘラケズリ			R-18	B15159

図版 11 SF3050 築地塀跡 _ 崩壊土層出土遺物

できた整地層はこれのみである。SX3054 については、SF3050 との間が SX3056 溝状掘り込みによって壊され、本整地層より上がほとんど削平されていることから、どの時期の補修に帰属するかを特定できない。SX3056 溝状掘り込み、SD3064 溝より古く、SI3042 住居跡、SK3110 土壌、SD3048 溝より新しい。

東西 8.0 m 以上、南北 1.5 m の範囲に、厚さ 0.05 ~ 0.25 m で残存しており、東側ほど残りが良い。西壁トレンチ内では未検出である。整地に用いられた土は明赤褐～明褐色土ブロック主体のにぶい褐色粘土質シルトで、土色・土質の特徴が SX3053 整地層と類似しているが、凝灰岩の小片を含まな



No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
					狭端	広端					
1	SX3052 上・堆積土	丸瓦	1/3	—	—	—	1.5	II B 類 凸面中央に刻印「田」A		R-7	B15160
2	SX3052 上・堆積土	平瓦	破片	—	—	—	1.7	IC 類・a タイプ 凸面格子叩き目		R-14	B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴		写真図版	登録	箱番号
3	SX3052 上・堆積土	須恵器 坏	1/2	(15.0)	(8.3)	3.6				R-20	B15160
4	SX3052 上・堆積土	須恵器 高台坏	1/4	(15.0)	(9.4)	4.7	底：静止糸切り			R-19	B15160
5	SX3052 上・堆積土	須恵器 高台皿	3/4	(18.6)	(11.8)	5.1	底部と皿底に墨付着		32-1	R-26	B15160
6	SX3052 上・堆積土	須恵器 瓶	1/4	—	(11.4)	—	外面の被熱剥落、火ハネが著しい。			R-68	B15160
7	SX3052 上・堆積土	土師器 坏	1/2	(14.0)	(8.2)	3.1	ロクロ調整 内面黒色処理			R-22	B15160
8	SX3052 上・堆積土	土師器 坏	1/2	(14.6)	(8.4)	4.2	ロクロ調整 内面黒色処理 底：?→回転ケズリ			R-21	B15160
9	SX3052 上・堆積土	土師器 坏	1/2	(15.8)	(6.6)	5.1	ロクロ調整 内面黒色処理 底：?→手持ちケズリ			R-32	B15160

図版 12 SF3050 築地塀跡_SX3052 上堆積層出土遺物

い点で異なり、現状で両者の上面には 1.0m 程の比高差がある (SX3054 の方が低い)。また、本整地層の西部には瓦片が比較的多く含まれていた (図版 7 の写真右下)。

SX3054 上面から南側の斜面下方にかけて明赤褐～黄褐色土ブロックを多く含む褐～暗褐色シルト層が堆積しており、SF3050 築地本体の崩壊土層とみられるが、本整地層と同様にその帰属期を特定できない。

遺物は、SX3054 上から南側の斜面下方にかけて堆積する崩壊土層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、単弧文軒平瓦 640a タイプ (図版 11 - 1)、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠB類・ⅡB類 a タイプ・ⅡC類が出土している。平瓦はⅡB類 a タイプが主体で、土器はいずれも小破片である。

なお、SX3054 の層中に含まれる瓦は取り上げていない。

【SX3055 溝状掘り込み】 (図版 6 ~ 10)

調査区南部で SF3050 a・b 築地塀跡に沿ってその北肩を壊すかたちで東西方向に延びる SX3055 溝状掘り込みを検出した。表土直下もしくは SD3062 溝を掘り上げた段階で平面プランを確認しており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本遺構は少なくとも SX3052 整地層より上部から掘り込まれていたとみられ、底面は SF3050 a 築地本体の基底下まで及んでいる。また、掘方内を版築状に突き固めて埋め戻しているが、柱や材の痕跡は検出できなかった。いわゆる溝とは性格が異なる遺構と考えられるが、その性格については判然としない。SD3062 溝より古く、SF3050 a・b 築地塀跡、SX3049・3051 a・3052 整地層、SI3041 住居跡より新しい。なお、SF3050 a・b を挟んで対となる位置には築地本体の南肩を壊す同様の遺構 (SX3056 溝状掘り込み) が認められ、同時存在の可能性も考えられる。但し、両者の底面には 0.5 m 前後の比高差がある (SX3055 の方が高い)。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.3 ~ 0.55 m、深さは 0.4 m 前後である。断面形はやや南側へ傾く「U」字状を呈し、断ち割りを実施した東・西壁トレンチでみると底面の標高は 11.7 m 前後で一定している。版築状の埋土は 10 ~ 20cm の厚さで層の違いが認められ、黄褐～褐色シルトと暗褐～黒褐色シルトを主体とする層が互層をなしている。

遺物は出土していない。

【SX3056 溝状掘り込み】 (図版 6 ~ 10)

調査区南部で SF3050 a・b 築地塀跡に沿ってその南肩を壊すかたちで東西方向に延びる SX3056 溝状掘り込みを検出した。表土直下で平面プランを確認しており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本遺構は少なくとも SX3054 整地層より上部から掘り込まれていたとみられ、底面は SF3050 a 築地本体の基底下まで及んでいる。また、掘方内を版築状に突き固めて埋め戻しているが、柱や材の痕跡は検出できず、その性格については判然としない。SF3050 a・b 築地塀跡、SX3049・3054 整地層、SI3042 住居跡、SK3110 土壙、SD3048 溝より新しい。なお、SF3050 a・b を挟んで対となる位置の SX3055 溝状掘り込みとの同時存在も考えられるが、両者の

底面には 0.5 m 前後の比高差がある (SX3056 の方が低い)。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.35 ～ 0.9 m、深さは 0.4 ～ 0.5 m である。断面形はやや北側へ傾く「U」字状を呈し、断ち割りを実施した各トレンチで見ると底面の標高は 11.2 m 前後で一定している。また、西壁トレンチの断面観察では、この掘り込みが 2 つ重なっているようにみえたが、平面ではその違いを捉えることができなかった。版築状の埋土は 10 ～ 25cm の厚さで層の違いが認められ、黄褐～褐色シルトと暗褐～黒褐色シルトを主体とする層が互層をなしている。

遺物は出土していない。

【SD3057 溝】 (図版 6 ～ 10)

調査区南部の東壁・中央・西壁トレンチ内で検出した東西方向の溝で、SF3050 a・b 築地本体に平行してその 1.0 m 程北を東西方向に延びており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本溝の壁は SX3051 a・b 整地層上面まで立ち上がっており、SF3050 b 築地堀跡に伴う内溝と考えられる。SX3053 整地層、SK3072 土壌、SD3058 溝より古く、SI3040・3041 住居跡より新しい。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.6 m 前後、深さは 0.2 ～ 0.35 m である。断面形は「U」字形を呈し、底面の標高は概ね一定しているが、詳細にみれば中央トレンチで最も高く、東・西壁トレンチへ向かって僅かに傾斜する。堆積土は築地崩壊土とみられる黄褐色土や褐色土ブロックを含む暗褐色シルト層を主体としており、中央トレンチ内の溝下位には砂と粘土の薄い互層が認められた。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏、平瓦Ⅱ類が出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

【SD3058 溝】 (図版 6 ～ 8・10・13)

調査区南部で東壁・中央トレンチを SX3051 a・b 整地層上面まで掘り下げた際にトレンチ壁面で存在を確認した溝で、平面プランを捉えられていない。SD3057 溝とほぼ重なる位置を東西方向に延びているとみられ、SF3050 a・b 築地本体との距離は 0.8 m 程である。本溝はさらに調査区東側へ続くが、西壁トレンチ内では未検出のため、西側への延びは判然としない。両トレンチの断面観察によると、本溝は SX3052 整地層上面から掘り込まれており、想定される SF3050 c 築地堀跡に伴う内溝と考えられる。SX3053 整地層、SK3072 土壌より古く、SI3040・3041 住居跡、SD3057 溝より新しい。

規模は、長さが 5.7 m 以上で、上端幅は 1.0 ～ 1.5 m、深さは 0.3 m 前後である。断面形は皿形を呈し、底面の標高はほぼ一定している。堆積土は築地崩壊土とみられる黄褐色土や褐色土ブロックを含む暗褐～黒褐色シルト層を主体としている。中央トレンチ内の溝下位には砂と粘土がラミナ状に堆積しており、最上位の窪みは瓦片を多量に含む築地本体側からの崩壊土 (c 層) に覆われていた。

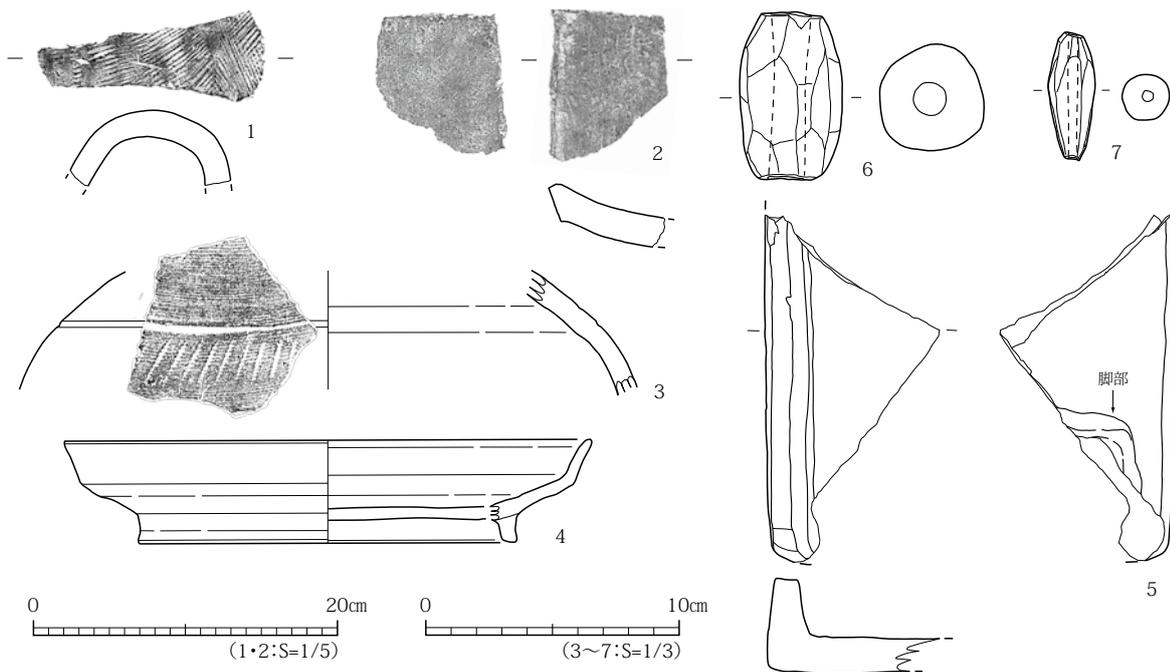
遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・瓶 (図版 13 - 3)、丸瓦Ⅱ B 類 c タイプ (図版 13 - 1)、平瓦Ⅰ類・Ⅱ B 類が出土している。

【SD3071 溝】（図版6・7・9・10・13）

調査区南部を東西方向に延びる溝で、西壁・中央トレンチ内で検出している。さらに調査区西側へ続くが、東壁トレンチ内では未検出のため、東側への伸びは判然としない。いずれのトレンチでも溝上部をSK3072 土壌に大きく壊されているが、中央トレンチの断面観察（図版10の断面①）でSX3053 整地層上面からの掘り込みを確認しており、想定されるSF3050 d 築地塀跡に伴う内溝と考えられる。SK3072 土壌より古い。

規模は、長さが5.6 m以上で、上端幅は1.0～1.9 m、深さは0.35～0.65 mである。断面形は外側に開いた「V」字状で、壁にはやや凹凸がみられ、底面は全体として西側へ強く傾斜している。堆積土は上下2層に大別され、上層は築地崩壊土とみられる黄褐色土や褐色土ブロック、炭化物粒を含む暗褐～黒褐色のシルト層、下層は同様の黄褐色土や褐色土ブロックと土器・瓦片、礫を多量に含む黒褐色のシルトもしくは粘土質シルトである。下層の遺物は溝底面から離れた上位に集中する傾向がみられ、周辺部から一度に流入したかもしくは人為的に投入されたものの可能性がある。

上層から出土した遺物には、土師器坏・甕、須恵器坏・高坏・蓋・甕、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類aタイプ（図版13-2）・ⅡB類・ⅡC類、土錘（図版13-6・7）がある。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
					狭端	広端					
1	SD3058・堆積土	丸瓦	破片	—	—	—	1.7	ⅡB類-cタイプ		R-37	B15160
2	SD3071・上層	平瓦	破片	—	—	—	2.0	ⅠA類-aタイプ		R-50	B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴		写真図版	登録	箱番号
3	SD3058・堆積土	須恵器 瓶	肩部破片	—	—	—	肩部に列点文が巡る		33-4	R-36	B15160
4	SD3071・下層	須恵器 高台皿	1/4	(11.8)	(14.9)	4.1				R-73	B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	法量	厚さ	特徴		写真図版	登録	箱番号	
5	SD3071・下層	須恵器 風字碗	碗面側辺部	—	1.4	直線的な側辺部		33-1	R-74	B15160	
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	直径	孔径	特徴		写真図版	登録	箱番号
6	SD3071・上層	土錘	完形	6.7	4.0	1.3			33-2	R-71	B15160
7	SD3071・上層	土錘	完形	5.0	1.9	0.5			33-3	R-72	B15160

図版13 SD3058・3071 溝_出土遺物

下層からは、土師器坏・甕、須恵器坏・高台皿（図版 13 - 4）・甕、硯、丸瓦Ⅱ B 類、平瓦Ⅱ B 類・Ⅱ C 類が出土しており、遺物量が多い。硯は風字硯（図版 13 - 5）で、大型のものである。

【SD3060 溝】（図版 6・8）

調査区南端部の東壁トレンチ内で検出した東西方向の溝で、SF3050 a・b 築地本体に平行してその 2.6 m 程南を東西に延びるとみられる。上部に堆積した SF3050 南側崩壊土や堆積土層の掘り下げを実施していないため、東壁トレンチ以外ではその延びを捉えられていない。なお、西壁トレンチ内では SD3060 の続きを検出できていないが、想定される溝の位置には瓦集中層が存在し、これより下層の掘り下げを行っていないため、下層に本溝が存在する可能性は残る。東壁トレンチの断面観察（図版 8 の断面①）では、北壁は第Ⅶ層上面から、南壁は第Ⅵ層上面から掘り込まれている。SD3067 溝より古い。

規模は、長さが 0.8 m 以上で、上端幅は約 2.1 m、深さは 0.8 m 程である。断面形は外側に開いた「V」字状で、南壁に軽い段が付く。堆積土はこの段を境に上下 2 層に大別されることから、上層下の段階で溝が一度浚われている可能性がある。上層は炭化物粒や築地崩壊土とみられる黄褐色土ブロックを含む褐灰～暗褐色の粘土質シルト層で、瓦片の含有量が多い。下層は築地崩壊土とみられる黄褐色土や黒褐色土の大ブロックを多く含む褐色粘土質シルト層である。

遺物は、トレンチ断面で瓦片が上下層に含まれることを確認したが、取り上げは行っていない。

ii. 掘立柱建物跡と柱穴列跡

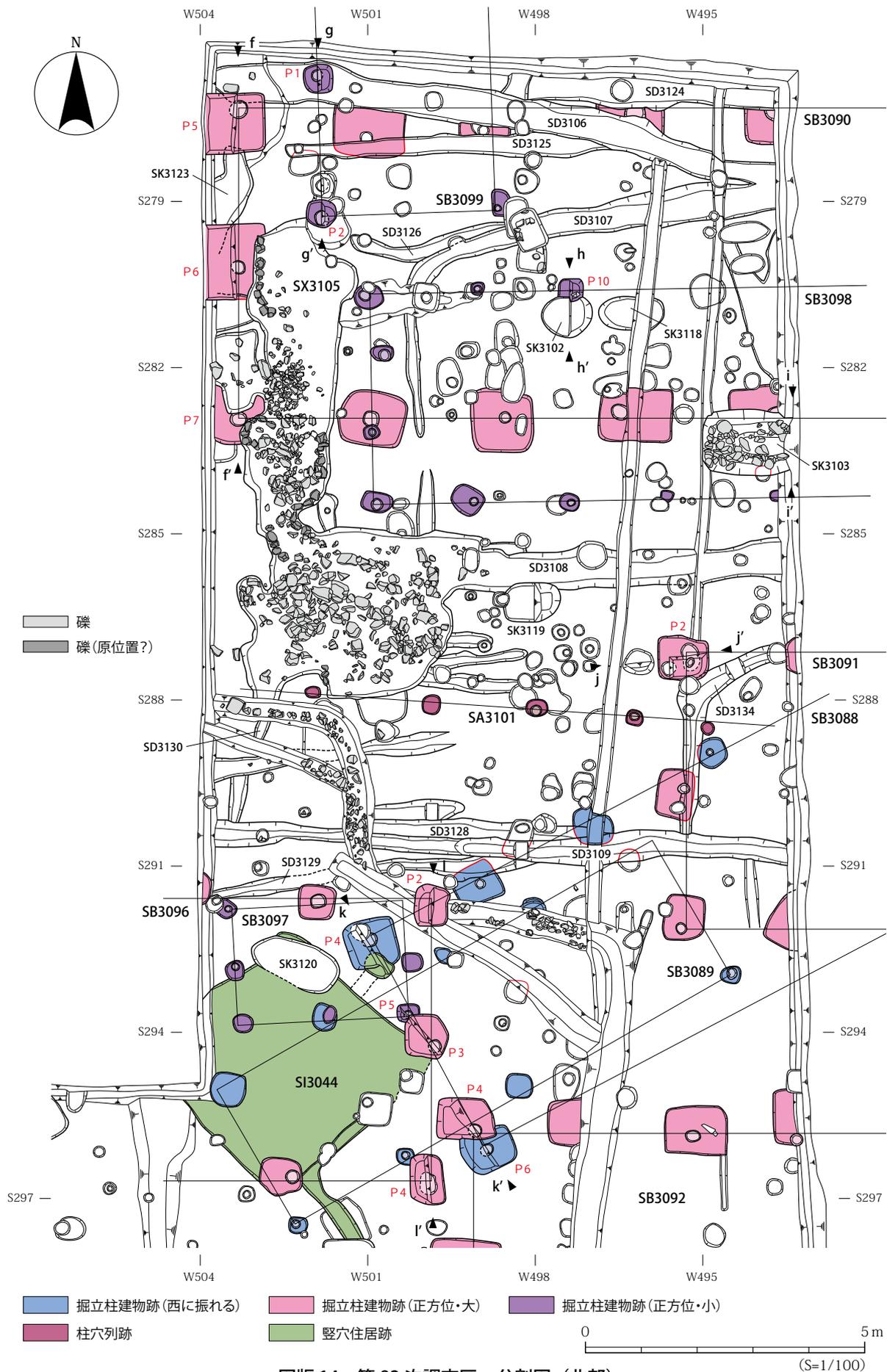
【SB3088 建物跡】（図版 15・17・20）

調査区中央のやや北寄りに位置する東西 3 間以上、南北 2 間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。西妻の両端と北側柱列の柱穴計 5 個を地山面で検出している。西妻中央の柱穴は SB3096 建物跡の柱穴掘方に壊されて残存しないと考えられる。また、隅柱を除く北側柱列の柱穴の残りが悪いことから上部の削平が著しいとみられ、この削平により南側柱列の柱穴は失われた可能性がある。建物の方向は、北側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約 28° 南に偏している。SB3089・3092・3096・3097 建物跡、SI3044 住居跡、SD3109・3128・3129・3134 溝より古い。SB3091 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

北側柱列の西から 2 間目以外の柱穴で柱痕跡を確認している。桁行については、北側柱列で総長 7.0 m 以上、柱間は西より 2.3 m・(2.2 m)・(2.5 m) である。梁行については、西妻で総長 4.3 m、柱間は北より (2.0 m)・(2.3 m) である。桁・梁行とも柱間間隔に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺 0.8～0.9 m の方形を基調とするが、特に残りの悪い北側柱列の西から 2・3 間目の柱穴は不整形で規模もやや小さくなっている。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴(P 4・6) でみると、深さは 0.2 m 前後で、埋土は黄褐色砂質シルトや褐色シルトである。柱痕跡は直径 0.2 m 前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、中世陶器甕の小破片が出土している。中世陶器甕は柱穴



図版 14 第 83 次調査区 分割図 (北部)

最上部の浅い窪みに溜まった堆積層から出土しており、後世の遺物が混入したものと考えられる。

【SB3089 建物跡】（図版 15・17・20）

調査区中央のやや北寄りに位置する東西4間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。新しい暗渠溝とSD3109溝に壊されたと考えられる柱穴（南側柱列の西から3間目と北東隅）を除く計9個の柱穴を検出している。確認面はSI3044住居跡の堆積土上面もしくは地山面である。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約30°南に偏している。SB3096・3097建物跡、SD3109溝より古く、SB3088建物跡、SI3044住居跡より新しい。SB3091・3092建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

南側柱列の両端と西から1間目の柱穴で柱痕跡を確認している。これ以外の柱穴はやや規模が大きく、形状が不整なものもみられることから、柱抜取穴の可能性もある。検出した柱痕跡を基に規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長9.0m、柱間は西より2.3m・(2.4m)・(2.0m)・(2.3m)である。梁行については、西妻で総長・柱間ともに2.8m前後とみられる。

柱穴は一辺0.3～0.6mの方形を基調とするが、柱痕跡を確認した柱穴の規模は一辺0.3～0.4mである。深さや埋土の状況は断ち割りを実施していないため不明である。柱痕跡は直径0.15m程の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏、須恵器坏・甕の小破片が出土している。

【SB3090 建物跡】（図版 14・17・20）

調査区北端部に位置する東西4間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計11個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3098建物跡、SX3105集石遺構、SK3102・3103・3123土壙、SD3106・3107・3124・3125溝より古い。SB3099建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

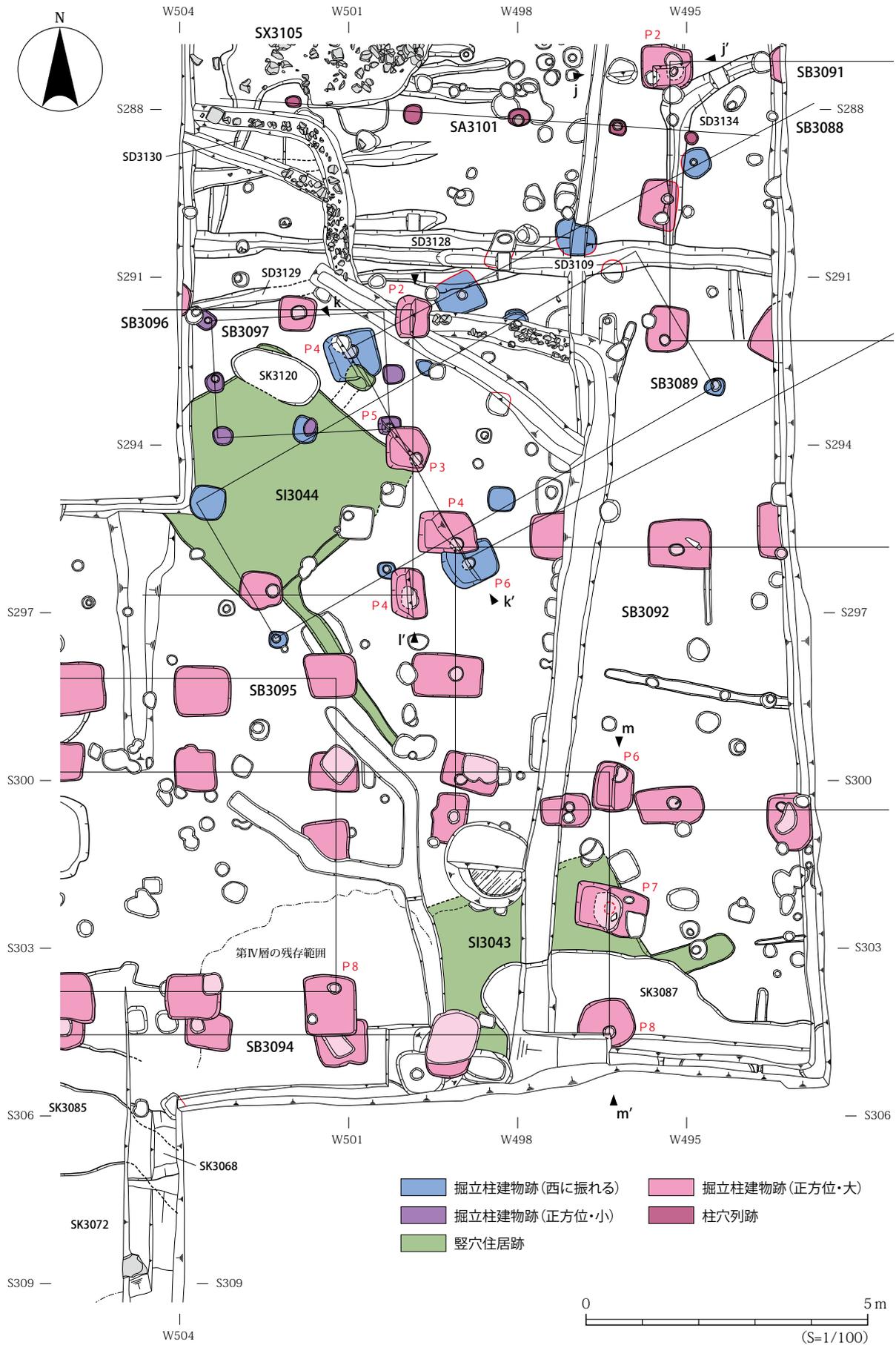
柱穴は良好に残存しており、そのうちの大半（北側柱列の西から1・2間目以外）で柱痕跡を確認している。桁行については、南側柱列で総長9.6m以上、柱間は西より2.4m・2.4m・2.1m・2.7mである。梁行については、西妻で総長5.6m、柱間は2.8m等間である。桁行の柱間間隔に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺1.1～1.3mの方形または長方形の比較的大きなもので、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴（P5・6）でみると、深さは0.6～0.8mあり、埋土は黄褐色砂質シルトと暗褐～黒褐色シルトの互層で、丁寧に突き固められている。柱痕跡は直径0.25～0.35mの円形を呈し、その痕跡中の上部には焼土粒が含まれる。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏の小破片が出土している。

【SB3091 建物跡】（図版 14・17・20）

調査区北部の南東寄りに位置する東西1間以上、南北2間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。



図版 15 第 83 次調査区_分割図 (中央部東)

西・北・南側の柱列の柱穴計5個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SD3109・3134溝より古い。SB3088建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

西側の柱列で柱痕跡を確認しており、断ち割りを行ったP2の柱穴上部には柱抜取痕が認められる。西側の柱列の柱間は2.5m等間で、総長は5.0mとなる。北・南側柱列の柱間は2.2m前後とみられる。

柱穴は一辺0.8～1.0mの方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。P2でみると、深さは0.45mで、埋土は地山ブロックを多量に含む褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器甕、緑釉陶器碗、鉄滓が出土している。土器はいずれも小破片で、図示できるものはない。

【SB3092 建物跡】(図版15・17)

調査区中央部の北東寄りに位置する東西3間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計9個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3088建物跡より新しい。SB3094建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

柱穴は良好に残存しており、そのうちの大半(北側柱列の西から1・3間目以外)で柱痕跡を確認している。桁行については、南側柱列で総長5.8m以上、柱間は西より2.0m・1.9m・1.9mである。梁行については、西妻で総長4.9m、柱間は北より2.3m・2.6mである。

柱穴は一辺0.9～1.2mの方形または長方形の比較的大きなもので、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴(P4)でみると、深さは0.9mで、埋土は締まりが強く地山土に近い黄褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2～0.25mの円形を呈し、その痕跡中の上部には焼土粒が含まれる。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕の小破片が出土している。

【SB3093 建物跡】(図版16・18)

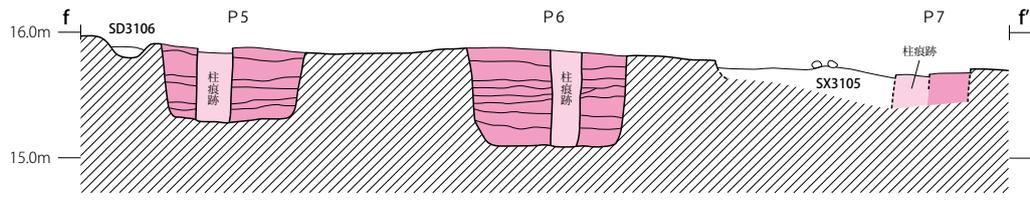
調査区中央部の北西寄りに位置する東西1間以上、南北2間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。東・北・南側の柱列の柱穴計5個をSI3045住居跡、SK3046・3073・3074・3079土壇の堆積土上面で検出しており、建物はさらに西側へ延びると推定されるが、南側柱列の柱穴(P5)は平面プランを明確に捉えられていない。東側の柱列が北から2間目で西へ折り返さず、さらに南へ1間延びる(P6まで)可能性も残るが、その先の展開が判然としないことから南北2間の建物と考えておきたい。建物の方向は、東側の柱列でみると発掘基準線に対し、北で約1°西に偏している。SB3095建物跡より古く、SI3045住居跡、SK3046・3073・3074・3079土壇、SD3080溝より新しい。

北東隅の柱穴とそこから西・南へ1間目の柱穴で柱痕跡または柱押圧痕を確認した。東側の柱列では柱間が1.9mで、総長は3.8mになると推定される。北側柱列の柱間は1.8mである。

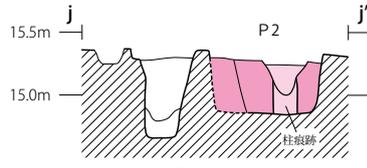
柱穴は一辺0.9～1.1mの方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱



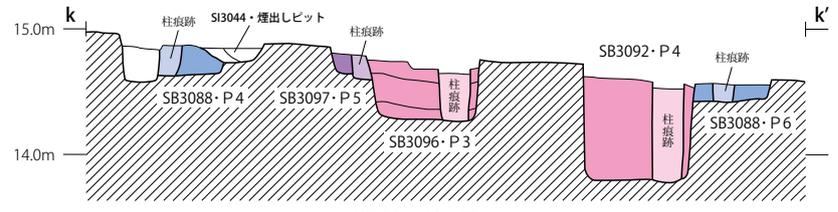
図版 16 第 83 次調査区_分割図(中央部西)



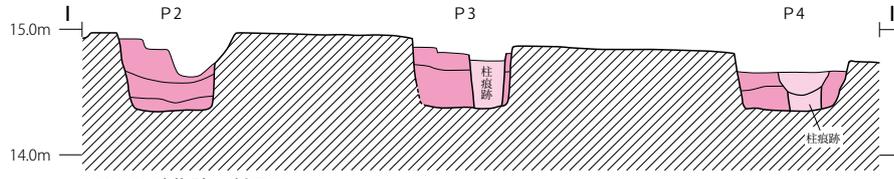
SB3090 建物跡 _ 断面図



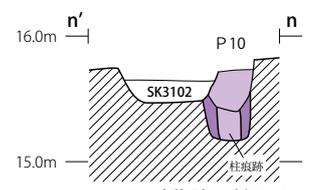
SB3091 建物跡 _ 断面図



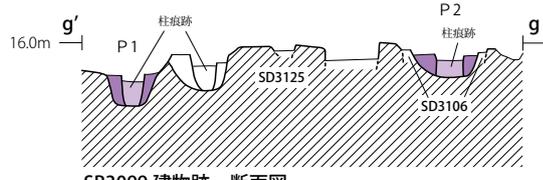
SB3088・3092・3096・3097 建物跡 _ 断面図



SB3096 建物跡 _ 断面図



SB3098 建物跡 _ 断面図



SB3099 建物跡 _ 断面図

- ※ 西に振れる建物 ----- 掘方埋土 柱痕跡、柱切・抜取痕
- ※ 正方位・大の建物 ----- 掘方埋土 柱痕跡、柱切・抜取痕
- ※ 正方位・小の建物 ----- 掘方埋土 柱痕跡、柱切・抜取痕



SB3090・P5 (西から)



SB3090・P6 (西から)



SB3091・P2 (南東から)



SB3088・P4 (南から)



SB3097・P5 と SB3096・P3 (南西から)



SB3092・P4 と SB3088・P6 (西から)



SB3096・P4 (西から)



SB3099・P1 (東から)



SB3091・P2 (東から)

図版 17 SB3088・3090~3092・3096・3097・3099 建物跡 _ 断面

穴（P 3）でみると、深さは 0.3 m で、上部の削平が著しいと考えられる。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色の砂質シルトである。柱痕跡は直径 0.3 m 前後の円形を呈する。P 3 では柱抜取痕が底部まで及び、底面に柱押圧痕が残る。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅱ C 類、鉄釘が出土している。いずれも破片で、図示できるものはない。

【SB3094 建物跡】（図版 18・19）

調査区中央部に位置する東西 5 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。全ての柱穴を検出しており、確認面は SI3043 住居跡、SK3075・3076・3077・3087 土壌の堆積土上面もしくは第Ⅳ層上面、地山面である。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3095 建物跡、SK3078 土壌より古く、SI3043 住居跡、SK3074・3075・3076・3077・3087 土壌より新しい。SB3092 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

ほとんどの柱穴で柱抜取痕を確認しており、柱穴自体が SB3095 の柱穴掘方に壊されているものもある。柱穴下部に残る柱痕跡や柱抜取痕の位置から規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長約 12.4 m、柱間は西より (2.6 m)・(2.5 m)・(2.5 m)・(2.4 m)・(2.4 m) である。梁行については、東妻で総長 4.7 m、柱間は北より 2.4 m・2.3 m である。

柱穴は一辺 0.8～1.3 m の方形または長方形を基調としており、一辺 0.8～0.9 m のものが多い。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴（P 6～8）でみると、深さは 0.5～0.6 m あり、埋土は黄褐色粘土質シルトや地山ブロックを含む暗褐～黒褐色シルトで、2～3 層に突き固められているがさほど丁寧ではない。柱穴下部に残る柱痕跡は直径 0.2 m 前後の円形を呈する。

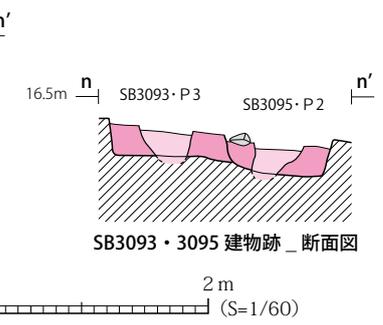
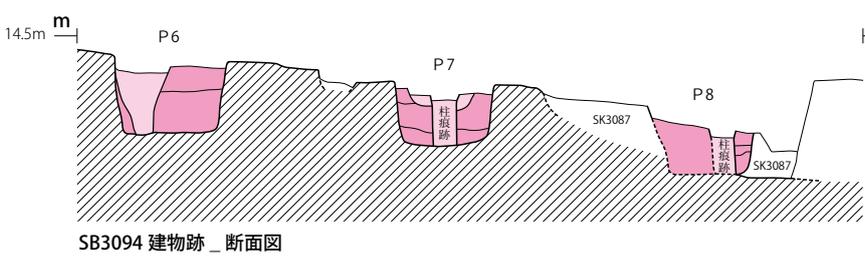
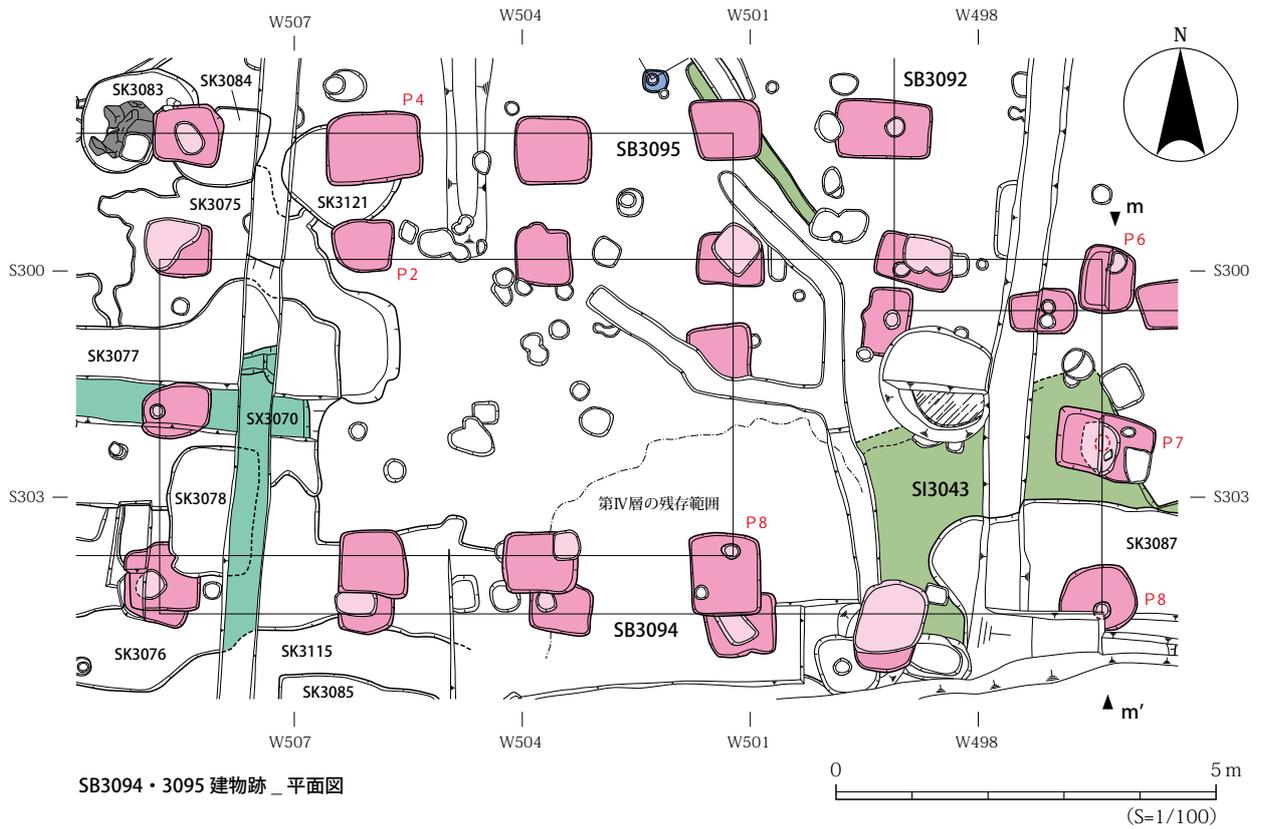
遺物は、柱抜取痕中から土師器甕、須恵器坏、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅱ B 類の破片が出土している。

また、柱穴の確認段階で土師器坏・耳皿（図版 19－1）・甕、須恵器坏・蓋・瓶・甕、平瓦Ⅱ B 類・Ⅱ C 類が出土している。土師器耳皿の底部内面には焼成後に刻書された「介」の文字が認められる。

【SB3095 建物跡】（図版 18・19）

調査区中央部に位置する東西 5 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。西壁トレンチの掘削により失われたとみられる西妻の柱穴 2 個（北から 1 間目と南西隅）と南側柱列の西から 1 間目以外の柱穴計 11 個を検出している。本建物では、北・南側柱列両端の柱穴（四隅の柱穴）の位置が他の柱穴よりやや外側へずれる特徴が看取され、この特徴から西妻の柱穴 2 個を欠くものの、東西 5 間の建物と判断した。確認面は SK3073・3074・3076・3083・3084・3121 土壌の堆積土上面もしくは、第Ⅳ層上面、地山面である。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SK3078 土壌より古く、SB3094 建物跡、SI3044 住居跡、SK3073・3074・3075・3076・3077・3083・3084・3121 土壌、SD3080 溝より新しい。

5 個の柱穴で柱抜取痕もしくは柱痕跡を確認しているが、残りの柱穴ではこれらを明確に捉えることができず、柱穴全体に抜取痕が及んでいる可能性もある。柱抜取痕の位置を参考に規模を推定する



掘方埋土 柱痕跡、柱切・抜取痕



図版 18 SB3093～3095 建物跡

と、桁行については、北側柱列で総長約 12.0 m、柱間はおよそ 2.4 m 等間である。梁行については、東妻で総長約 5.6 m、柱間はおよそ 2.8 m 等間となる。

柱穴は一辺 0.9 ~ 1.2 m の方形または長方形を基調としており、一辺 1.0 m 前後のものが多い。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴 (P 1・2) でみると、深さは 0.3 ~ 0.35 m で、上部の削平が著しいと考えられる。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色や黒褐色のシルトである。柱穴に柱痕跡が残存するものはほとんど認められないが、掘方底面に残る柱押圧痕から柱の径は 0.2 m 程度であったと推定される。

遺物は、柱抜取痕中から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕の小破片が出土している。

また、柱穴の確認段階で土師器杯・甕、須恵器杯 (図版 19 - 2) ・稜塊・甕、丸瓦、平瓦 I A 類・II B 類、鉄釘 (図版 19 - 3) が出土している。

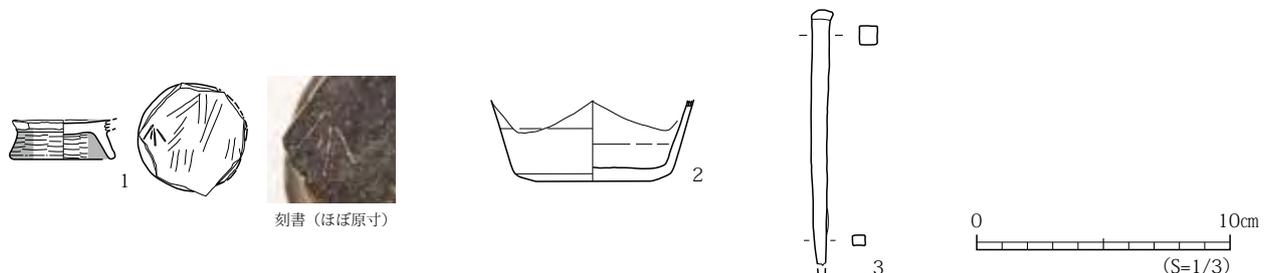
【SB3096 建物跡】 (図版 15・17・20)

調査区北部の南西寄りに位置する東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。東・北・南側の柱列の柱穴計 6 個を SI3044 住居跡の堆積土上面もしくは地山面で検出しており、建物はさらに西側へ延びると考えられるが、調査区内に位置する南側柱列では東から 1 間目以降の柱穴を捉えることができなかった。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3088・3089・3097 建物跡、SI3044 住居跡より新しい。

北東隅とそこから西へ 2 間目以外の柱穴で柱痕跡を確認しており、断ち割りをを行った P 4 の柱穴上部には柱抜取痕が認められる。東側の柱列は総長約 5.1 m で、柱間は北より (2.6 m) ・2.5 m となる。北・南側柱列の柱間は 2.1 ~ 2.5 m とみられ、間隔に多少のばらつきがある。

柱穴は一辺 0.7 ~ 0.9 m の方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴 (P 2 ~ 4) でみると、深さは 0.45 ~ 0.6 m で、柱穴底面の標高が 14.4 m 前後でほぼ一定している。埋土は褐色砂質シルトや地山ブロックを含む褐灰~黒褐色シルトで、2 ~ 3 層に突き固められているがさほど丁寧ではない。柱痕跡は直径 0.25 m 前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦 II C 類の破片が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号			
1	SB3094・P2 確認	土師器 耳皿	底部のみ	—	2.2	—	内外面黒色処理 底部内面に焼成後の刻書「介」		R-134	B15160			
2	SB3095・P4 確認	須恵器 杯	底部のみ	—	(4.5)	—	底：?→回転ケズリ		R-140	B15160			
No.	出土遺構・層位	種類	残存	特徴									
3	SB3095・P8 確認	鉄釘	先端欠損	角釘	頭部 7mm×8mm の方形 現存長 10.1cm						写真図版	登録	箱番号
									R-149	B15160			

図版 19 SB3094・3095 建物跡 _ 出土遺物

【SB3097 建物跡】(図版 15・17・20)

調査区北部の南西寄りに位置する東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。新しい暗渠溝とSB3096 建物跡の柱穴掘方によって壊されたとみられる北東隅とそこから西へ1間目の柱穴を除く計6個の柱穴を検出している。確認面はSI3044 住居跡の堆積土上面もしくは地山面である。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約3°南に偏している。SB3096 建物跡より古く、SB3088・3089 建物跡、SI3044 住居跡より新しい。

3個の柱穴で柱痕跡を確認しているが、残りの柱穴では柱痕跡を明確に捉えることができず、柱穴全体に柱抜取痕が及んでいる可能性もある。確認した柱痕跡の位置を基に規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長約3.2m、柱間はおよそ1.6m等間である。梁行については、西妻で総長約2.1m、柱間はおよそ1.05m等間となる。

柱穴は一辺0.3～0.4mの方形を基調とし、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴(P5)でみると、深さは0.2mで、埋土は暗褐色砂質シルトである。柱痕跡は直径0.15m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦の小破片が出土している。

【SB3098 建物跡】(図版 14・17・20)

調査区北部に位置する東西4間以上、南北3間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計10個(北側柱列の西から3・4間目は未検出)をSB3090 建物跡の柱穴埋土上面もしくは地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びると考えられる。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約1°南に偏している。SK3102 土壙より古く、SB3090 建物跡より新しい。

検出した柱穴の大半(南側柱列の西から3・4間目以外)で柱痕跡を確認しており、断ち割りを行ったP10の柱穴上部には掘方



図版 20 調査区北部の建物群_写真

全体に及ぶ柱抜取痕が認められる。桁行については、南側柱列で総長 7.1 m 以上、柱間は西より 1.8 m・1.7 m・(1.7 m)・(1.9 m) である。梁行については、西妻で総長 3.8 m、柱間は北より 1.1 m・1.4 m・1.3 m である。桁・梁行とも柱間間隔に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺 0.25 ～ 0.6 m の隅丸方形または長方形を基調としており、柱穴の大きさにもばらつきがみられる。壁はほぼ垂直に掘られている。P10 でみると、深さは 0.65 m で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径 0.2 m 前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏の小破片が出土している。

【SB3099 建物跡】(図版 14・17・20)

調査区北端部に位置する南北 1 間以上、東西 1 間の南北棟とみられる掘立柱建物跡である。南・西側の柱列の柱穴計 3 個(東側の柱列の南から 1 間目は未検出)を SD3106 溝の堆積土上面もしくは地山面で検出しており、建物はさらに北側へ延びると考えられる。建物の方向は、西側の柱列で見ると発掘基準線に対し、北で約 2° 西に偏している。SD3106・3124・3125 溝より新しい。SB3090 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

検出した柱穴の全てで柱痕跡を確認しており、西側の柱列の柱間は 2.5 m、南側の柱列の柱間は 3.1 m である。

柱穴は一辺 0.5 m 程の隅丸方形または長方形を呈し、壁は外側へやや開いて立ち上がる。断ち割った柱穴(P 1・2)でみると、深さは 0.3 ～ 0.45 m で、埋土は暗褐色シルトである。柱痕跡は直径 0.15 ～ 0.2 m の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦 II B 類、平瓦 II B 類・II C 類の破片が出土している。

【SA3101 柱穴列跡】(図版 14・20)

調査区北部に位置する東西方向 4 間以上の柱穴列跡である。確認面は地山面で、さらに東西へ延びる可能性がある。柱穴列の方向は、発掘基準線に対し、西で約 4° 北に偏している。2 個の柱穴で柱痕跡を確認しており、これを基に規模を推定すると、柱間は東より (1.4 m)・1.8 m・(1.9 m)・(2.1 m) で、総長は 7.2 m 以上とみられる。柱穴は一辺 0.25 ～ 0.4 m の隅丸方形または長方形を呈し、柱痕跡は直径 0.15 ～ 0.2 m の円形である。柱穴の深さや埋土の状況は断ち割りを実施していないため不明である。

遺物は出土していない。

iii. 竪穴住居跡

【SI3040 住居跡】(図版 6・8・21)

調査区南部の東壁トレンチ内で竪穴住居の北壁とみられる掘り込みと床、周溝を検出した。確認面は地山面で、住居南側の大半が SI3041 住居跡によって壊されており、北壁から 0.7 m 程が残る。

SX3051 a・3051 b・3053 整地層、SD3057・3058・3062 溝、SK3072 土壙より古い。

地山を壁としており、壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は 0.4 m 程で、壁の直下には上幅 0.2 m 前後の周溝が認められる。また、粘土層の地山を床としており、床面はほぼ平坦である。堆積土は主に炭化物粒を含む黒褐色シルト層で、床面直上にはカキを主体とした薄い貝層が分布していた。

貝類以外の遺物は出土していない。

【SI3041 住居跡】（図版 6・8・21・22）

調査区南部の東壁トレンチ内で検出した。東壁トレンチは本住居を約 1.0 m 幅で南北に縦断しており、住居北壁と床、カマドが捉えられた。住居南部は SD3048 溝によって壊されて残存せず、北壁から 2.8 m 程の範囲が残る。SI3040 住居跡と一緒に床面近くまで掘り下げた段階で両者が重複していることを確認したが、本来、本住居の北壁は SI3040 の堆積土上面から掘り込まれている。SF3050 a・b 築地堀跡、SX3051 a・3052 整地層、SX3055 溝状掘り込み、SD3048・3057・3058・3062 溝より古く、SI3040 住居跡より新しい。

残存する北壁の壁高は 0.35 m で、床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。また、粘土層の地山を床としており、床面は多少の凹凸をもちながら南側へ緩やかに傾斜している。カマドは燃烧部と煙道からなる。燃烧部側壁は灰黄色粘土質シルトを積み上げて構築されており、その左焚き口部には芯材として用いられたと考えられる土師器甕（図版 22 - 1）の体下半部が残る。燃烧部底面では使用による明瞭な赤変は認められなかったが、直上に薄い灰層が堆積しており、原位置をとどめていないものの石製支脚も検出された。煙道は先端に向かってほぼ水平に延び、長さ 1.1 m、幅 0.25 m 程である。

堆積土は 3 層に大別され、1 層は炭化物粒を含む黒褐色シルト層

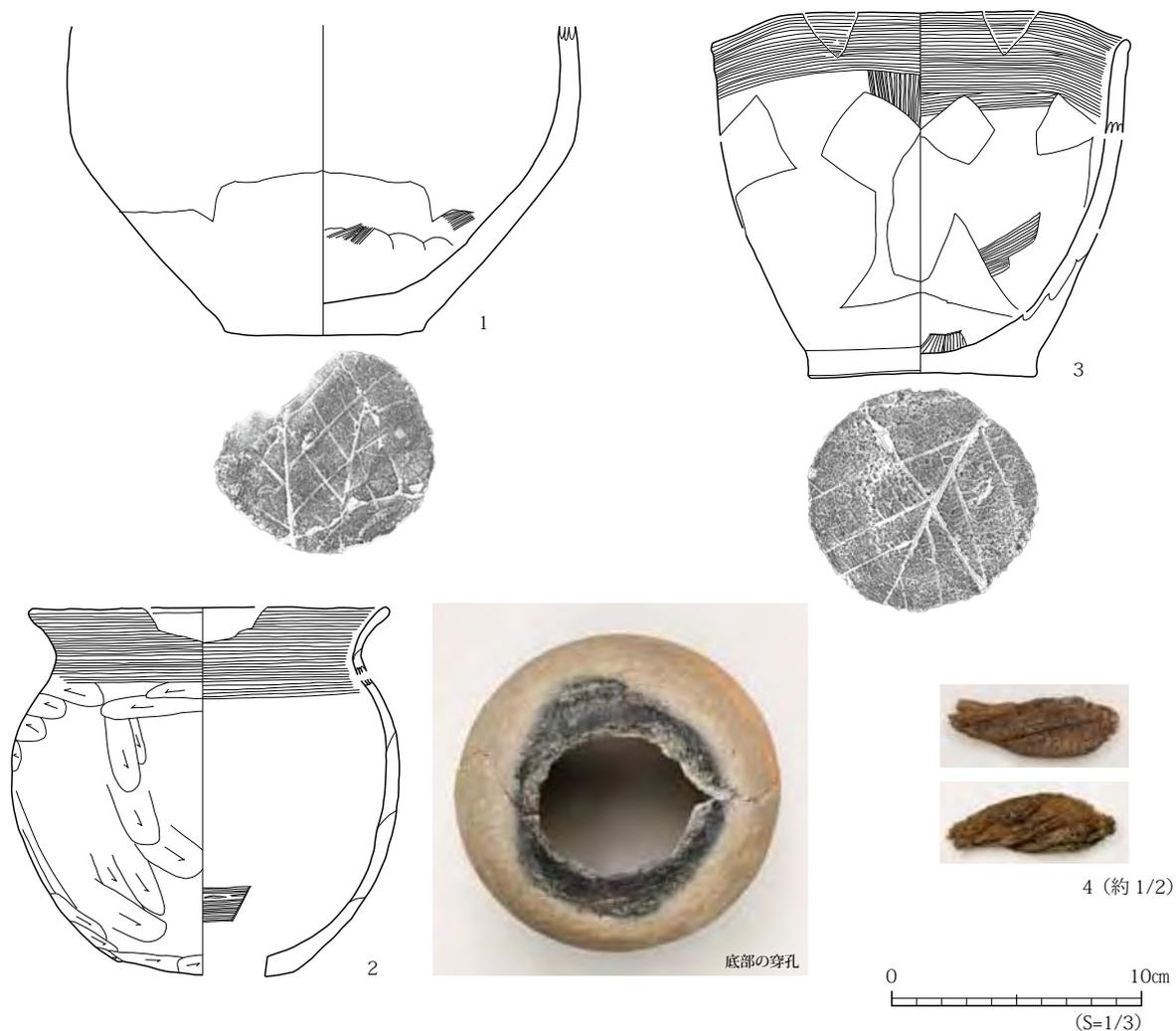


図版 21 SI3040・3041 住居跡 _ 写真

で、住居中央部を中心に分布する自然流入土である。2層は地山ブロックを多く含む暗褐～黒褐色シルト層で、床面を覆うかたちで分布し、中央部は薄く、壁寄りで厚くなっている。人為的な堆積土とみられるが、屋根の葺き土や周堤の一部が崩落したものの可能性もある。3層は煙道内に堆積した暗褐～黒褐色シルト層で、上位に一部が赤変した地山ブロック、下位に焼土・炭化物粒が多く含まれる。

遺物は、カマド燃焼部左側壁の芯材として用いられた土師器甕（図版 22 - 1）があり、カマド焚き口部の床面からは完形に近い胴張形の土師器甕（図版 22 - 2）と鉢形の土師器甕（図版 22 - 3）が出土している。胴張形の甕の底部は穿孔されていた。

また、堆積土 1 層から土師器坏、須恵器坏の小破片と漆の濾し布（図版 22 - 4）が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SI3041・カマド左袖中	土師器甕	体下半部	—	(8.0)	—	内面：ハケ目 底部：木葉痕 加熱を受け黒色化		R-3	B15161
2	SI3041・床面	土師器甕	ほぼ完形	(14.2)	(7.0)	(14.9)	外面：ケズリ 内面：ハケ目→内外共に口縁付近ヨコナデ 底部に穿孔	33-5	R-1	B15161
3	SI3041・床面	土師器甕	2/3	(16.6)	(9.0)	14.7	外面：ハケ目 内面：ハケ目・ハケ目→内外共に口縁付近ヨコナデ 底部：木葉痕 炭化物付着	33-6	R-2	B15161
No.	出土遺構・層位	種類	残存	特徴			写真図版	登録	箱番号	
4	SI3041・1層	漆濾し布	破片	現存長 4.8cm				R-4	B15161	

図版 22 SI3041 住居跡 _ 出土遺物

【SI3042 住居跡】（図版 6）

調査区南部の西小トレンチ内で竪穴住居の西壁とみられる掘り込みと床、周溝を検出した。確認面は地山面で、上部は第V層に覆われていた。SF3050 a 築地塀跡、SX3049・3054 整地層、SX3056 溝状掘り込み、SD3064 溝より古い。

地山を壁としており、壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は0.3 m程で、壁の直下には上幅0.1～0.15 mの周溝が認められる。また、地山粘土ブロックを主体としたにぶい黄褐色粘土質シルトの掘方埋土を床としており、床面はほぼ平坦である。堆積土は地山粘土の大ブロックを多く含む黒褐色シルト層で、人為的に埋め戻されていると考えられる。

遺物は出土していない。

【SI3043 住居跡】（図版 15）

調査区中央部の南東寄りに位置する。確認面は地山面で、住居南半部がSK3087 土壌に壊されている。平面形は東西3.7 m以上×南北2.1 m以上の方形を基調としており、方向は、東辺でみると発掘基準線に対し、北で約24°西に偏している。SB3094 建物跡、SK3087 土壌より古い。第IV層との前後関係は、重複部が新しい暗渠溝に壊されて判然としない。

本住居の断面をそのほぼ中央を南北方向に縦断する新しい暗渠溝の壁面で観察すると、上部が著しく削平されており、堆積土は残存しない。北辺では上幅0.15～0.3 m、深さ0.2 m程の周溝が認められ、その断面は住居外側へ向かって斜めに抉り込まれた形状を呈する。周溝堆積土は締まりのない黒褐色砂質シルトで、壁材の抜取痕（溝）の可能性もある。また、地山粒を縞状に含む黒褐色砂質シルトの掘方埋土を床としていたとみられ、東辺の中央付近ではカマドの煙道とみられる長さ1.4 m、幅0.5 m程の溝を確認している。

遺物は出土していない。

【SI3044 住居跡】（図版 15）

調査区中央部の北寄りに位置する。確認面は地山面で、住居北西隅が調査区外へ及ぶ。平面形は東西3.7 m×南北3.7 mの方形を呈し、方向は、西辺でみると発掘基準線に対し、北で約43°西に偏している。SB3089・3095・3096・3097 建物跡、SK3120 土壌より古く、SB3088 建物跡より新しい。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、地山を壁としており、削平が著しい南辺では壁に沿って延びる上幅0.15～0.2 mの周溝が観察できる。この周溝は住居南西隅から南東方向に延びる長さ約3.4 m、上幅0.2～0.3 mの外延溝と接続している。掘方埋土を床としていたとみられ、南辺の壁際を除く住居内には暗褐～黒褐色の堆積土が残存する。また、住居東辺中央から外側へ0.5 m程離れた位置で長軸0.5 mの不整な楕円形を呈するピットを検出している。深さは0.15 mで、堆積土に炭化物粒が多く含まれる。このピットは、位置や堆積土の状況からカマドの煙出しピットと考えられ、東辺中央にカマドが付設されていることが窺われる。

遺物は出土していない。

【SI3045 住居跡】（図版 16）

調査区中央部の北西寄りに位置する。確認面は地山面で、住居南部が調査区にかかる。平面形は東西約 4.3 m×南北 2.5 m以上の方形を基調としており、方向は、南辺でみると発掘基準線に対し、西で約 32°南に偏している。SB3093・3095 建物跡、SK3046・3079・3083 土壌、SD3080 溝より古い。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、地山を壁としており、削平が著しい南辺では壁に沿って延びる上幅 0.1～0.15 mの周溝が観察できる。また、この周溝上面では壁柱穴の可能性がある径 0.2～0.3 mのピット 2 個を確認している。地山ブロックを主体としたにぶい黄褐色シルトの掘方埋土を床としており、調査区北壁際には床面直上に堆積した炭化物粒を多く含む黒褐色シルト層が残存する。

遺物は出土していない。

iv. 竪穴遺構

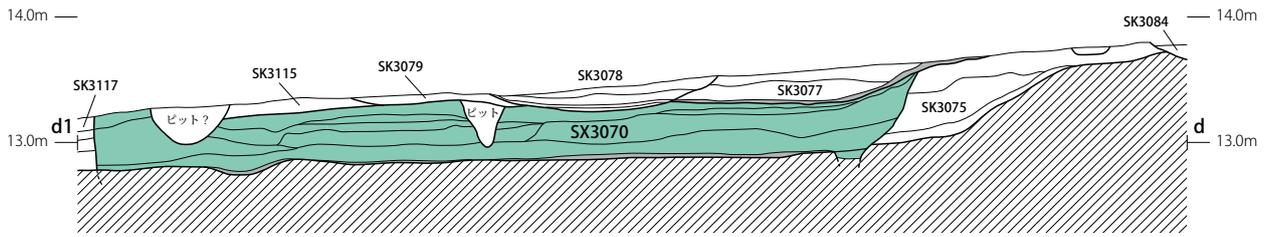
【SX3070 竪穴遺構】（図版 16・23～25）

調査区中央部の西寄りに位置する竪穴遺構で、主に中央トレンチ内で確認している。竪穴住居としたものに比べ規模が大きく、床面が炭化物の薄層に覆われ、埋土から鉄滓（椀型滓）が出土していることなどから鍛冶工房跡の可能性が考えられる。中央トレンチは本竪穴遺構を約 0.5 m幅で南北に縦断しており、南北の壁と床、周溝、床面から掘り込まれたピット（K 1）が捉えられた。北壁は SK3075 土壌、南壁は SK3117 土壌の上面から掘り込まれており、南壁の平面プランはトレンチ両脇でも部分的に確認できる。また、南壁の延長線上にあたる西壁トレンチの壁面（図版 25 の断面②・③）には小溝とその北側に人為的な埋土（直上に炭化物の薄層あり）が認められ、本竪穴遺構に伴う南壁下の周溝と掘方埋土の可能性もある。SB3094・3095 建物跡、SK3073・3074・3076～3078・3115 土壌より古く、SK3075・3117 土壌より新しい。西壁トレンチの状況も踏まえれば、さらに SK3112 土壌よりも新しい。

平面形は東西 5.6 m以上×南北 6.4 mの方形を呈するとみられ、西壁トレンチまで含めれば、東西は 6.9 m以上となる。残存する北壁の壁高は 0.6 m、南壁は 0.4 mで、北壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がり、南壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘方埋土を床としており、床面は多少の凹凸をもちながら南側へ緩やかに傾斜している。中央トレンチ内では、北壁の直下で上幅 0.2 m程の周溝を検出しており、南壁近くの床面には東西 0.3 m以上×南北 0.8 mの方形を基調とする深さ 0.2 m程の K 1 が認められる。堆積土は 7 層に分けられ、最下層は床面直上に堆積した厚さ 1～3 cmの炭化物粒を多量に含む黒色粘土質シルト層で、機能時の堆積とみられる。この層は K 1 の底面直上にも認められた。これより上は地山ブロックを多量に含む暗褐～にぶい黄褐色のシルト層で、一度に埋め戻されている可能性がある。

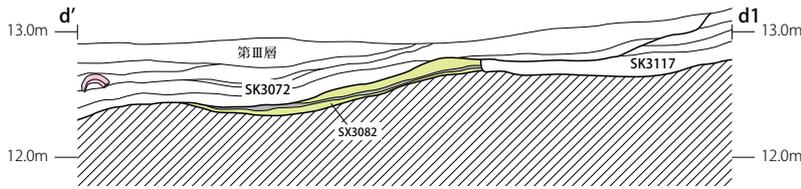
遺物は、K 1 の埋土から土師器甕（図版 24 - 1）が出土している。

また、竪穴遺構の埋土から土師器甕、須恵器坏、丸瓦の破片と鉄滓、弥生時代の遺物の混入品とみられる石包丁（図版 24 - 3）が出土している。丸瓦には「占」（図版 24 - 2）の刻印がみられるも

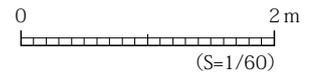


中央トレンチ西壁の北半部_南北断面 1

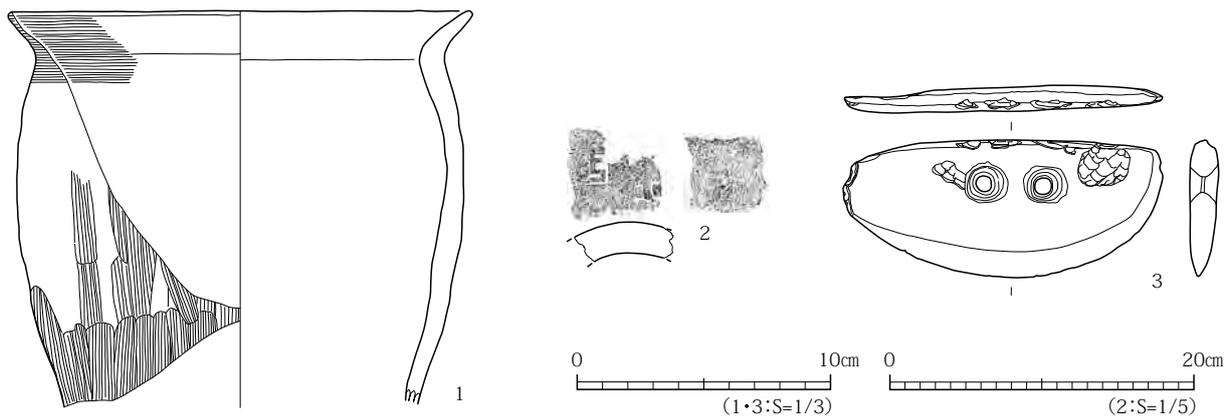
- SX3070 竪穴遺構(工房?)
- SX3082 整地層
- 瓦片
- 炭化物層



中央トレンチ西壁の北半部_南北断面 2



図版 23 中央トレンチ北半部_SX3070 竪穴遺構・土壙・SX3082 整地層



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX3070・K 1 埋土	土師器 甕	1/4	—	(8.0)	—	外面：粗いヘラナデ、口縁付近ヨコナデ	33-7	R-69	B15162
2	SX3070・埋土	丸瓦	破片	—	—	2.0	II B 類 凸面に刻印「占」A		R-180	B15162
3	SX3070・埋土	石包丁	ほぼ完形	12.7	5.5	1.1		33-8	R-70	B15162

図版 24 SX3070 竪穴遺構_出土遺物

のが1点ある。鉄滓は椀型滓である。

v. 杭列跡

【SA3065 杭列跡】(図版6)

調査区南端部の東壁トレンチ内で検出した東西方向の杭列跡で、0.6 mにわたって確認しており、さらに東西両側へ延びる。東壁トレンチを地山面まで掘り下げた段階でその存在を認識したが、トレンチ壁面の観察から掘方をもたないことは明らかで、打ち込みの杭列であったと考えられる。少なくとも第Ⅶ層(旧表土)よりも上部から打ち込まれているが、打ち込み面は判然としない。

トレンチ内では、径0.1 m前後の杭材の痕跡4本が0.05～0.1 mの間隔でほぼ連続して並んでおり、杭の並びにはやや凹凸がみられる。杭列の大まかな方向は、発掘基準線に対し、西で8～11°南に偏している。

この杭列に伴う遺物は出土していない。

vi. 集石遺構

【SX3105 集石遺構】(図版14)

調査区北部の西半に位置する遺構で、東西最大3.8 m、南北最大8.6 mの範囲が不整形に掘り窪められ、その中に大小の礫が集中する状態であった。確認面は地山面で、北端部から南へ5.0 m程までは東西幅1.5 m前後のいびつな溝状を呈し、その先で一度括れた後、南端部は径3.0 m前後の不整形に膨らんで、東へ延びるSD3108溝、南へ延びる3130溝と接続している。SB3090建物跡より新しい。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、黒褐色シルトの遺構堆積土中には径5～40 cmの礫が多量に含まれている。遺構縁辺に沿って規則的に並べられた可能性がある礫(図版14の濃い灰色の塗りで示した礫)もみられるが、大半の礫の分布に規則性は見出せない。また、礫の種類や形状、大きさに関しても統一的な規格は認められない。

遺物は、礫に混じって土師器、須恵器、瓦の小破片が出土している。

vii. 土壌

検出した土壌については第3表にまとめた。以下では、主なものについて説明を加える。

【SK3072 土壌】(図版6・8～10・23・25・26)

調査区南部で検出した大土壌で、SF3050築地塀跡北側の第Ⅲ層下に位置している。確認面はSX3053整地層およびSK3085・3117土壌堆積土の上面で、調査区の東西両側へさらに広がる。SK3116土壌より古く、SX3051 b・3052・3053・3082整地層、SK3085・3117土壌、SD3057・3058・3071溝より新しい。

平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西10.0 m以上、南北7.2 m以上である。断ち割りを実施した東壁・中央・西壁トレンチで断面(図版8～10・23・25)を観察すると、深さは0.45 m程で、底面にはやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は炭化物粒を含む褐～黒褐色のシ

ルト層もしくは砂質シルト層からなり、調査区東壁付近では堆積土の上位に灰白色火山灰層が認められる。いずれの層も自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、鉄製品、石製品が出土しており、土師器、須恵器と瓦の量が多い。

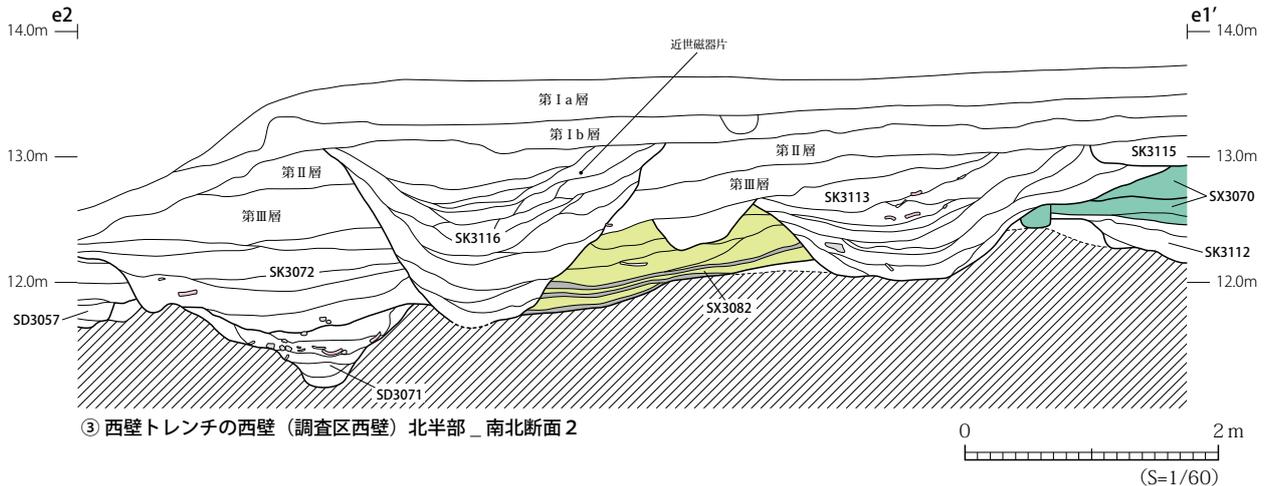
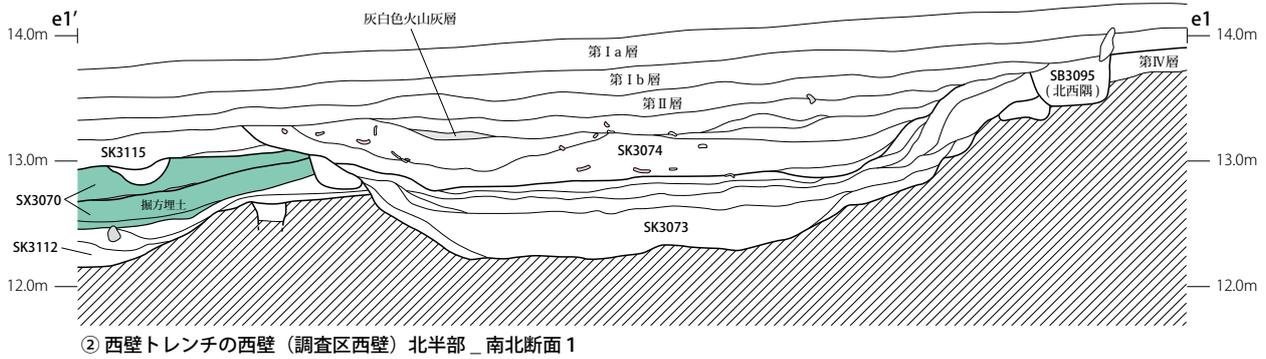
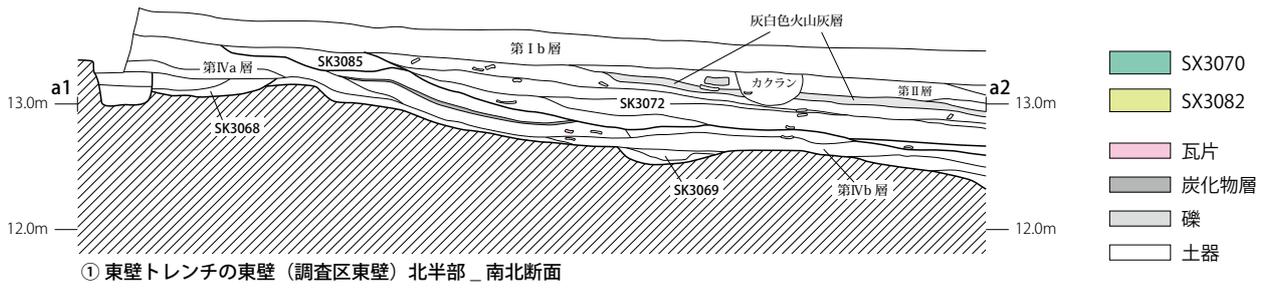
土師器には坏(図版 26 - 7 ~ 10)・高台坏・甕(図版 26 - 11)があり、須恵器には坏(図版 26 - 1・2)・高台坏(図版 26 - 4)・高台皿(図版 26 - 5)・蓋(図版 26 - 3)・瓶(図版 26 - 6)・甕がある。須恵系土器は高台坏(図版 26 - 12)が出土している。

瓦は、類別できるものをみると、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類・ⅠB類・ⅡB類aタイプ・ⅡC類があり、平瓦はⅡB類aタイプが主体である。平瓦には「物」(図版 26 - 15・16)の刻印がみられるものが2点ある。

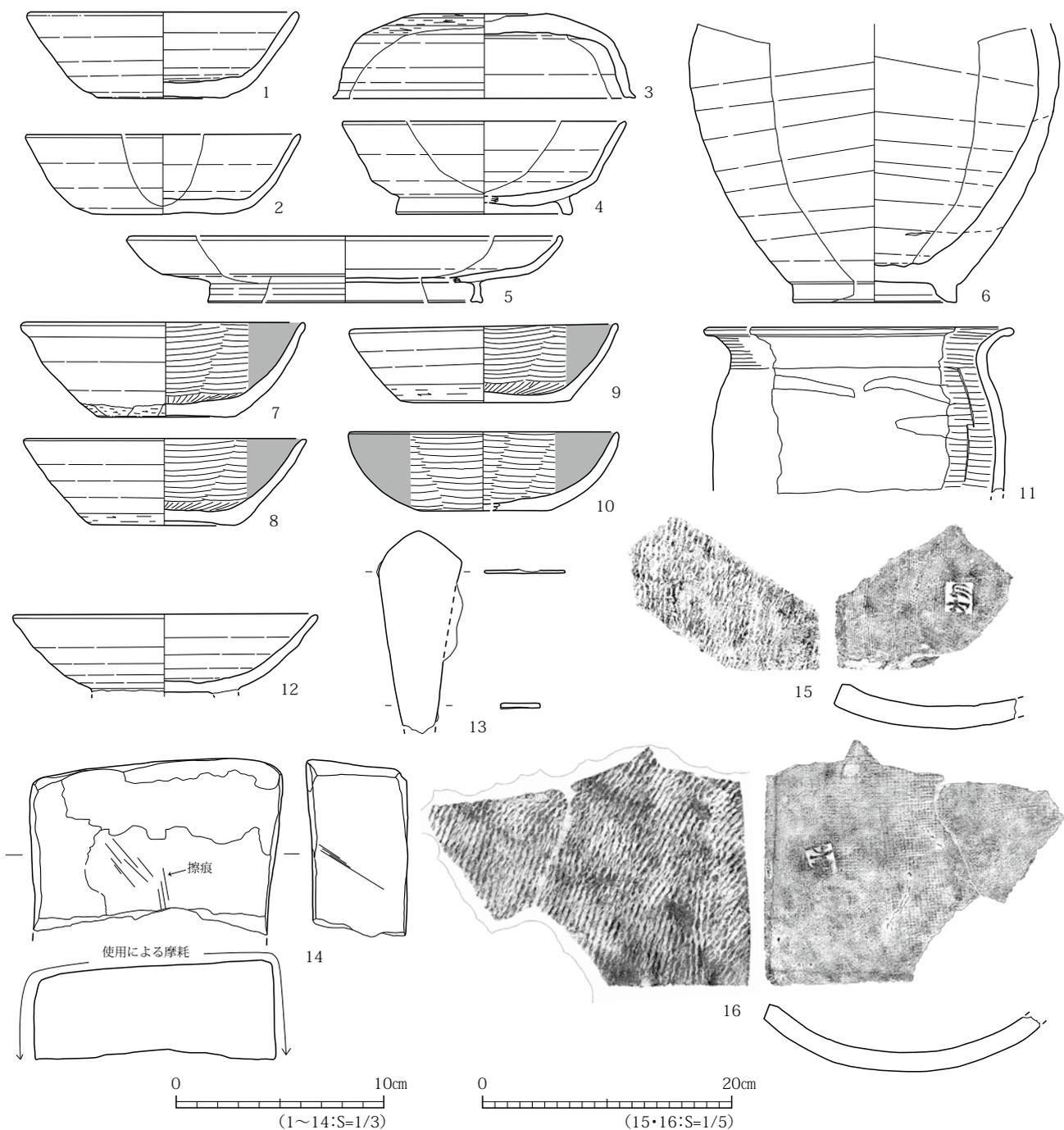
図版 26 - 13 は用途不明の鉄製品で、厚さ 2 mm 程度の扁平な菱形を呈している。石製品は砥石(図版 26 - 14)が1点出土している。

遺構番号	位置・確認面	主な重複関係	平面形・規模	断面形・深さ	堆積土	備考
SK3046	中央部北西寄り SI3045上面or地山面	SB3093・3095、SK3079、SD3080より古 SI3045より新	方形基調 東西約3.0m×南北1.7m以上		最上位は黒褐色シルト層	
SK3061	南部(東壁トノ内)・SX3052上面	SD3062より古 SX3051・3052、SD3057・3058より新	楕円形基調 東西0.3m以上×南北1.2m	楕円形 0.5m	暗褐色～黒褐色シルト層	
SK3068	中央部(東壁トノ内)・第IVb層上面	SK3085より古	楕円形基調・東西1.0m以上×南北1.2m	皿形・0.15m	褐色～黒褐色シルト層	
SK3069	南部(東壁トノ内)・第IVb層下の地山面	SK3072より古	不整形・東西1.0m以上×南北1.4m	皿形・0.15m	褐色～黒褐色砂質シルト層、下明褐色シルト層	
SK3072	南部 第Ⅲ層下のSX3053、SK3085・3117上面	SK3116より古/SX3051b・3052・3053・3082、 SK3085・3117、SD3057・3058・3071より新	不整形 東西10.0m以上×南北7.2m以上	皿形 0.45m	褐色～黒褐色のシルトor砂質シルト層、 上位に灰白色火山灰が堆積	
SK3073	中央部西端・地山面	SB3093・3095、SK3074、SD3080より古 SX3070より新	楕円形基調・東西2.7m以上×南北6.4m以上	逆台形・1.5m	上暗褐色～黒褐色シルト層、下木製品・ 木片・樹皮等を多量に含む黒色粘土層	
SK3074	中央部西寄り SK3073・3076上面or地山面	SB3093・3094・3095、SK3077より古 SX3070、SK3073・3076より新	不整形 東西5.5m以上×南北6.6m	逆台形 0.7m	暗褐色～黒褐色のシルト層、 上位に灰白色火山灰が堆積	
SK3075	中央部や西寄り 地山面	SB3094・3095、SX3070、 SK3077・3084・3121より古	不整形 東西4.0m×南北3.2m以上	逆台形 0.7m	にぶい黄褐色～暗褐色砂質シルト層	
SK3076	中央部西半 SK3115上面or地山面	SB3094・3095、SK3074・3077・3078より古 SX3070より新	不整形 東西7.7m以上×南北4.0m以上	皿形 0.1m	褐色砂質シルト層	
SK3077	中央部西寄り SK3074・3075・3076上面or地山面	SB3094・3095、SK3078より古 SX3070、SK3074・3075・3076より新	不整形長方形 東西4.8m×南北3.1m	皿形 0.3m	黒褐色砂質シルト層、 底面直上に薄い炭化物層	
SK3078	中央部や西寄り、SK3076・3077上面	SB3094・3095、SX3070、SK3076・3077より新	不整形長方形・東西約1.2m×南北1.8m	皿形・0.2m	炭化物粒を多く含む暗褐色砂質シルト層	
SK3079	中央部北西隅・SI3046上面or地山面	SB3093より古、SI3046より新	円形基調・東西1.9m以上×南北1.1m以上		最上位は黒褐色シルト層	
SK3083	中央部北西寄り・SI3045上面or地山面	SB3095より古、SI3045より新	不整形楕円形・長軸1.6m×短軸1.3m		最上位は焼土塊を多量に含む黒褐色シルト層	
SK3084	中央部北西寄り・SK3075上面or地山面	SB3095より古、SK3075より新	不整形円形・東西約1.2m×南北1.1m		最上位は褐色砂質シルト層	
SK3085	中央部南寄り SX3070・SK3115上面	SK3072より古 SX3070、SK3068・3115より新	不整形 東西約3.2m以上×南北1.8m以上	皿形 0.15m	黒褐色シルト層	
SK3086	南部(東壁トノ内)・第IVb層下の地山面	SK3072より古	円形基調・東西0.9m以上×南北1.4m	皿形・0.2m	黒褐色土アロウを含む明褐色シルト層	
SK3087	中央部南東隅・SI3043上面or地山面	SB3094より古 SI3043より新	不整形・東西約6.0m以上×南北3.2m以上	皿形(底面に凹凸) 0.55m	上褐色砂質シルト層、下地山アロウ・ 凝灰岩片を含むにぶい黄褐色砂質シルト層	
SK3102	北部・地山面	SB3090・3098より新	円形・東西0.9m×南北0.8m	逆台形・0.25m	黒褐色砂質シルト層	
SK3103	北部東端・地山面	SB3090より新	長方形・東西1.8m以上×南北1.2m	中に軽い段が付く 逆台形・0.8m	上礫を含む暗褐色～黒色シルト層、下礫を多量に 含む黄褐色砂質シルト層で最上位に褐色砂層	
SK3110	南部(中央小トノ内)・第V層下の地山面	SF3050、SX3049・3054・3056、SD3064より古	円形基調・東西0.35m以上×南北1.0m	皿形・0.2m	上黒褐色シルト層、下地山アロウを多量に 含むにぶい黄褐色シルト層	
SK3112	中央部(西壁トノ内)・地山面	(SX3070)、SK3073・3074・3113・3115より古	不明・東西1.1m以上×南北3.4m以上	皿形(底面に凹凸) 0.75m	上炭化物粒を多く含む黒褐色粘土質シルト層 下地山アロウを多く含む黒褐色粘土質シルト層	
SK3113	中央部(西壁トノ内) 第Ⅲ層下のSX3070・3082上面	SK3115より古 SX(3070)・3082、SK3112より新	不明 東西1.1m以上×南北3.3m	逆台形 1.1m	上～中位暗褐色～黒褐色シルト層、下位炭化 物粒を多く含む黒褐色～黒色粘土質シルト層	
SK3115	中央部西半 SX3070・SK3117上面	SB3094・3095、SK3076より古 SX3070、SK3117より新	不整形 東西9.0m以上×南北2.3m以上	箱形 0.25m	地山小アロウを多く含む暗褐色シルト層	
SK3116	南部(西壁トノ内)・第Ⅱ層上面	SX3082、SK3072より新	円形?・東西0.8m以上×南北2.7m以上	「V」字形(漏斗形?) 1.4m以上	暗褐色～黒色の砂・シルト・粘土の互層	近世磁器片出土 井戸跡?
SK3117	中央部西寄り・SX3082上面	SX3070、SK3072・3115より古、SX3082より新	不明・東西4.2m以上×南北2.15m以上	箱形?・(0.4m)	暗褐色～にぶい黄褐色砂質シルト層	
SK3118	北部・地山面		楕円形・東西1.2m×南北0.6m	皿形・0.2m	黒褐色砂質シルト層	
SK3119	北部中央・地山面		不整形楕円形・東西1.0m×南北0.7m	逆台形・0.75m	焼土ブロックを含む黒褐色シルト層	
SK3120	北部南西寄り・SI3044上面or地山面	SI3044より新	不整形楕円形・長軸1.6m×短軸0.8m		最上位は黒褐色シルト層	
SK3121	中央部・地山面	SB3094・3095より古、SK3075より新	不整形円形・東西約1.6m×南北約1.4m		最上位は黒褐色シルト層	
SK3122	南部西寄り・第Ⅲ層上面	SK3072より新	円形・東西1.4m×南北1.5m		最上位は黒褐色シルト層	
SK3123	北部北西隅・地山面	SB3090より新	不整形・東西0.9m以上×南北1.9m以上	皿形・0.1m	黒褐色砂質シルト層	

第3表 第83次調査検出土壌一覧



図版 25 東・西壁トレンチ北半部断面_SX3070 竪穴遺構、土壌、SX3082 整地層



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK3072・堆積土	須恵器 環	1/3	13.2	6.4	4.2	底部：手持ちケズリ		R-98	B15162
2	SK3072・堆積土	須恵器 環	2/3	(15.2)	(6.8)	3.9	底部：回転ヘラ切り		R-102	B15162
3	SK3072・堆積土	須恵器 蓋	1/2	(14.6)	—	4.1	天井部：回転ケズリ		R-107	B15162
4	SK3072・堆積土	須恵器 高台環	1/3	(13.6)	(8.4)	4.5	底部：?→回転ケズリ		R-104	B15162
5	SK3072・堆積土	須恵器 高台皿	1/4	(20.8)	(13.2)	3.2			R-105	B15162
6	SK3072・堆積土	須恵器 瓶	1/4	—	(7.8)	—			R-103	B15162
7	SK3072・堆積土	土師器 環	2/3	13.7	6.8	4.6	外面体部下半から底部：手持ちケズリ	ロケロ調整	R-110	B15162
8	SK3072・堆積土	土師器 環	3/4	(13.8)	(6.8)	4.2	底部：回転糸切→外面下半回転ケズリ	内面：ミガキ	R-114	B15162
9	SK3072・堆積土	土師器 環	1/3	13.0	8.2	3.8	底部：回転糸切→外面下半回転ケズリ	黒色処理	R-119	B15162
10	SK3072・堆積土	土師器 環	1/4	(14.1)	(6.0)	3.8	内外面黒色処理 内外面共にミガキ		R-112	B15162
11	SK3072・堆積土	土師器 甕	口縁のみ	(15.)	—	—	内面ヘラナデ→内外面口縁付近ヨコナデ		R-113	B15162
12	SK3072・堆積土	須恵系土器 高台環	2/3	14.8	—	—		32-16	R-120	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
13	SK3072・堆積土	不明鉄製品	—	(9.6)	3.9	0.2	用途不明。	36-1	R-126	B15162
14	SK3072・堆積土	砥石	1/3	—	12.2	4.7	表面は使用による摩耗の痕跡がある。	36-2	R-125	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
15	SK3072・堆積土	平瓦	破片	—	—	1.8	凹面広端左隅に刻印「物」A		R-78	B15162
16	SK3072・堆積土	平瓦	破片	—	—	1.5	凹面広端左隅に刻印「物」A		R-77	B15162

図版 26 SK3072 土壌 _ 出土遺物

【SK3073 土壌】（図版 16・25・27）

調査区中央部の西端に位置する土壌で、北縁以外の上部が SK3074 土壌に壊されている。確認面は地山面で、調査区西側へさらに広がる。SB3093・3095 建物跡、SK3074 土壌、SD3080 溝より古く、SX3070 竪穴遺構より新しい。

平面形は南北に長い楕円形を基調とし、規模は東西 2.7 m 以上、南北 6.4 m 以上である。断ち割りを実施した西壁トレンチで断面（図版 25 の断面②）を観察すると、深さは 1.5 m 程で、底面には多少の凹凸がみられるものの、概ね平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がる。堆積土は上下 2 層に大別され、上層は炭化物粒や砂ブロックを含む暗褐～黒褐色のシルト層で、自然流入土である。下層は木製品や木片、樹皮などを多量に含む黒色粘土層で、遺物の廃棄層とみられる。

遺物は、下層から木製の網針（図版 27 - 2）が出土している。断ち割りを実施した西壁トレンチでは、本土壌下層の土壌をすべて採取しているが、未洗浄のため他の遺物については後に報告する。

【SK3074 土壌】（図版 16・25・27）

調査区中央部の西寄りで検出した土壌で、第Ⅱ層下に位置している。確認面は SK3073・3076 土壌の堆積土上面もしくは地山面で、調査区西側へさらに広がる。SB3093・3094・3095 建物跡、SK3077 土壌より古く、SX3070 竪穴遺構、SK3073・3076 土壌より新しい。

平面形は不整な方形を呈するとみられ、規模は東西 5.5 m 以上、南北 6.6 m である。断ち割りを実施した西壁トレンチで断面（図版 25 の断面②）を観察すると、深さは 0.7 m 程で、底面はほぼ平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がる。堆積土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐～黒褐色のシルト層からなり、上位には灰白色火山灰の堆積が認められる。また、下位に比較的多く瓦片が含まれていた。いずれの層も自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器甕、須恵器蓋、単弧文軒丸瓦 640a タイプ（図版 27 - 1）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠC 類 a タイプ・ⅡB 類が出土している。

【SK3075 土壌】（図版 16・23）

調査区中央部のやや西寄りに位置する土壌で、南西部を SX3070 竪穴遺構と SK3077 土壌に壊されている。確認面は地山面である。SB3094・3095 建物跡、SX3070 竪穴遺構、SK3077・3084・3121 土壌より古い。

平面形は不整形を呈し、規模は東西 4.0 m、南北 3.2 m 以上である。断ち割りを実施した中央トレンチで断面（図版 23 の断面）を観察すると、深さは 0.7 m 程で、底面はほぼ平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がり、上端部では緩やかな傾斜となっている。堆積土はにぶい黄褐～暗褐色の砂質シルト層で、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SK3077 土壌】（図版 16・23・27）

調査区中央部のやや西寄りに位置する土壌で、確認面は SK3074・3075・3076 土壌の堆積土

上面もしくは地山面である。SB3094・3095 建物跡、SK3078 土壇より古く、SX3070 竪穴遺構、SK3074・3075・3076 土壇より新しい。

平面形は不整な長方形を呈し、規模は東西 4.8 m、南北 3.1 m である。断ち割りを実施した中央トレンチで断面（図版 23 の断面）を観察すると、深さは 0.3 m、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は自然流入土とみられる黒褐色の砂質シルト層を主体としており、最下位には底面から壁に添って厚さ 1～3 cm の炭化物層が認められる。

遺物は、堆積土中から土師器坏（図版 27 - 3・4）、須恵器甕が出土している。

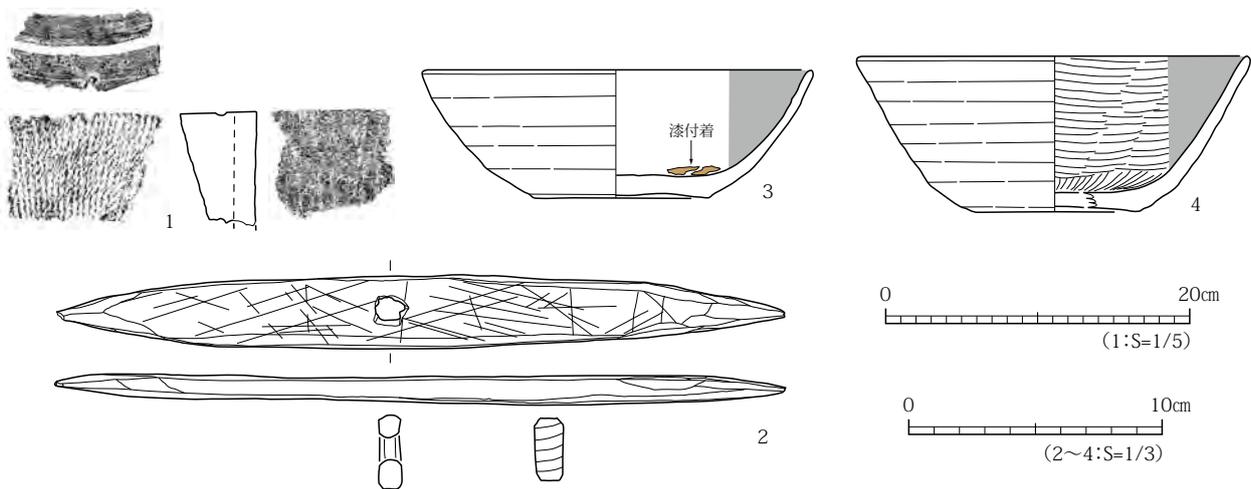
【SK3087 土壇】（図版 15）

調査区中央部の南東隅に位置する土壇である。確認面は SI3043 住居跡の掘方埋土上面もしくは地山面で、調査区の東側と南側へさらに拡がる。SB3094 建物跡より古く、SI3043 住居跡より新しい。

平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西 6.0 m 以上、南北 2.3 m 以上である。断ち割りを実施した部分でみると、深さは最大 0.55 m で、底面の凹凸が著しく、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は上下 2 層に大別され、上層は褐灰色の砂質シルト層で、土壇上部の窪みに堆積した自然流入土とみられる。下層は地山ブロックと凝灰岩の岩片を含む黄褐色砂質シルト層で、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。

【SK3103 土壇】（図版 14・28）

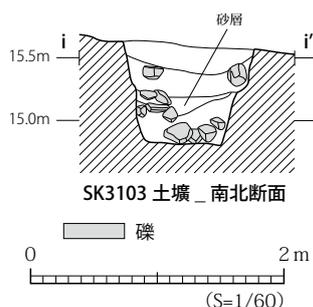
調査区北部の東端に位置する土壇である。確認面は地山面で、調査区の東側へさらに拡がる。SB3090 建物跡より新しい。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
					狭端	広端					
1	SK3074・堆積土	軒平瓦	瓦当破片	—	—	—	5.0	単弧文 640-a タイプ		R-81	R15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴		写真図版	登録	箱番号
2	SK3073・下層	木製品 網針	完形	28.8	2.9	1.2	ほぼ中央に径 0.9cm の穴が穿たれている。		36-3	R-268	R15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴		写真図版	登録	箱番号
3	SK3077・堆積土	土師器 坏	ほぼ完形	15.4	6.8	5.2	㇀調整 内面黒色処理 底部：回転糸切 内面に漆付着		32-2	R-86	R15162
4	SK3077・堆積土	土師器 坏	1/3	15.6	6.4	6.2	㇀調整 内面黒色処理 内面：ガキ 底部：回転糸切			R-87	R15162

図版 27 SK3073・3074・3077 土壇 _ 出土遺物

平面形は東西に長い長方形を呈するとみられ、規模は東西 1.8 m 以上、南北 1.2 m である。全体を 0.4 m 程掘り下げた時点で礫が集中して出土したため、掘り下げを中止して礫の分布状況を把握し、底面までの断ち割り調査区東壁



図版 28 SK3103 土壙 _ 断面・写真

際（南北方向）で実施した。深さは 0.8 m で、断面形は逆台形を呈するが、壁の中位に軽い段が付く。堆積土は概ね壁に付く段を境に上下 2 層に大別され、上層は暗褐～黒色のシルト層で、自然流入土とみられる。下層は主に径 5～30cm の礫を多量に含む黄褐色砂質シルト層で、人為的に埋め戻されていると考えられる。礫は上層にも含まれるが、下層では密に詰め込まれた状態で集中分布しており、その種類や形状、大きさに統一的な規格は認められない。なお、下層最上部の浅い窪みには褐色の砂層が堆積していた。

遺物は出土していない。

viii. 溝

【SD3047 溝】（図版 6・9）

調査区南部の西壁トレンチ内で検出した北西－南東方向に延びる溝である。確認面は地山面で、上部を第 V 層に覆われている。溝はさらに北西・南東方向へ続く。SF3050 a 築地堀跡、SX3049 整地層、SD3063 溝より古い。

規模は、長さが 1.7 m 以上で、上端幅は 0.4～0.7 m、深さは 0.1～0.25 m である。断面形は皿形を呈する。堆積土は炭化物粒を含む黒褐色の粘土質シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器甕の小破片が出土している。

【SD3048 溝】（図版 6・8・29）

調査区南部の東壁トレンチ内で検出した遺構で、東西方向に延びる溝とみられる。検出範囲が狭いため断定は難しく、土壙などの可能性も残る。確認面は SI3041 住居跡の堆積土上面もしくは地山面で、上部を第 V 層に覆われている。SF3050 a・b 築地堀跡、SX3056 溝状掘り込み、SX3054 整地層より古く、SI3041 住居跡より新しい。

規模は、長さが 1.8 m 以上で、上端幅は 2.2 m 前後、深さは 0.3 m 程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は褐色シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、土錘（図版 29－1）が出土している。

【SD3062 溝】（図版 6・29）

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SX3055 溝状掘り込み上面もしくは SF3050 築地堀跡北側の

堆積層上で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続いていたとみられるが、上部の削平が著しく、調査区東西の壁際で途切れている。SX3055 溝状掘り込み、SX3049・3051 a・3052 整地層より新しい。

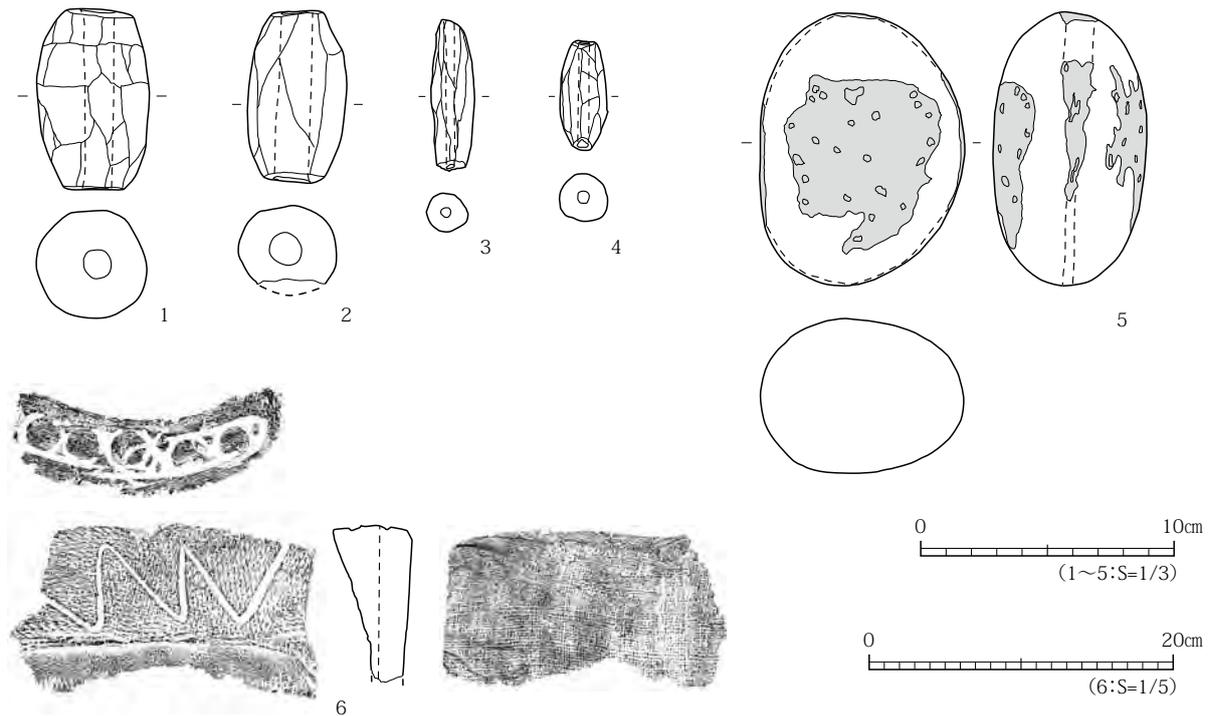
規模は、長さが約 9.0 m で、上端幅は 0.9 ~ 1.3 m、深さは 0.1 ~ 0.15 m である。断面形は皿形を呈する。堆積土は褐灰色の砂質シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏、須恵器坏・蓋・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類・ⅡC類、土錘（図版 29 - 2 ~ 4）、羽口、鉄釘、敲石（図版 29 - 5）が出土している。

【SD3063 溝】（図版 6・9）

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SF3050 a・b 築地堀跡の積土上面で確認した。溝はさらに調査区の西側へ続き、東側は調査区東壁付近で途切れている。SF3050 a・b 築地堀跡、SX3056 溝状掘り込み、SX3049 整地層、SD3047 溝より新しい。

規模は、長さが 8.4 m 以上で、上端幅は 0.5 ~ 1.3 m、深さは 0.1 ~ 0.35 m である。断面形は皿形を呈し、底面はやや凹凸をもちながら全体として西側へ傾斜している。堆積土は黒褐色シルト層で、



No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	直径	孔径	特徴	写真図版	登録	箱番号	
1	SD3048・堆積土	土錘	完形	7.2	4.5	1.1			R-6	B15163	
2	SD3062・堆積土	土錘	ほぼ完形	6.7	3.8	1.3		33-10	R-42	B15163	
3	SD3062・堆積土	土錘	ほぼ完形	—	1.6	0.4		33-11	R-43	B15163	
4	SD3062・堆積土	土錘	完形	4.4	1.9	0.5		33-12	R-44	B15163	
No.	出土遺構・層位	種類	残存	法量		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号	
5	SD3062・堆積土	敲石	完形	長軸 11.0	短軸 8.2	6.2		33-9	R-45	B15163	
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	幅		厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
6	SD3107・確認	軒平瓦	瓦当面破片		狭端	広端					

図版 29 SD3048・3062・3107 溝_出土遺物

自然流入土とみられるが、溝の西部には径 10～20cmの礫が比較的多く含まれていた。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類・ⅠB類・ⅡB類・ⅡC類、羽口が出土している。いずれも破片で、図示できるものはない。

【SD3064 溝】（図版 6・10）

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SX3054 整地層上面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続いていたとみられるが、上部の削平が著しく、調査区東西の壁付近で途切れている。SX3054 整地層より新しい。

規模は、長さが約 6.5 m で、上端幅は 0.15～0.3 m である。断ち割りを実施した中央小トレンチ（図版 10 の断面①）でみると、深さは 0.15 m 程で、断面形は「U」字形を呈する。堆積土は砂の小ブロックを含む褐色シルト層で、自然流入土とみられる。遺物は出土していない。

【SD3067 溝】（図版 6・8・9）

調査区南端部を東西方向に延びる溝で、SF3050 築地堀跡南側の崩壊土層および堆積層上で確認した。西壁トレンチの断面観察では、上部を第Ⅱ層に覆われている。調査区内に掛かるのは溝の北壁のみで、南壁の立ち上がりは未確認である。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SD3060 溝より新しい。

規模は、長さが 9.7 m 以上で、上端幅は 2.7 m 以上である。東・西壁トレンチで断面（図版 8 の断面①・図版 9 の断面①）を観察すると、双方の状況が異なっていた。東壁トレンチでは、深さは 1.0 m 以上で、溝の北壁上部は緩やかに傾斜し、途中から南へ向かってやや急角度に傾斜している。西壁トレンチでは、深さは 0.6 m 以上で、溝の北壁は緩やかに南側へ傾斜している。東壁トレンチの溝上層と西壁トレンチの溝堆積土の特徴は共通しており、褐色シルト層である。東壁トレンチの溝下層は黒褐色シルト層であった。いずれの層も自然流入土であるが、東壁トレンチの溝下層については別の古い溝の可能性もある。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅡB類・ⅡC類の破片が出土している。

【SD3106 溝】（図版 14）

調査区北端部で緩やかに弧を描きながら東西方向に延びる溝で、SD3124 溝の堆積土上面もしくは地山面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SB3099 建物跡より古く、SB3090 建物跡、SD3124・3125 溝より新しい。SD3107 溝とも東端部で重複しているが、平面精査ではその前後関係を捉えることができなかった。

規模は、長さが 10.4 m 以上で、上端幅は 0.35～0.7 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色の砂質シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から土師器坏・甕、須恵器坏、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類・ⅡC類の破片が出土している。

【SD3107 溝】（図版 14・29）

調査区北部を東－西－南方向に「L」字状に延びる溝で、地山面で確認した。溝はさらに調査区の東側へ続く。SD3126 溝より新しいが、SD3106 溝との前後関係は捉えられていない。

規模は、長さが東西 6.6 m 以上、南北 3.0 m で、上端幅は 0.2 ～ 0.7 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色の砂質シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から連珠文軒平瓦 831（図版 29－6）、丸瓦Ⅱ B 類、平瓦Ⅱ B 類・Ⅱ C 類が出土している。

【SD3108 溝】（図版 14）

調査区北部を東西方向に延びる溝で、地山面で確認した。溝はさらに調査区の東側へ続き、西端は SX3105 集石遺構に接続している。SK3119 土壙と接するかたちで僅かに重複しているが、前後関係は判然としない。

規模は、長さが 6.3 m 以上で、上端幅は 0.5 ～ 1.0 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から土師器坏・甕の小破片が出土している。

【SD3109 溝】（図版 14）

調査区北部の南寄りを東西方向に延びる溝で、SD3128 溝の堆積土上面もしくは地山面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SB3088・3091・3089 建物跡、SD3128・3129・3134 溝より新しい。

規模は、長さが 10.7 m 以上で、上端幅は 0.25 ～ 0.6 m、深さは 0.05 ～ 0.15 m である。断面形は「U」字形を呈し、底面は全体として東側へ緩やかに傾斜しているが、W 500 付近で軽い段が付いてそこから東側は一段深くなっている。堆積土は黒褐色シルト層で、自然流入土である。

遺物は出土していない。

ix. 整地層

【SX3082 整地層】（図版 24・25）

西壁・中央トレンチ内で検出した整地層で、調査区の中央部南寄りから南部北寄りに分布している。西側は調査区外へさらに続き、東側への延びは東壁トレンチで未検出のために判然としない。また、北側を SK3117 土壙に、南側を SK3072 土壙に大きく壊されているが、本来はさらに南北へも広がっていたとみられる。SK3072・3113・3116・3117 土壙よりも古い。

当時の地表面を地山面まで削り出して盛土整地したもので、東西 5.7 m 以上、南北 2.7 m の範囲に、厚さ 0.05 ～ 0.55 m で残存しており、西側ほど残りが良い。整地に用いられた土は地山（粘土質シルトと砂）ブロックを多量に含む褐～暗褐色シルトで、厚さ 5 ～ 20cm の単位に分けられ、下位には

厚さ 2 cm 前後の炭化物粒を主体とした間層が認められる。この炭化物の薄層は、西壁トレンチで 3 層、中央トレンチで 1 層確認されており、削り出した地山面に沿って南側へ傾斜している。この間層を境に整地時期が異なる可能性もあるが、今回の調査では炭化物層下の各層から掘り込まれた遺構は確認できなかった。

遺物は出土していない。

x. 基本層序各層の出土遺物

基本層序各層から出土した遺物について主なものを記す。土器類全体を概観すると、須恵系土器の出土量が少ない点が注目される。また、青磁、白磁は認められず、第 28 次調査で多量に出土した緑釉陶器、灰釉陶器も本調査では出土量が少ない。

なお、基本層序各層から出土した刻印文字瓦については第 4 表にまとめた。

【第 I a 層】(図版 30)

土器、瓦、土製品、鉄製品、古銭が出土している。

土器は土師器、須恵器、須恵系土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、近世陶器、近世磁器、近世鉄釉陶器、近世鉄釉磁器が出土している。土師器には坏・高台坏・埴・蓋・甕があり、須恵器には坏(図版 30-1)・高坏(図版 30-3)・高台坏・埴・蓋(図版 30-2)・鉢・瓶・甕(図版 30-4)がある。須恵系土器は坏(図版 30-5~7)・高台坏・埴・蓋・甕が出土している。緑釉陶器には碗?(図版 30-9)、灰釉陶器には皿(図版 30-8)がみられる。

瓦は、類別できるものをみると、丸瓦 I A 類・II B 類、平瓦 I A 類・I C 類 a タイプ・I C 類 b タイプ・I D 類・II B 類 a タイプ・II B 類 b タイプ・II C 類がある。

土製品は、先端に鉄滓が付着した羽口(図版 30-10)が出土している。

鉄製品には底部の一部に銅滓が付着した埴塼(図版 30-11)があり、古銭(図版 30-12)は完形の洪武通宝である。

【第 I b 層】(図版 31)

土器、硯、瓦が出土している。

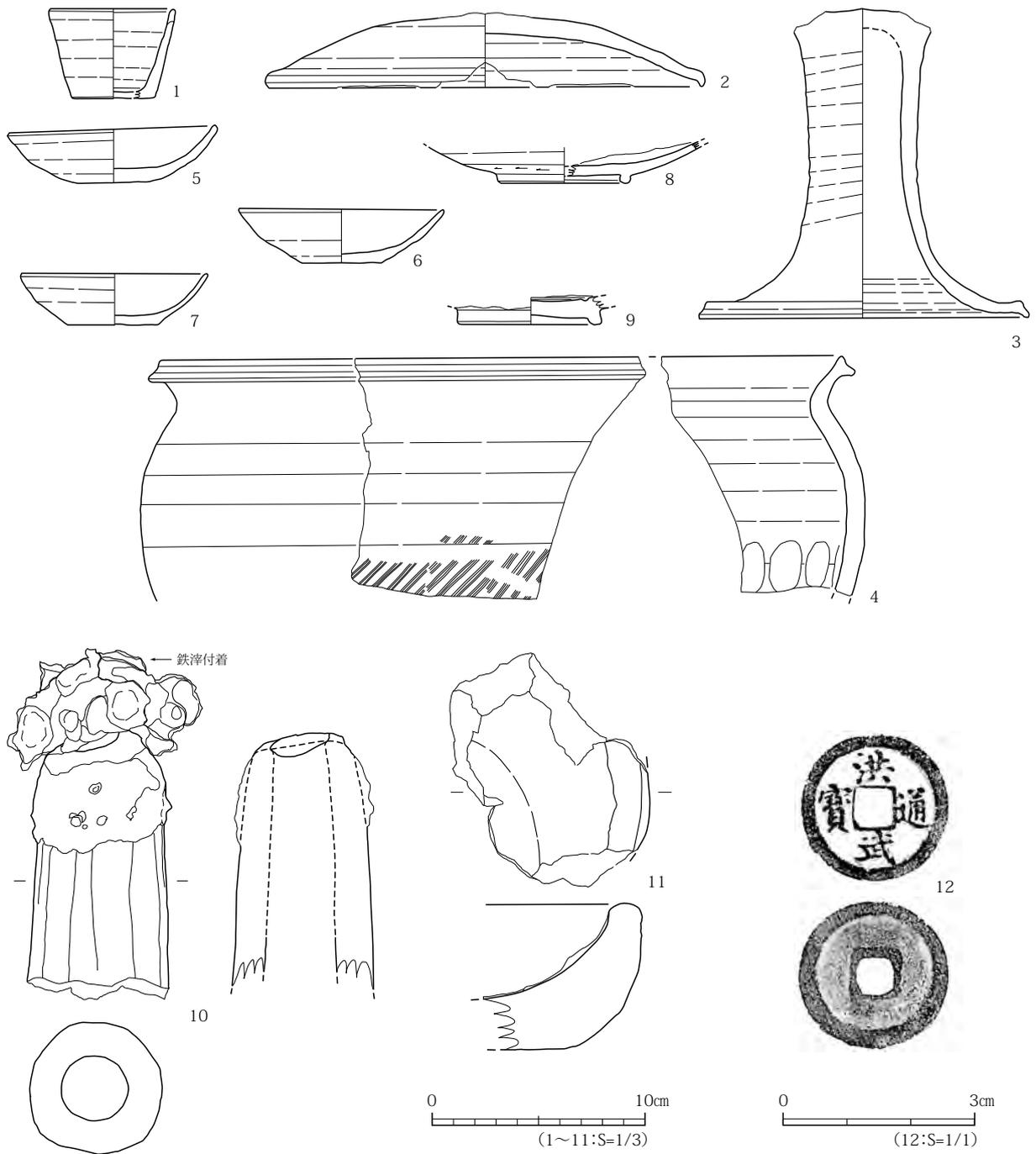
土器には土師器坏(図版 31-2)・鉢(図版 31-4)・壺・甕、須恵器坏(図版 31-1)・壺・瓶・甕、須恵系土器坏(図版 31-3)・埴・台付鉢、灰釉陶器瓶と弥生土器の小破片がある。

硯には円面硯の脚部が 1 点ある。

瓦は、類別できるものに、丸瓦 II B 類、平瓦 I C 類 b タイプ・II B 類 a タイプ・II B 類 b タイプ・II C 類がある。

【第 II 層】(図版 31)

土器、硯、瓦が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第1a層(南部)	須恵器 坏	1/4	(5.8)	(3.8)	4.3	底部:回転ケズリ		R-233	B15163
2	第1a層(南部)	須恵器 蓋	ほぼ完形	(20.4)	—	—	天井部内面にヘラ書き「×」		R-53	B15163
3	第1a層(南部)	須恵器 高坏	脚部のみ	—	(15.2)	—			R-54	B15163
4	第1a層(西壁トレンチ)	須恵器 甕	口縁部破片	(32.0)	—	—	外面:平行叩き目 内面:当て具痕		R-230	B15163
5	第1a層(南部)	須恵系土器 坏	完形	9.7	3.4	2.5	底部:回転糸切	32-18	R-59	B15163
6	第1a層(南部)	須恵系土器 坏	完形	9.6	3.8	2.6	底部:回転ケズリ	32-19	R-60	B15163
7	第1a層(南部)	須恵系土器 坏	完形	8.8	4.3	2.5	底部:回転ケズリ	32-17	R-61	B15163
8	第1a層(南部)	灰釉陶器 皿	底部のみ	—	6.2	—	底部:回転ケズリ 内面全面施釉 粒状トチン痕	32-14	R-240	B15163
9	第1a層(中央部)	緑釉陶器 碗?	底部のみ	—	6.8	—	内面に沈線による円	32-8	R-242	B15163
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	直径	孔径	特徴	写真図版	登録	箱番号
10	第1a層(南部)	羽口	一部破損	—	6.2	3.2	先端に鉄滓付着	36-4	R-58	B15163
No.	出土遺構・層位	種類	残存	法量	厚さ		特徴	写真図版	登録	箱番号
11	第1a層(中央部)	埴塼	底部破片	—	2.0		内面底部付近に銅滓付着	36-5	R-267	B15163
12	第1a層(北部)	古銭	完形	直径2.3mm			洪武通宝		R-264	B15163

図版 30 基本層序第1a層_出土遺物

土器には土師器坏・埴・甕、須恵器坏（図版 31 - 5）・高台坏・蓋・瓶・甕と弥生土器の小破片がある。
 硯は風字硯の側辺部が 1 点出土している。

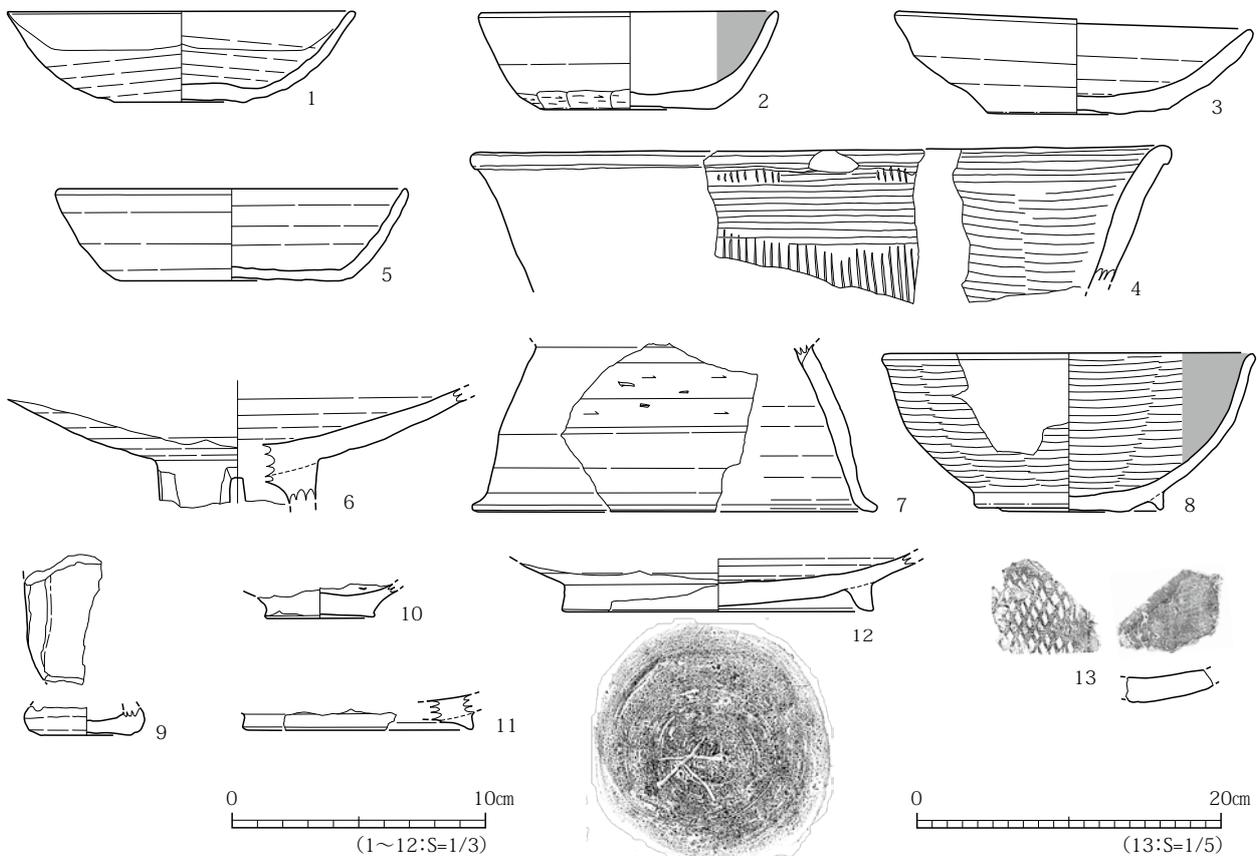
瓦は、類別できるものに、丸瓦 II B 類、平瓦 I A 類・II B 類 a タイプ・II B 類 b タイプ・II C 類がある。

【第 III 層】（図版 31）

土器、硯、瓦、石器が出土している。

土器には土師器坏・高台坏（図版 31 - 8）・埴・耳皿（図版 31 - 9）・甕、須恵器坏・高坏（図版 31 - 6）・高台坏・蓋・鉢・瓶・甕、緑釉陶器皿（図版 31 - 10・11）・碗、灰釉陶器皿・瓶がある。

硯は円面硯（図版 31 - 7）の脚部が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第 I b 層	須恵器 坏	2/3	(15.7)	(5.3)	3.6	底部：回転糸切		R-265	B15163
2	第 I b 層	土師器 坏	3/4	11.8	6.8	3.9	ロクロ調整 内面黒色 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ		R-222	B15163
3	第 I b 層	須恵系土器 坏	2/3	14.2	7.2	4.1	底部：回転糸切	32-15	R-224	B15163
4	第 I b 層	土師器 鉢	口縁部破片	(27.0)	—	—	外面：ハケ目→口縁部にヨコナデ 内面：ミガキ、口縁部にヨコナデ		R-229	B15163
5	第 II 層	須恵器 坏	2/3	14.0	8.6	3.6	底部：ヘラ切り		R-199	B15163
6	第 III 層	須恵器 高坏	坏・脚部	—	—	—	脚部に長方形と思われる透かし		R-186	B15163
7	第 III 層	須恵器 円面硯	脚部のみ	—	(16.0)	—	外面：回転ケズリ→ロクロナデ		R-184	B15163
8	第 III 層	土師器 高台坏	完形	16.8	7.4	6.3	内面黒色 内外面：ミガキ 底部：回転糸切		R-198	B15163
9	第 III 層	土師器 耳皿	底部破片	—	(3.6)	—	内外面黒色 底部：回転糸切		R-188	B15163
10	第 III 層	緑釉陶器 碗	底部破片	—	4.2	—	底部：回転糸切 底部無釉 塗ちん痕跡	32-10	R-190	B15163
11	第 III 層	緑釉陶器 碗	底部破片	—	(8.9)	—	全面施釉 内面に文様	32-9	R-191	B15163
12	第 IV 層	須恵器 高台皿	底部のみ	—	(12.4)	—	底部：回転ケズリ 皿底部にヘラ書き「大」		R-95	B15163
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
13	第 III 層	隅切瓦	破片	—	—	1.4	ID 類		R-183	B15163

図版 31 基本層序第 I b～IV 層 _ 出土遺物

瓦は、類別できるものに、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠC類aタイプ・ⅡB類aタイプ・ⅡB類bタイプ・ⅡC類、隅切瓦ⅠD類（図版31－13）がある。

石器は剥片が1点出土している。

出土層位	刻印の種類	刻印部位	登録	箱番号
第Ⅰa層	「古」A	丸瓦ⅡB類 凸面玉縁	R-217	B15166
	「丸」A	平瓦ⅡB類 凹面広端左隅	R-219	B15166
第Ⅰb層	「伊」	丸瓦ⅡB類 凸面	R-202	B15166
	「物」A	平瓦ⅡB類 凹面広端左隅	R-204	B15166
第Ⅳ層	「矢」A	平瓦ⅡB類 凸面狭端左隅	R-203	B15166
	「丸」B	平瓦ⅡB類 凹面	R-94	B15165

第4表 基本層序各層出土の刻印文字瓦一覧

【第Ⅳ層】（図版31）

土器、瓦、鉄滓が出土している。

土器には土師器杯・甕、須恵器杯・高台皿（図版31－12）・高台杯・蓋・甕がある。

瓦は丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類・ⅠC類aタイプ・ⅡB類・ⅡC類が出土している。



SX3052 上堆積層出土 _ 須恵器写真



SK3077 土壙出土 _ 土師器写真



第83次調査出土 _ 中近世陶磁器写真



外面



内面

緑釉陶器 ←→ 灰釉陶器

第83次調査出土 _ 貿易陶磁器写真



第83次調査出土 _ 須恵系土器写真

図版32
（縮尺約1/3）



SD3058・3071 溝出土_遺物写真



SI3041 住居跡出土_遺物写真



SX3070 竪穴遺構出土_遺物写真



SD3062 溝出土_遺物写真

図版 33 (縮尺約 1/3)

3. 総括

五万崎地区を対象に実施した第 83 次調査の成果を総括する。

発見した遺構には、築地塀跡、掘立柱建物跡、柱穴列跡、竪穴住居跡、竪穴遺構、杭列跡、集石遺構、土壇、溝、溝状掘り込み、整地層などがある。今回の調査では多数の遺構が複雑に重複した状態で検出され、出土遺物も弥生土器（中期中葉・榊形罌式期）から近世陶磁器までと多岐にわたるが、掘り下げをトレンチ部分に止めたことから遺構に伴う遺物は少なく、出土遺物から年代を特定できる遺構はほとんどない。そこで、外郭南辺の区画施設や掘立柱建物跡、竪穴住居跡などの主な遺構について個別にその様相を概観する。

（1）外郭南辺の区画施設について

外郭南辺の区画施設として SF3050 築地塀跡とこれに伴う整地層、溝を検出している。築地本体は SF3050 a とその積み直しとみられる SF3050 b があり、さらに嵩上げ整地層が 2 時期認められることから SF3050 c・d の存在が想定され、区画施設の変遷は a～d 期の 4 時期に捉えられる。

i. 各期の概要

各期の概要は以下の通りである。

【a期】

最初に築地塀が構築された時期で、SF3050 a 築地本体に SX3049 基礎整地と SX3051 a 整地層が伴う。SF3050 a は丘陵端部の南斜面を段状に削り出して南北幅 5.3～7.5 m の平坦な面を造成し、そのほぼ中央に築成されている。東部では削り出した面に直接、中央～西部では削り出し面を均すかたちで盛られた SX3049 上に築地本体が版築されており、基底幅は 2.7 m 前後とみられ、高さ 0.3 m 程で残存している。積手の違いは概ね 3.2 m 間隔で確認しているが、寄柱穴や添柱穴などは未検出である。築地本体の北側（城内側）には幅約 1.0 m の犬走り（SX3051 a）が認められ、本体を版築した後に付加されたものと理解した。

また、築地本体の南側で部分的に検出した SD3060 溝は SF3050 に伴う外溝と考えられる。築地塀構築以前の堆積層（第Ⅵ層）もしくは旧表土（第Ⅶ層）上から掘り込まれており、溝の堆積層に築地崩壊土が含まれる状況からみて、SF3050 a 築成当初から機能していた可能性が高い。溝には浚われた痕跡も認められるが、その上部全体が SX3054 整地層上から流れ込む築地崩壊土層で覆われており、d 期には機能していなかったと考えられる。

【b期】

SF3050 a とその崩壊土層（a 層）を SX3051 a 上面の高さ近くまで削り取り、新たに SF3050 b 築地本体を積み直す補修が東部で行われており、この時期に SX3051 b 整地層と SD3057 溝が付加されている。築地本体は高さ 0.05～0.1 m と残りが悪く、基底幅も SX3055・3056 溝状掘り込みに壊されて判然としないが、SF3050 a とほぼ同位置に積み直されていたとみられる。SX3051 b は SF3050 a 構築の際に削り出した段の北部を埋め戻すかたちで行われた整地で、SD3057 は築地北側

の排水を目的とした内溝である。

【c期】

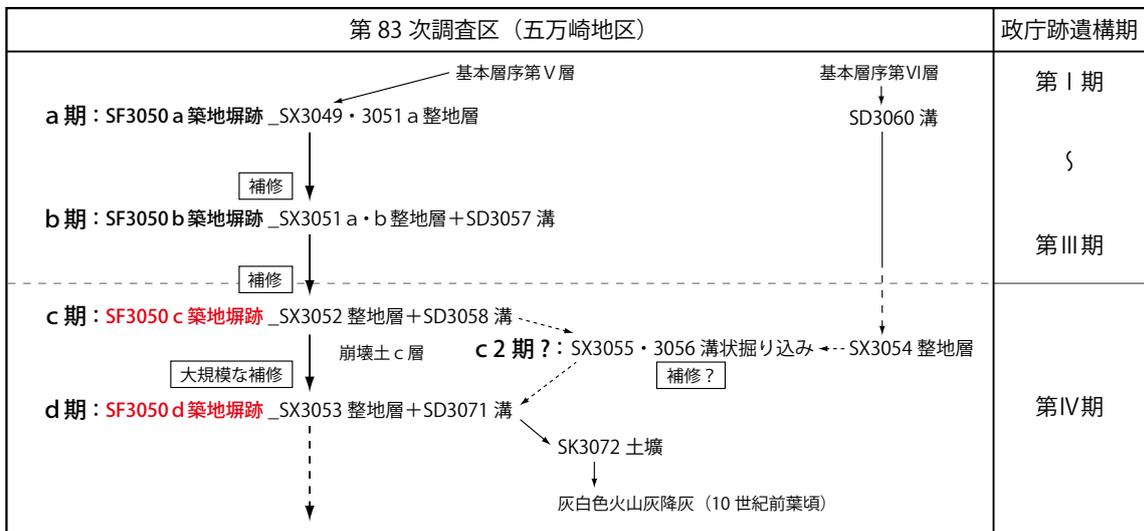
SX3051 a・b上を0.3 m前後嵩上げしたSX3052 整地層とその上部に堆積した築地崩壊土層（c層）を検出しており、この嵩上げに伴ってSF3050 c築地本体を築成する補修が行われたと考えられる。また、SX3052 上面から掘り込まれたSD3058 内溝をSD3057 とほぼ重なる位置で確認しており、内溝の位置がb期と共通することからSF3050 cの築成もほぼ同位置で行われたと考えられる。

なお、中央トレンチではc層から築地崩壊土に混じって多量の瓦片が出土しており、この層とその上部の堆積層に含まれる瓦が特に多い傾向は東壁トレンチや平面精査でも確認できることから、比較的広範囲でc期の途中に築地本体からの瓦崩落があったか、もしくはその終末期に不要な瓦の処理が行われたと考えられる。

【d期】

SX3052 上を0.4 m前後嵩上げしたSX3053 整地層を検出しており、この嵩上げに伴ってSF3050 d築地本体を築成する補修が行われたと考えられる。また、SX3053 上面から掘り込まれたSD3071 内溝も確認している。この内溝がc期の内溝位置から北へ2.0 m程移動していることから、SF3050 dもやや北側へずれた位置に築成された可能性があり、d期の補修は大規模であったと推定される。

この他の区画施設に係わる遺構をみると、SX3055・3056 溝状掘り込みとSX3054 整地層がある。SX3055・3056 はSF3050 a・b築地本体の両肩を壊すかたちで対となる位置を東西に延びていることから、両者の掘り込み底面に0.5 m程の比高差が認められるものの、同時期の遺構である可能性が高い。SX3055・3056 の埋土は、築地本体ほど細かい単位ではないが、版築状に突き固められており、その配置から築地塀補修に係わる遺構と考えられる。上部が削平されているため、具体的な性格については判然としないが、築地本体の両側を集中的に補修した掘り込みを伴う遺構で、上部に積土があった可能性もある。帰属期は、東壁トレンチの断面観察からc期の補修時以降、d期の修築以前と考えられ、c期とd期の間に更に一回補修（c2期）が行われている可能性がある。SF3050



図版 34 外郭南辺区画施設の変遷

* 赤色は想定遺構で未検出

dの築成位置はやや北側へずれる可能性があり、SF3050 a・bの南北両側に沿って検出されたSX3055・3056をd期に伴う遺構とみるのは難しいと思われる。

SX3054はSF3050の南側で確認した整地層で、その帰属期を特定することは難しい。但し、SX3054がSX3056に壊されているとみられること、整地に用いられた土がSX3053と類似し、それ以前の整地には認められない土であること、SX3053とは上面の比高差が1.0mあること、西壁トレンチで検出した瓦集中層は本整地層より下位に位置すること^(註1)、瓦集中層の組成に平瓦ⅡC類が含まれることなどを勘案すると、c期以降、d期以前で、c2期に属する可能性もある。

以上の内容を整理すると、SF3050を中心とした区画施設の変遷は図版34に示す通りである。外郭南辺の区画施設では、築地塀構築後に3回もしくは4回の補修が行われていることになる。

ii. 区画施設の年代

各期の外郭南辺区画施設について年代的な位置付けを所用瓦から検討する。外郭南辺の区画施設から出土した瓦の集計値を第5表に示した。

c期にあたるSX3052上の築地崩壊土層(c層)から出土した多量の瓦に注目すると、類別できるものでは平瓦はⅡB類aタイプ、丸瓦はⅡ類が大半を占め、重圏文軒丸瓦(型番不明)、単弧文軒平瓦(640a)、刻印瓦を含むことや胎土・焼成の特徴などから、大部分は多賀城政庁跡遺構期第Ⅱ期(以下、多賀城政庁跡遺構期を略す)の瓦と考えられる。しかし、この瓦群には第Ⅳ期の瓦である平瓦ⅡC類が約13%含まれている。これより古い整地層や崩壊土、堆積土中からはⅡC類が出土しておらず、c層で初めて組成に加わり、以後の堆積層や整地層にも含まれている。つまり、c期の築地塀に葺く補修瓦として第Ⅳ期の瓦が用いられていることになり、その補修期は第Ⅳ期に位置付けられる。なお、出土した土器類の年代観にも矛盾はない。

その結果、c2期とd期の補修は第Ⅳ期に位置付けられ、d期の整地層と内溝の一部が堆積土上位に灰白色火山灰(十和田a)層を含むSK3072土壌に壊されていることから、いずれも10世紀前葉以前に行われた補修と考えられる。d期の終末を特定することはできない。また、a期の築地塀構築やb期の補修は第Ⅳ期以前で、年代を特定することは難しい。

これまで南門西脇(第20次調査区)より以西の外郭南辺は未調査であったが、本調査区で築地塀を確認したことにより、

未調査部分を含めた外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に延び、一貫して築地塀であった可能性が高まった。正門の付く南辺が視覚的に威厳を誇示する意味で、他辺よりも重要視されていたことが窺われる。

遺構名・層位	軒丸瓦		軒平瓦			丸瓦								計
	重圏文(不明)	単弧文640	Ⅱ	ⅡA	ⅡB	Ⅰ	ⅠA	ⅠB	ⅠCa	Ⅱ	ⅡB	ⅡBa	ⅡC	
削り出し面北端部堆積層											1			1
SX3051b層中												1		1
SD3057堆積土中										1				1
SX3051b上堆積層			2										5	7
SX3052層中			3										4	7
SD3058堆積土中			2			1						3		7
SX3052上崩壊土c層	1	2	12		2		1						36	8
SX3052上堆積層			47	2	7				1		1	86	21	165
西壁トレンチ瓦集中層確認			3		1							8	1	13
SX3054上崩壊土層		1	13					1			2	15	2	34
SX3053層中			17		3						28		3	51
SD3071堆積土中			30		3		1				17		14	65

* 数値は出土点数

第5表 外郭南辺区画施設_出土瓦集計表

(2) 五万崎地区の掘立柱建物跡について

調査区北半部では、掘立柱建物跡 12 棟と柱穴列跡 1 列を検出しており、掘立柱建物群を中心とした遺構が展開している。検出した建物はその方向が政庁の中軸線を基にした発掘基準線から北でみて大きく西へ振れるもの（A 群）と発掘基準線とほぼ一致するもの（B 群）に大別され、これに建物の重複関係や配置などの諸要素を加味すると、A 群より B 群が新しい。

i. A 群

A 群は建物の方向が北でみて 30° 前後西に振れていることから、B 群の建物とは時期が大きく異なる可能性がある。確認した建物は SB3088・3089 の 2 棟のみであるが、東・西壁トレンチの地山面（第 VIII 層上）で検出した柱穴は辺が同様に西へ振れており、A 群に属する建物となる可能性が高い。このような建物は五万崎地区の丘陵部を対象として本調査区のすぐ北側で実施した第 28 次調査（年報：1977）では検出されていない^(註2) ことから、本調査区の中央以南にあたる丘陵端部の南斜面に分布する建物群と考えられる。建物の柱穴からは土師器、須恵器の小破片以外の遺物が出土していないため、時期を特定することは難しい。

但し、調査区内では A 群と同様に方向が北から西へ 30° 前後振れる遺構として竪穴住居群があり、両者には直接の重複関係も認められ、SB3088 → SI3044 → SB3089 の順に新しい。これらを大きく同時期の遺構として捉えると、後述する竪穴住居群の年代観から A 群には 7 世紀前半頃の年代が想定される。

本調査区の 200 m 程南にあたる山王遺跡八幡地区（宮城県教委：1994・2001）、市川橋遺跡八幡・伏石地区（宮城県教委：2009）では、旧砂押川の南側の微高地上に展開する 6 世紀末～7 世紀中頃の集落跡が検出されている。この集落は主に竪穴住居群で構成されており、北側を旧砂押川、南側をその支流である SD100 河川跡とそれに接続する SD5160 河川跡に挟まれ、内部が SD2050 B 河川跡、SD2208・6517 区画溝によって細分されていたとみられており、その出土遺物から中央政権や広範囲な南北双方の遠隔地とも繋がりをもった有力集団による拠点的な大集落と考えられている。

今回の発見は、この集落とほぼ同時期の遺構が旧砂押川北岸にあたる五万崎地区の丘陵部にも展開していた可能性を示唆しており、その構成要素に掘立柱建物が加わる点でも注目される。

ii. B 群

B 群に属する建物は SB3090～3099 の 10 棟と SA3101 の 1 列である。調査区内で全体の規模が捉えられるものは少ないが、南北 2 間で東西棟（東西 5 間が主体か？）となるものが多い。B 群には、柱穴の規模が一辺 1.0m 前後と大きい建物と、柱穴の規模が一辺 0.6m 以下と小さく、掘方埋土が黒褐色土主体の建物がみられ、後者の方が新しくなる傾向にあるが、SB3097 のように前者より古くなるものも存在し、その在り方は一様ではない。いずれにしても、建物の方向が政庁の中軸線とほぼ一致していることから、多賀城が機能していた時期の建物群と考えられる。

また、重複関係やその配置から同時存在が難しい建物も多く、柱筋を揃えて規則的に配置されているものはない。SB3090 と SB3092 は柱痕跡中の上部に焼土粒を含む点で一致しており、同時に存在した可能性も残る。なお、この 2 棟の柱痕跡中に含まれる焼土粒の量は比較的少なく、建物自体が火

災に遭っているかどうかは判然としない。

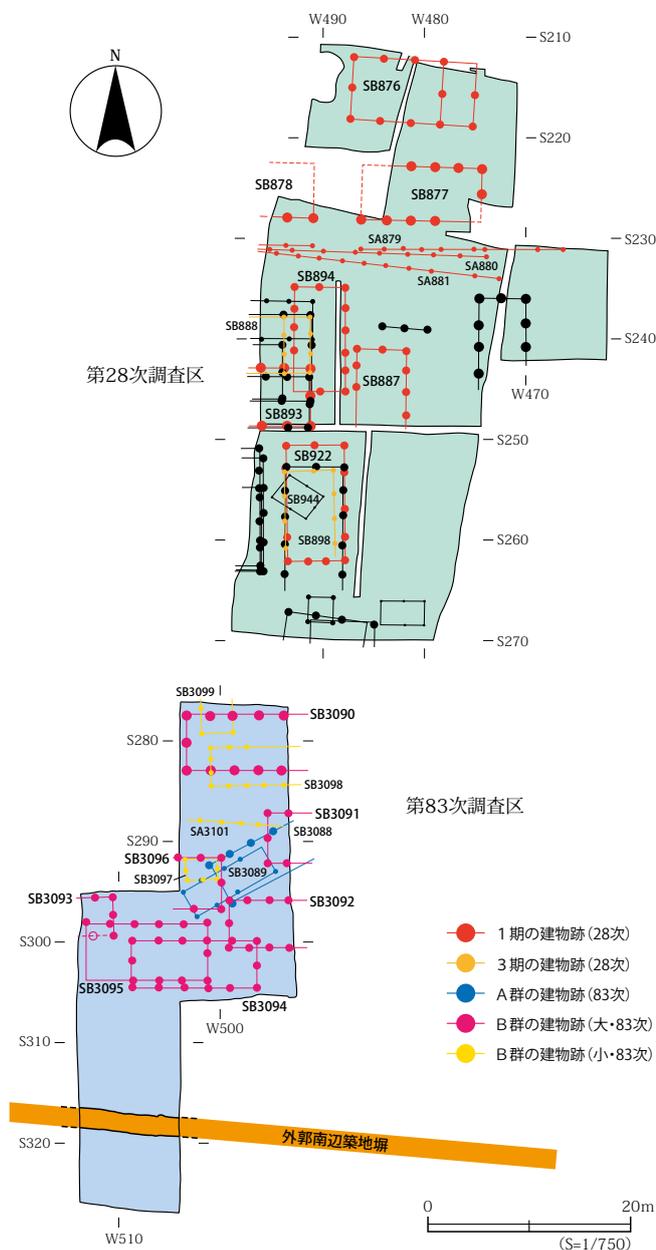
出土遺物や重複関係から年代を特定できる建物はないが、建物群の時期をある程度絞り込むことは可能である。

まず、SB3091の柱穴から9世紀後半代のものとみられる緑釉陶器碗の小破片、SB3094の柱穴から10世紀代のものともみられる土師器耳皿(図版19-1)が出土しており、いずれも遺構確認段階の出土であるが、建物の時期をある程度反映した遺物とみられる。また、SB3093~3095は堆積土の上位に灰白色火山灰層を含むSK3074土壌よりも新しい。これらの柱穴に灰白色火山灰層との直接の切り合いが認められないことや掘方埋土に灰白色火山灰が全く含まれていないこと、土壌が機能を停止した後の最終的な埋没段階に灰白色火山灰が堆積していることなどを勘案すると、SB3093~3095の上限年代は9世紀末~10世紀初頭頃と考えられる。

次に、建物群が展開する調査区北半部の表土(第I層)を含めた出土遺物全体をみると、須恵系土器の量が少なく、特に10世紀後半以降の須恵系土器はほとんど出土していない。調査区全体でみてもこの傾向は変わらず、時期的にまとまりのある遺物は第III層から出土した10世紀前半代の土師器高台坏(図版31-8)・耳皿(図版31-9)、緑釉陶器碗(図版31-10 畿内産・11 近江産)などが最も新しい。第I層や確認面からは瓦質土器や中世陶器、近世陶磁器が僅かに出土しており、これらの時期まで下る新しい建物が含まれる可能性は残るが、B群の大半はその下限が10世紀前半代に収まると考えられる。

なお、SB3094から出土した耳皿は焼成後に「介」の文字が刻書されており、官職名を指す可能性がある点で注目される。この他に城内で「介」の文字が書かれた墨書・刻書土器の出土例は1点のみで、大畑地区のSK2167土壌(年報:1993)出土の土師器坏(9世紀中葉頃)に墨書がある。

これらの状況を踏まえて、本調査区のすぐ北側で実施した第28次調査の調査成果との比較検討を試みる。第28次調査では、古代~中世の掘立柱建物跡や塀跡、溝、井戸跡、池状遺構などを検出し、この場所が



図版35 第28・83次調査区_掘立柱建物跡配置模式図

掘立柱建物を集中的に配置した重要な区域であったことを確認している。また、この調査区では9世紀後半～10世紀前半頃の緑釉・灰釉陶器が城内で最も多くまとまって出土している。

第28次調査で検出された建物群は、方向が政庁の中軸線と一致するものが大半を占め、その特徴と重複関係から、柱穴の掘方埋土に焼土を含まないもの（1期）と焼土を含むもの（2期）、埋土が黒色土のもの（3期）の3群に大別され、この順に新しく、多くの建物が須恵系土器を包含する整地層（第Ⅲ層）上に建てられていることが指摘されている。この1～3期の建物群はB群と方向が一致しており、柱穴の規模や埋土の特徴にも共通点がみられることから、両者はほぼ同時期に展開した建物群と考えられる。但し、本調査区では、B群の建物の掘方埋土に焼土を含むものが認められないこと、建物下の須恵系土器を含む整地層が未検出であること、須恵系土器や緑釉・灰釉陶器の出土量が少ないことなど、第28次調査区とは状況が異なる点もみられ、両者の建物群を一概に同時期とは比定できない部分も残る。

こうした建物群は外郭南辺築地塀の北側10m前後まで広がっており、そこから築地塀までの間は建物群が機能していた時期には土壌の埋没が進み、空閑地になっていたと推定される。

（3） 竪穴住居跡と土壌について

外郭南辺築地塀の北側（城内側）では、竪穴住居跡や竪穴遺構、土壌、溝などを検出している。これらの中で時期が推定できる遺構として竪穴住居跡と土壌がある。

i. 竪穴住居跡

SI3041の床面から出土した鉢形の土師器甕（図版22-3）と胴張形の土師器甕（図版22-2）は、その器形や調整の特徴が多賀城市山王遺跡八幡地区のSI491・498住居跡（宮城県教委：1997）やSD2050 B河川跡第3・4層（宮城県教委：2001）出土のものと類似しており、同様に7世紀前半代のものと考えられる。住居に伴う遺物が少なく、須恵器や特徴が捉えられる土師器坏類も出土していないため、明確には比定できないが、SI3041はこの頃の住居と考えられる。

他の住居では出土遺物から年代を特定することは難しいが、今回検出した全ての住居は方向が北から西へ振れており、その角度も概ね一致していることから、大枠で同時期の住居群として捉えられ、7世紀前半頃の年代が想定される。この住居群と同時期の可能性がある遺構としては、前述したA群の建物跡の他に、第Ⅴ層下の地山面で検出したSK3110土壌、SD3047・3048溝などが挙げられる。

ii. 土壌

調査区中央～南部に展開する土壌群をみると、この中でも新しいSK3072・3074の両大土壌では最終的な埋没段階に灰白色火山灰が堆積している。この状況から大半の土壌は9世紀末～10世紀初頭頃には廃絶されていたと考えられる。また、土壌の分布はSF3050築地塀跡の北側にほぼ限られており、築地塀を意識的に避けて掘られていたことが窺われることから、その上限年代もSF3050 aの構築時に求められる。土壌群の中には掘削後すぐに埋め戻されているもの（SK3087・3112）がみられ、意識的に築地塀を避けて掘られていることなどを踏まえれば築地塀構築時の土取り穴の可能性もある。その他にSK3073などの廃棄土壌もみられる。

註

註1：西壁トレンチ内ではSX3054は未検出で、瓦集中層との上下関係を直接確認できていないが、双方の検出面の標高や平面で追える築地崩壊土・堆積土層との上下関係からみて、瓦集中層はSX3054より下層に位置している。

註2：第28次調査区で検出したSB944は方向が北でみて西に大きく振れているが、3期の建物より新しい小規模な建物である。

引用文献

- 宮城県教育委員会 1994 『山王遺跡八幡地区の調査—県道泉塩釜線関連調査報告書I—』 宮城県文化財調査報告書第162集
- 宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡V—第1分冊（八幡地区）・第2分冊（伏石地区・考察）—』 宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 2001 『山王遺跡八幡地区の調査2—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書IV— 古墳時代後期SD2050B 河川跡編』
宮城県文化財調査報告書第186集
- 宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書VII— 第1分冊・第2分冊』
宮城県文化財調査報告書第218集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1977 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1976』（第28・29次調査）
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』（第62・63次調査）
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002 『宮城県多賀城跡調査研究所年報2001』（第72次調査）
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003 『宮城県多賀城跡調査研究所年報2002』（第73次調査）



SK3072 土壌出土 _ 遺物写真



SK3073 土壌出土 _ 木製品写真



基本層序第Ia層出土 _ 鍛冶関連遺物写真

図版 36 (縮尺約 1/3)

IV. 付 章

1. 震災被害の発生状況

平成23年3月11日に発生した東日本大震災とその後の一連の余震により、特別史跡多賀城跡附寺跡関係の施設・設備は多くの被害を受けた。地震の発生から被害確認、当研究所の対応に至るまでの経過記録は以下のとおりである。

- 3月 11日 14時46分、東北地方太平洋沖地震（震度6強、東日本大震災）発生→停電
施設・収蔵庫等の被害状況確認
- 3月 15日 停電解消
- 3月 16日 特別史跡多賀城内の被害状況確認→状況報告1回目
 - ※ 外郭南門跡南西側トイレの屋根の棟の漆喰の剥落を確認→使用禁止措置
 - ※ 政庁正殿基壇上面のアスファルト舗装の亀裂拡大を確認
 - ※ 作貫地区北側階段の踏み石のズレを確認
- 3月 18日 特別史跡内・収蔵庫の被害状況確認→状況報告2回目
 - ※ 館前遺跡東側斜面に地割れを確認→シート被覆による応急処置
 - ※ 浮島収蔵庫の収納棚の損壊を確認
- 3月 30日 特別史跡内の被害状況確認→状況報告3回目
 - ※ 作貫地区あずま屋の敷石のズレを確認
 - ※ 柏木遺跡の舗装道の亀裂を確認
- 4月1～7日 調査室等の復旧・整理
- 4月 7日 特別史跡の被害状況の確認
 - ※ 外郭南門・東門跡トイレの合併浄化槽の機能不全を確認→使用禁止措置
- 23時32分宮城県沖地震（震度6強）発生→停電
- 4月 8日 特別史跡の被害状況の確認→被害状況報告4回目
 - ※ 外郭南門跡南西側トイレの屋根の棟瓦崩壊の進行を確認
 - ※ 政庁正殿基壇上面のアスファルト舗装の亀裂拡大を確認
 - ※ 多賀城廃寺塔・中門階段のズレを確認
 - ※ 浮島収蔵庫の収納棚の崩壊と遺物散乱を確認
- 4月 9日 停電解消
- 4月11～21日 浮島収蔵庫の復旧・整理
- 4月 11日 被害状況確認→状況報告5回目
 - ※ 柏木遺跡の舗装道・擁壁の亀裂、「U」字溝の破損など被害拡大を確認
- 4月 12日 被害状況確認→状況報告6回目
 - ※ 作貫地区露出展示覆屋の廂柱のズレを確認
- 4月 13日 被害状況確認→状況報告7回目
 - ※ 六月坂地区遊歩道の地割れ・陥没を確認→シート被覆による応急処置
- 6月 30日 震災関連の毀損届を一括提出（多賀城市）

今回の震災では、本震後の度重なる強い余震により被害状況が刻々と変化する状態が続いた。このため、強い余震が収まった段階で被害状況確認をその都度おこない、一部では仮の復旧処置を施した。舗装の微細な亀裂や敷石のズレは、地震以前から経年変化により生じていたものも少なくない。しかし、こうした既存の亀裂やズレは今回の一連の地震により一気に増幅拡大しており、そのうち、I章に示した11箇所については、史跡管理に影響を及ぼす規模に達したと判断されたため、次年度に復旧作業を実施する予定である。

また、国土地理院の発表資料によれば、史跡周辺の基準点の変動量は、水平変動が東南に約0.33m、上下変動が下に0.01～0.02mであり、これまで多賀城跡の調査・整備に供してきた基準点も変動しているとみられる。当研究所では史跡内各地区に3級基準点35点を設置しているが、これらについても次年度に改測もしくは再設置などの対策を講ずる予定である。

2. 関連研究・普及活動

(1) 多賀城跡環境整備事業

平成23年度が多賀城跡環境整備事業は、政庁跡の再整備を目的とする第9次5ヵ年計画の2年次目となる政庁地区追加遺構表示の一環として、東脇殿・東楼の平面表示に関わる復元基壇・礎石設置等の工事を実施した。総事業費は8,104千円（国庫補助50%）である。東日本大震災の影響により工事着手時期が遅れたが、予定通りの内容で実施した。政庁跡再整備は、特別史跡を有効活用する上で最重要かつ不可欠の事業であり次年度以降も下表の計画のとおり着実に進める予定である。

年 度	整備地区	計 画 内 容	事 業 費
平成 22 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】西脇殿・西楼平面表示	8,084 千円
平成 23 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】東脇殿・東楼平面表示	8,104 千円
平成 24 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】後殿・政庁内表土処理	8,000 千円
平成 25 年度	政庁再整備	北殿平面表示・北辺基盤整備	8,000 千円
平成 26 年度	政庁再整備		8,000 千円

多賀城跡環境整備事業第9次5ヵ年計画（平成23年度実績）

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更するにあたっては、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。平成23年度における現状変更申請は東日本大震災の影響もあり皆無であった。

ただし、自然災害による史跡の毀損が多発したため、管理団体である多賀城市から毀損届が提出されている。まず、6月30日付けで、前記した東日本大震災とその後の余震に関わる毀損届が一括して出された。また、9月28日付けで、9月21～22日に東日本を横断した台風15号の豪雨被害に関わる毀損届が提出された。これらの被害に対する復旧・修復作業は、平成24年度当初予算の災害復旧事業として実施する予定である。

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続的に行っている。平成 21 年度からは、多賀城創建期の窯跡群について発掘調査を行い、造瓦体制とその社会的背景の諸問題を解明することを主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第 8 次 5 ヶ年計画に入った。本年度はその 3 年次目として、宮城県北部の大崎市大吉山窯跡について調査を実施する予定であった。しかし、東日本大震災の発生を受け、その復旧事業を優先するため、本年度予定していた多賀城関連遺跡発掘調査事業を休止した。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものであるが、本年度は東日本大震災の復旧事業を優先するために予定していた遺構調査研究事業を休止した。

(5) その他

1. 文化財レスキュー活動への参加

震災により被災した文化財のレスキュー活動に参加した。

石巻文化センター被災文化財レスキュー活動	平成 23 年 5 月 24 ～ 27 日
東松島市埋蔵文化財収蔵庫被災文化財レスキュー活動	平成 23 年 6 月 8 ～ 10 日

2. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

廣谷和也・三好秀樹 「多賀城跡第 83 次調査現地説明会」	平成 23 年 10 月 23 日
-------------------------------	-------------------

3. 各機関・委員会などへの協力

佐藤則之 秋田市秋田城跡環境整備指導委員会委員 払田柵跡保存管理計画策定指導委員会委員 志波城跡史跡整備委員会委員 多賀城市文化財保護委員会委員 史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員 角田市郡山遺跡調査指導委員会委員 第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人 ほか

4. 講演会・研究会などへの協力

古川一明 「宮城の山の寺」 山の寺研究会	寒河江市文化センター	平成 23 年 10 月 1 日
三好秀樹 「多賀城跡第 83 次調査の概要」	平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会	
	東北歴史博物館	平成 23 年 12 月 10 日
廣谷和也 「多賀城跡第 83 次調査の概要」	第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会	
	東北歴史博物館	平成 24 年 2 月 25 日

5. 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

佐藤則之（客員教授）	文化財科学研究演習
佐藤則之（客員教授）・古川一明（客員准教授）	文化財科学研究実習

3. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもって充てる。

〈職員〉

所長

佐藤 則之

管理部長

坂本 猛

《研究班》

上席主任研究員(班長) 古川 一明
 主任研究員 三好 壯明 [博物館兼務]
 副主任研究員 吉野 武
 副主任研究員 三好 秀樹
 技 師 廣谷 和也

《管理班》

次 長(班長) 武田 裕 [博物館兼務]
 主 幹 安藤 光明 [博物館兼務]
 主 幹 阿部 博徳 [博物館兼務]
 主 査 小野寺 愛 [博物館兼務]

4. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年 月	事 項
大正 11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法（大正 8.4 公布）により史蹟指定、指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5 カ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第 1 次発掘調査実施（県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授）
37. 8	多賀城廃寺跡第 2 次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査（第 1 次）開始、以後 40 年 8 月（第 3 次）まで実施、政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城附寺跡特別史跡に昇格指定
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査（第 4 次）を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置（委員長 伊東信雄） 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告 1—多賀城廃寺跡—』刊行
45. 4	研究所による多賀城環境整備事業開始
48.10	金堀地区を対象とした第 21 次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示
49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手（昭和 50 年度まで継続）
49. 8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和 54 年度まで継続）
53. 4	研究第一科・同第二科の 2 科制となる、遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表、これより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
54. 3	多賀城跡調査研究所資料 I『多賀城漆紙文書』刊行
55. 3	『多賀城跡—政庁跡図録編—』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手（昭和 60 年度まで継続）、初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出
57. 1	現状変更に伴う緊急調査（第 40 次）により外郭線南辺築地中央部で木樋発見
57. 3	『多賀城跡—政庁跡本編—』刊行
58.11	第 43・44 次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60. 9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手（平成 4 年度まで継続）
62. 8	名生館遺跡官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第 53 次調査で多賀城第 I・II 期の外郭東門を発見
63. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門—政庁間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊田野窯跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王千刈田地区の追加指定が官報告示
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開（平成 13 年度まで継続）、政庁の全貌を解明
7. 6	第 31 回指導委員会において南門—政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財（古文書）指定が官報告示
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の改名に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞
14. 8	亀岡遺跡の発掘調査に着手（平成 15 年度まで継続）
15. 3	『多賀城跡—発掘のあゆみ—』刊行
15. 6	伊治城跡の史跡指定が官報告示
16. 5	木戸窯跡群の発掘調査に着手（平成 18 年度まで継続）
17. 4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第 13 号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19. 8	日の出山窯跡群の発掘調査に着手（平成 22 年度まで継続）
22. 3	『多賀城跡—政庁補遺編—』刊行
22. 9	多賀城跡調査 50 周年記念事業開催 （木簡学会多賀城特別研究会「古代東北の城柵と木簡」、記念講演会・シンポジウム「多賀城と大宰府」、記念フォーラム「よみがえる北の都～多賀城に生きた人びと」）
22. 9	『多賀城跡—発掘のあゆみ 2010—』刊行
22.11	第 82 次調査で新たな外郭東門を発見
23. 3	多賀城跡調査研究所資料 II『多賀城跡木簡 I』刊行

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査の実績

調査面積累計	112, 333 m ²
調査費用累計	1, 080, 814 千円
指定地総面積	約 1, 070, 000 m ²
調査面積／総面積	約 10%

計画	年度	回数	発掘調査区	発掘面積 (m ²)	経費 (千円)	計画	年度	回数	発掘調査区	発掘面積 (m ²)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第4次5カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000
		6次	政庁地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750	
		7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	264				47次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	昭和60		48次	外郭南門地区	800	29,000	
		9次	政庁地区南西部	2,046	49次		外郭北門推定地区	450			
		10次	外郭西辺中央部	495	昭和61		50次	政庁南地区	900		
		11次	外郭東辺南部	660	51次		外郭北東隅東地区	500			
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	昭和62		52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000	
		13次	外郭東辺東門付近	1,600			53次	外郭東門北東地区	1,000		
		14次	外郭東地区北部	2,086			昭和63	54次	外郭東門東地区		1,000
	昭和47	15次	鴻ノ池周辺	112	55次			外郭東辺中央部(作貫地区)	500	29,000	
		16次	政庁地区北半部	1,320	平成元		56次	大畑地区北半部	1,550		
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729			57次	外郭東辺南半部(西沢地区)	500		
	昭和48	18次	外郭中央地域北部	2,937	平成2		58次	大畑地区中央部	1,470	30,000	
		19次	政庁地区北西部	2,640			59次	大畑地区中央部東側	900		
		20次	外郭南辺中央部	990			平成3	60次	大畑地区中央部		1,450
		21次	外郭西地区中央部	1,485				61次	鴻ノ池地区		150
	22次	城外南方(高平遺跡)	3,465	平成4	62次		大畑地区南半部	1,100	35,000		
昭和49	23次	外郭東地区北部(字大畑)	3,300		63次	大畑地区北半部	1,700				
	24次	外郭南東隅	2,640	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000			
昭和50	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310		65次	外郭東門北部・現状変更に伴う発掘調査	2,200		36,000		
	26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310	平成6	66次	大畑地区北西部	3,000				
	27次	奏社宮西隣市川大久保地区	660	平成7	67次	大畑地区西部	3,000				
	昭和51	28次	五万崎地区	2,310	平成8	68次	大畑地区西部・多賀城碑覆屋の修理解体に伴う発掘調査	2,650			
		29次	五万崎地区	2,310	平成9	69次	城前地区南部	2,000			
昭和52	30次	五万崎地区	1,980	平成10		70次	城前地区南部	2,000			
	31次	政庁北方隣接地区	1,980	平成11	71次	城前地区南部	2,000				
昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000		平成12	72次	外郭南門西側築地堀跡・政庁一外郭南門間道路跡	1,000			
	33次	外郭西門地区	1,000	平成13	73次	外郭南門東側築地堀跡・政庁一外郭南門間道路跡	1,800				
第2次5カ年計画	昭和49	23次	外郭東地区北部(字大畑)	3,300	平成14	74次	政庁一外郭南門間道路跡	1,000	25,220		
		24次	外郭南東隅	2,640		75次	外郭北辺中央部	500			
	昭和50	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310	平成15	76次	政庁東脇殿・後殿・北辺地区	1,640	24,463		
		26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310		平成16	77次	政庁東楼・西脇殿・南面地区		970	
	昭和51	27次	奏社宮西隣市川大久保地区	660	平成17	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700	16,610		
		28次	五万崎地区	2,310	平成18	79次	政庁一外郭南門間道路・城前地区・鴻ノ池地区	1,350			
	昭和52	29次	五万崎地区	2,310	平成19	80次	田屋場地区・政庁南西隅	930	12,752		
		30次	五万崎地区	1,980		平成20	81次	鴻ノ池地区・政庁南西地区		900	
	昭和53	31次	政庁北方隣接地区	1,980	平成21		82次	外郭東辺伊保石地区	580	11,460	
		32次	政庁北方隣接地区	1,000		平成22	83次	外郭南辺五万崎地区	640		
第3次5カ年計画	昭和54	34次	雀山地区南低湿地	1,300	平成23		84次	外郭南辺五万崎地区(予定)			
		35次	鴻ノ池南地区	900		85次	政庁正殿(予定)				
	昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	平成24	86次	外郭北辺六月坂地区(予定)				
		37次	多賀城外南地方(砂押川東岸)地区	700							
	昭和56	38次	作貫南端低湿地(緊急調査)	50							
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500							
	昭和57	40次	外郭南辺築地東半中央部(立石地区・緊急)	80							
		41次	外郭東辺南端部(田屋場東端地区)	1,200							
昭和58	42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500								
	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800								
	44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500								

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年度	対象地区	主な工事内容	面積 (㎡)	事業費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和45	政庁地区(第1期)	南門翼廊跡・東脇殿跡表示工	3,519	10,000
	昭和46	政庁地区(第2期)	正殿跡・築地塀跡表示工	7,256	20,000
	昭和47	政庁地区(第3期)	西脇殿跡・築地塀跡表示工	14,669	25,000
	昭和48	政庁地区(第4期)	北西門跡・築地塀跡表示工	9,415	20,000
		外郭東門地区	東門跡・竪穴住居跡表示工		
昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000	
第2次5カ年計画	昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	鴻ノ池地区(第1期)	南辺築地塀跡表示工	2,000	16,000
	昭和53	鴻ノ池地区(第2期)	多賀城碑周辺修景工	2,500	16,000
		南門地区(第1期)	南門跡・築地塀跡保護工		
昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000	
第3次5カ年計画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
		園路(資料館-南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工		
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
		作貫地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工		
昭和58	作貫地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工			
昭和59	作貫地区(第3期)	土塁跡及び空堀跡表示工・便益施設工・園路工	6,750	27,000	
第4次5カ年計画	昭和60	作貫地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	7,470	27,000
		作貫地区	便益施設工		
		雀山地区	緑化修景工		
	昭和62	作貫地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設工	6,130	27,000
	政庁地区	便益施設工・園路工・緑化修景工			
	雀山地区	便益施設工・園路工・緑化修景工			
昭和63	作貫地区北部・丘陵南西裾部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000	
平成元	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112	
第5次5カ年計画	平成2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成4	北辺地区北半部(第3期)	便益施設工	2,900	30,000
		東門・大畑地区東側部(第1期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成5	東門・大畑地区東側部(第2期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成6	東門・大畑地区東側部(第3期)	便益施設工	550	35,000
第6次5カ年計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地塀跡及び建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成8	東門・大畑地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成9	東門・大畑地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
		南門地区	多賀城碑覆屋解体修理工	50	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
	平成11	東門・大畑地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工		31,500
第7次5カ年計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	遺構保護造成工・排水工・法面保護工	3,800	14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	法面保護工・園路階段工・植栽工・排水工		19,700
	平成14	柏木遺跡(第3期)	法面保護工・園路工		9,300
	平成15	柏木遺跡(第4期)	法面保護工・遺構表示工・園路工・植栽工・照明設置工		9,020
	平成16	柏木遺跡(第5期)	園路広場工・雨水排水工・植栽工・照明設置工		8,266
第8次5カ年計画	平成17	案内板・標柱整備	案内板標柱設置工・既設道標解説板再整備工		15,738
	平成18	外郭北辺東北隅の木道再整備	基盤整備工・園路広場工・自然育成工	39,000	11,016
	平成19	外郭北辺東北隅の木道再整備	施設撤去工・園路広場工・施設設置工・自然育成工	39,000	9,462
	平成20	政庁の再整備	築地塀撤去工	13,325	8,514
	平成21	政庁の再整備	築地塀撤去工	13,325	8,500
第9次5カ年計画	平成22	政庁の再整備	追加遺構表示工〈西脇殿跡・西楼跡〉	495	8,084
	平成23	政庁の再整備	追加遺構表示工〈東脇殿跡・東楼跡〉	495	8,104
	平成24	政庁の再整備	追加遺構表示工〈後殿跡〉・政庁内表土処理工(予定)		
	平成25	政庁の再整備	北殿表示工・北辺基盤整備工(予定)		
	平成26	政庁の再整備	北殿表示工・北辺基盤整備工(予定)		

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	面積 (㎡)	事業費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5カ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡	第6次発掘調査	範囲確認調査	1,300	6,300
		関連窯跡調査				
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000	
第4次5カ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野窯跡群	地形図作成・発掘調査	多賀城創建期窯跡の調査	600	14,000
第5次5カ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5カ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5カ年計画	平成16	木戸窯跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸窯跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸窯跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
		日の出山窯跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
平成20	日の出山窯跡群	第1次発掘調査	F地点南側の調査	490	3,168	
第8次5カ年計画	平成21	日の出山窯跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山窯跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大吉山瓦窯跡	休止		0	0
	平成24	大吉山瓦窯跡	休止		0	0
	平成25	大吉山瓦窯跡	(予定)	多賀城創建期窯跡の調査		

4) 研究成果刊行物

① 宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報 1969』(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月	『年報 1991』(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『年報 1970』(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月	『年報 1992』(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『年報 1971』(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月	『年報 1993』(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『年報 1972』(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月	『年報 1994』(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
『年報 1973』(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月	『年報 1995』(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『年報 1974』(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月	『年報 1996』(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『年報 1975』(第 25・26・27 次調査、東外郭線南端部)	昭和 51 年 3 月	『年報 1997』(第 68 次調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『年報 1976』(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月	『年報 1998』(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『年報 1977』(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月	『年報 1999』(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『年報 1978』(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月	『年報 2000』(第 71 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
『年報 1979』(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月	『年報 2001』(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月
『年報 1980』(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月	『年報 2002』(第 73 次調査)	平成 15 年 3 月
『年報 1981』(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月	『年報 2003』(第 74・75 次調査)	平成 16 年 3 月
『年報 1982』(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月	『年報 2004』(第 76 次調査)	平成 17 年 3 月
『年報 1983』(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月	『年報 2005』(第 77 次調査)	平成 18 年 3 月
『年報 1984』(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月	『年報 2006』(第 78 次調査)	平成 19 年 3 月
『年報 1985』(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月	『年報 2007』(第 79 次調査)	平成 20 年 3 月
『年報 1986』(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月	『年報 2008』(第 80 次調査)	平成 21 年 3 月
『年報 1987』(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月	『年報 2009』(第 81 次調査)	平成 22 年 3 月
『年報 1988』(第 54・55 次調査)	平成元年 3 月	『年報 2010』(第 82 次調査、環境整備)	平成 23 年 3 月
『年報 1989』(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月	『年報 2011』(第 83 次調査)	平成 24 年 3 月
『年報 1990』(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月		

② 多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『伊治城跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生館遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生館遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生館遺跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生館遺跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月
『名生館遺跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生館遺跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成元年 3 月
『東山遺跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡Ⅶ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊場野窯跡』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡Ⅶ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡Ⅷ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月
『桃生城跡Ⅸ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 26 冊	平成 13 年 3 月
『桃生城跡Ⅹ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 27 冊	平成 14 年 3 月
『亀岡遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 28 冊	平成 15 年 3 月
『亀岡遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 29 冊	平成 16 年 3 月
『木戸窯跡群Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 30 冊	平成 17 年 3 月
『木戸窯跡群Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 31 冊	平成 18 年 3 月
『木戸窯跡群Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 32 冊	平成 19 年 3 月
『六月坂遺跡ほか』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 33 冊	平成 20 年 3 月
『日の出山窯跡群Ⅰ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 34 冊	平成 21 年 3 月
『日の出山窯跡群Ⅱ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 35 冊	平成 22 年 3 月
『日の出山窯跡群Ⅲ』	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 36 冊	平成 23 年 3 月

③ 研究紀要

『研究紀要Ⅰ』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要Ⅱ』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要Ⅲ』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要Ⅳ』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要Ⅴ』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要Ⅵ』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要Ⅶ』	昭和 55 年 3 月

④ 調査報告書・資料集

『多賀城と古代日本』	昭和 50 年 3 月
資料Ⅰ『多賀城漆紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡録編—』	昭和 55 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡本文編—』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東北』	昭和 60 年 3 月
『多賀城跡—発掘のあゆみ—』	平成 15 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡補遺編—』	平成 22 年 3 月
『多賀城跡—発掘のあゆみ 2010—』	平成 22 年 9 月
資料Ⅱ『多賀城跡木簡Ⅰ』	平成 23 年 3 月

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしよねんぼう2011 たがじょうあと							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報2011 多賀城跡							
副書名	多賀城跡―第83次調査―							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報2011							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2011							
編著者名	古川一明・三好秀樹・廣谷和也							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20120327							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市	04209	004	38 °	140 °	2011年6月14日) 2011年11月8日	640 m ²	調査計画 に基づく 学術調査
	いちかわ うきしま 市川・浮島			----- 世界測地系準拠 (GRS80)				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別史跡 多賀城跡 第83次調査	国府/ 城柵	奈良・平安	<ul style="list-style-type: none"> ・築地堀跡 ・整地層 ・溝状掘り込み ・掘立柱建物跡 ・柱穴列跡 ・竪穴住居跡 ・竪穴遺構 ・杭列跡 ・集石遺構 ・土壇 ・溝 	<ul style="list-style-type: none"> 弥生土器 土師器 須恵器 須恵系土器 緑釉陶器 灰釉陶器 中近世陶器 瓦質土器 近世磁器 硯 軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦・隅切瓦 鉄製品・鉄滓 木製品 土製品 石製品 石器 		<ul style="list-style-type: none"> ・外郭南辺の西端部で築地堀跡の存在を確認 ・五万崎地区建物群の南側への展開を把握 ・7世紀前半代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの存在を確認 		
要約	<p>第83次調査では、外郭南辺の西端部を対象とした発掘調査を実施し、築地堀跡の存在を確認した。その結果、未調査部分を含めた外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に約870m延び、一貫して築地堀である可能性が高まった。この築地堀には3回もしくは4回の補修が認められるが、最初の構築期を特定することはできなかった。</p> <p>また、第28次調査で検出していた建物群とほぼ同時期の掘立柱建物跡が外郭南辺築地の内側約10mまで広がっていることや、7世紀前半代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡などの存在を確認している。</p>							



外郭南辺西端部の築地堀跡（東から撮影）

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011

多賀城跡

平成 24 年 3 月 27 日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目 22-1
TEL (022) 368-0102
FAX (022) 368-0104
印刷所 株式会社 仙台紙工印刷
